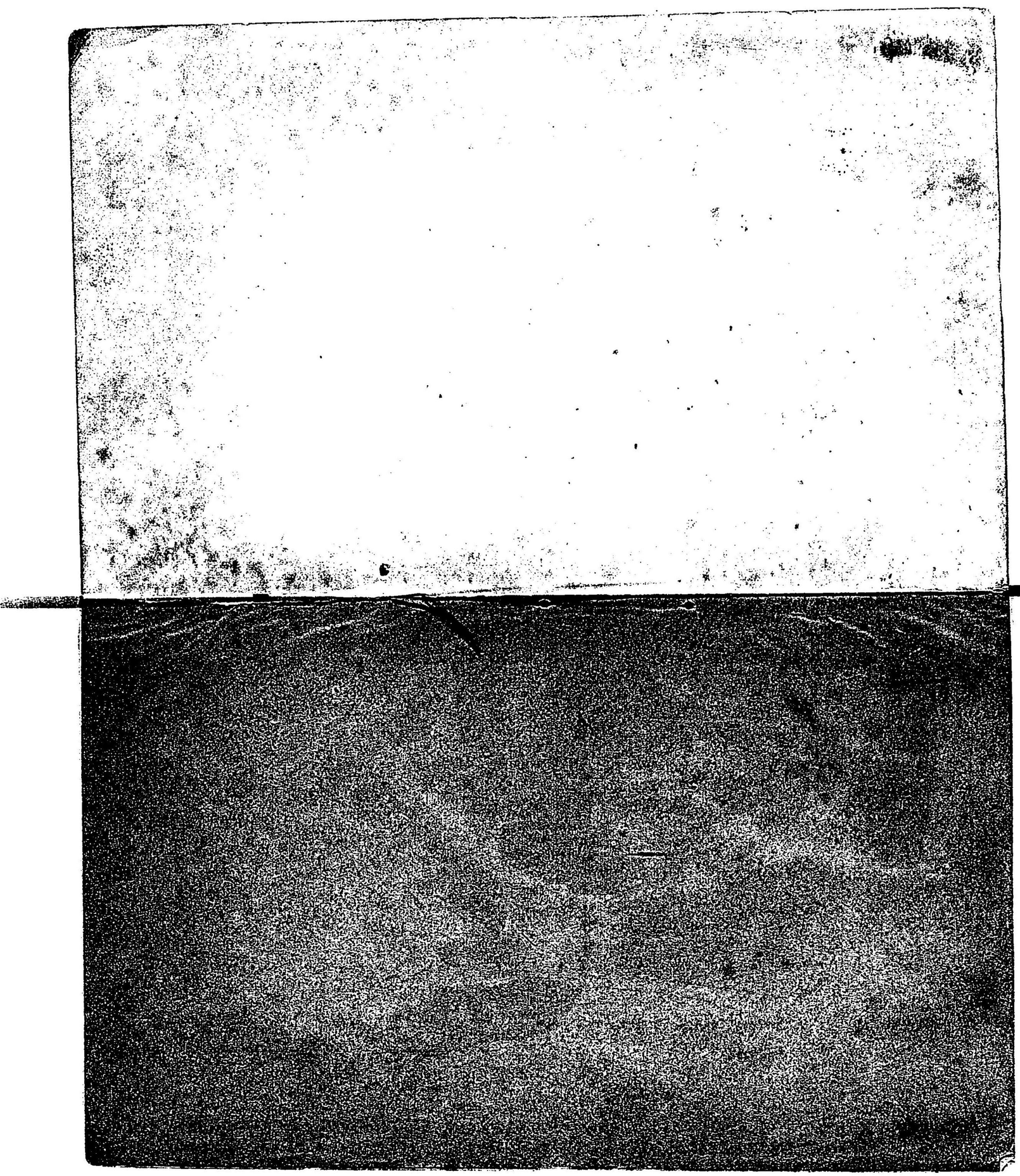
石川五右衛門
石川一口傳傳
丸山平次郎遊元



はしがき

年々歳々花相同じ、歳々年々人同じからずと云へども、人情は歳と
いへど、惡角古きを愛づるが人情、天正年間の奇賊石川五右衛門の
實説を、悧口の奇談家石川一口丈の口より語り出したる法螺吹の譚に
はあらで、御伽の料にとものせるも、同じ石川の盡きぬ眞砂の言葉の綾、
觀音經讀經とは申頃くろし、後陽川永の春の空、風流遊びの南禪寺、
山門の上に座を占めて、春の眺望は價千金とは、歌舞伎文句の小さく、
五右衛門が爲めには此價が萬兩、万々兩、眞に長閑けき御代のかけ出し語
を今の世に、目に見る如く舞臺に、寫し出せる百花爛漫、テモ鮮な讀物
じやナアと、國十郎張を幾久に、猶柴秋く津々浦々の遊覽までも、枝葉
の茂る五三の桐と、大衛の御贔屓御愛顧の程を、版元に代りて願ふものは

明治三十三年の三月三日

花に倦る、　月籠舍遊奇人しるす

特別
365

石川五右衛門

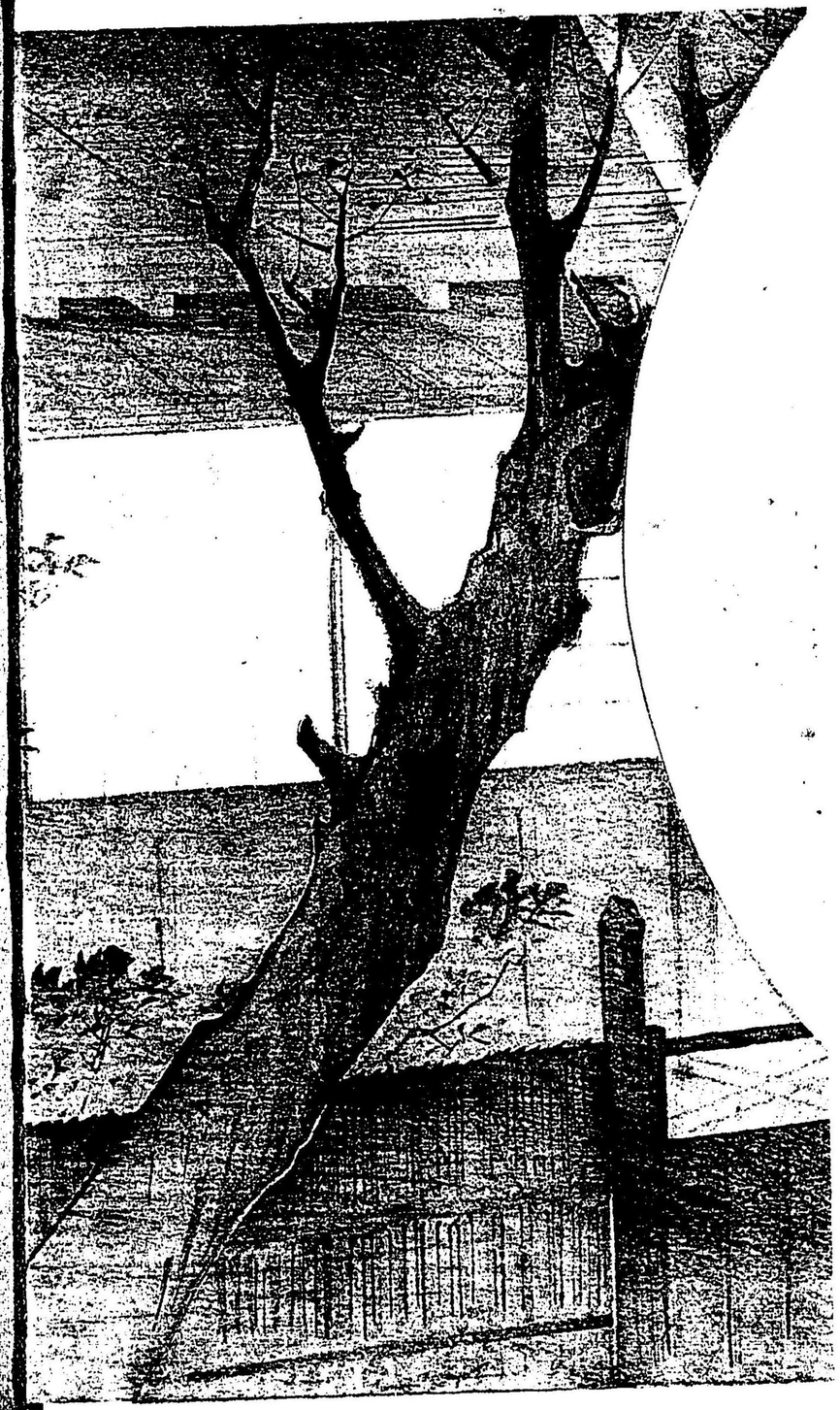
四代目石川一口講演

丸山平次郎速記

利見新吉復文

第一回

エー御厥聞に依り本日より伺ひまする講談は、唯今か一口の名前に因があるやうではございますが、敢て先祖と云ふ譯でもございません五右衛門と云ふ者は芝居狂言などで御覧遊ばすと、長い髪の澤山延びた髪を被り、青髭の怖い面で、南禪寺の山門の上で自雷泡の煙管で煙草を喫み、日和の番人見たやうに何を目的に座つて居たかと云ふやうなものでございます、又秀吉公も天下を一統なさる大器量の



ある方が、順禮姿で葛苞を背負込んで、京都で顔の売れた大胆な、南禪寺邊を何う云ふ了簡で迂路突いて居たのでございませう、是等は全然推して見るとお答への出來ぬ話しでございまする、併しながら狂言綺語のこと、講談上に探つてお話しを申すべきことではございませんが、一時は亂世を憂てし思ひ、只上を治めんとのみして下萬民の憂うることを捨て置くと云ふは甚だ不都合である、上あつての下なり、下をば撫恤つて遣らねければ天下の泰平に治まるまでには庶民は餓死をして了ふやうなことゝなる、又大名のうちでは隨分驕者增長して、上の爲めにならねば、下の爲めにもならず、只自身が榮燿榮華に月日を送るばかりの、不行跡なる者も數多ありますから、五右衛門出でゝその人々を懲して多くの金銀を奪ひ取り、其金を難澁の者に施しましたから、盜賊とは云ひでう今日に至るまで矢張義賊と稱へられまして、然う橋の上で打擲られて川中へ投り込まれる巾着切だの、後家婆さんの獨住の宅へ押込んで、長年艱難をして貯めました金銀衣類等を奪ひ、僅か一雨日の榮華の花に散すやうな驕盜兒とは、決して同日の論ではございません、開話は休題きまして、この五右衛門と云ふ者は、何地で成長つたのかとございまするに、大阪よりは殆んど三里餘り東南に方りまする、河内の國は蛇草村と云ふ處に生れ、僅か四五歳の時まで父母に別れ、ホンの遠縁の同河内の木戸村と云へる處の作右衛門と云ふ百姓、この方へ引き取られました、この作右衛門と云へるはホンの水呑百姓で、我が田地と申しては一反もございませんで、この近村の持野村、及び木戸村の大百姓に願まれては、日々〳〵農業の手傳ひに參り、僅かにその日の糊口を凌いで居る者でございまする、然るにこの五右衛門は幼きうちは五郎市と申しまして、直きこの作右衛門の向側の家は小刀鍛冶で文珠四郎と申し、弟を左文字と申し

て兄弟の小刀鍛冶でございまするが、例も親和く仕事をして居りまする、そこで作右衛門は日々農業に出まするに就け、作左お邪魔ながら四郎さん、左文字さん、又五郎市をお頼み申します　四郎「ヘイ〳〵置いとかつしやい見て居ますから……」そこで作右衛門は五郎市の昼弁當を預けて日々農業の手傳ひに參つて居りまするが、然るに今日しも正午前後のことでございまするが、五郎市は晝飯を喫つて遊び に出ました、跡で兄弟は小刀が出來上りましたから、研ぎ上げまして油引きを致し、二人とも膝枕で少時は横になつて休んで居りまする、所へ何思ひけん五郎市は　五郎「小父さん、これを一ッお呉れよ　ッカ〳〵戸外から立歸つて參り　「……」と頻りに云ひまするが、一面倒臭いと思ひますから返辭をせずに打遣つて置き寢た体をして居りまするとに手を戴せて寢息を窺ひ、密と傍に在る小刀を一挺持つて、もう戸外の方へ出掛ける樣子　左文「オイ兄貴、あの五郎市叔父樣な

小刀を一挺持つて出やアがつたぜ、仕方がないと云ひでう、詰らぬものでも切つて及を撲きはせぬか知らん、數の極つた問屋の品物、困つた奴だ」と言ひながらも眠たいから起きもせず、何んな惡戲をするであらうと、首を突き出してして樣子を見て居りまするとと、自宅へ對けて驅け込みましたが、背伸をすると片傍の壞れ箱のうへに、叔父作右衛門の雪駄が載せてありまして云ふものはありませんから、表は皮なりで製して裏にも晒し革を合はして製へたものでございまする、その雪駄を取りましてその革との合せ目の少し隙いた所へ右の小刀をグイッと差し込み、そのまゝ以前の處へ背伸をしてヒヨイと上げて置きました、左文字はその体を見て居りました　左文「兄貴、向側の五郎市は成長の後は好い盜賊になるぜ　四郎「何うして……」左文「實はこれ〳〵の譯だ、五歳や六歳の幼兒の所爲とやアない　四郎「ムヽ、ッ、他のことなら鬼も角も、然う云ふことは人間の一生の瑕、これは一番作右衛門に云つて遣らねば

ならぬ　左文「困つたことだなア、嬶やお袋が驚くであらう　四郎「驚いても云はずには居られぬ」と兄弟は話しをして居りまする、うちに早や日の暮れに程近くなりまして、鉦を撞げて戻つて参つた作右衛門「毎度お世話でございます、大きに有難うございました　四郎「オ、作右衛門さん、マア這入らんせ　作右「ハイ、有難うございます　四郎「イヤサ一寸お前に話しをせんければならぬことがあるから……　作右「ヘエー、何のやうなことでございます」と不思議さうに作右衛門は内裡へ這入つて参りました　四郎「他のことでもないが、人に疵を付けることゆゑ云ひたくはないけれど、云はずに居ては又迷惑が出来やうかと思ふから、兎も角話しをして置きますが、お前の處の五郎市はあれは捨て置いたら恐ろしいものになるせ　作右「ヘエー、何う云ふことでございます　四郎「實はこれ〳〵斯う云ふ譯で、私も驚いたのだが、疑はしくば宅へ帰つて雪駄を吹めて見さつしやれ　作右「ヘエー左樣でございますか」と顔の色を變へて我が宅へ戻り、取るものも取り敢ず早々雪駄を調べて見ますると、果して雪駄の間から小刀が一挺出ました、これは怪しからぬことゝ早速抜き取りまして、四郎のうちへ返しに参りました　作右「イヤ御せの通り如何にも入れてございました、　四郎「然うであらう　作右「併し何う致しませう、四郎さん左文字さん、

左文「サア、マア兄貴にも話しをして居たやうなことで一生の疵だで此邊に置いては追々成長するに隨ひ碌なことは見做はぬもの、寧ろ變つた厳格しい處へでも……と云うた所が未だ頑是もないことゆゑ、何うにか工夫をせにやアなるまい　作右「ヘイ……」と少時は手を拱いて作右衛門、投首を致して居りましたが、稍あつて、作右「それでは私の旦那寺の牧方の側の田口村と云ふ處に德禪寺と云ふ寺がありまする、其寺の和尚は宗圓禪師と申されまするが、そのお方でもお願ひ申して弟子にでもして貰ひましたら何うでございませう　四郎「それは成程、出家が一番だ、第一寺方と云ふものは物が〳〵散乱らず、子供などが欲しいと思ふやうなものが少ないから、然うなれば重疊の

ことである、俄し頑是もない者をば、手許を放して他人の手に掛けさすことを好きや好んで云ふでいないが、爲めを思うての話しゆゑ然うなさる方が宜からうと思ひます　作五それとやァ明日は私は農業を休んで德禪寺へ參り、和尚さんにお願ひ申して見ませう　四郎然うして見さつしやれ」そこでその翌日五郎市を待たして置いて德禪寺へ出掛けて參りました、和尚に就て右の趣きを、正躰向側の四郎の宅の小刀を何うしたとか云ふやうなことは申しませんが、只孤兒の遣る瀬なし、農業の片手には何うにも養育は出來兼ねますから、何卒お世話をお願ひ申したうございますと、只管泣き附きましたが、人を助けるは出家の本分、一人出家を遂ぐる時は九族天に生ずるの例もあれば、それでは當院へ對けてお遣はしなさるが宜からう、お世話申さうと、快く承知いたして呉れました、是にて五郎市に言ひ聞かせまするとも、稚けれども能く承知をしましたから、不通と致して德禪寺へ遣はしました、最う斯うなれば作右衛門は緣切れでござ

いますから、何うならうと後は寺任せでございまする、然るにこの五郎市は怜悧でございますから、至極禪師の氣に入り、又名前も俗名に附けて置かれぬと、宗寶と云ふ名を命けました、所が禪師のお經の稽古、又は手習と、總てのことに心を籠めて居りまするが、禪師が不在になると普通一樣の惡戲ばかりも油斷なく、自ら指揮をして居る時は露ばかりも油斷なく、禪師が不在になると普通一樣の惡戲ではございません、隣村の子供を誘つて參り、寺の庭に於て竹片だとか棒などを持たせて戰爭の眞似事などを致し、自ら指揮をして大將になるの擧動、なか〳〵普通の童子の智惠ではございません、なか〳〵男衆ぐらゐの云ふことは聞いからと寺男が制しまするとも、殘らず用ゐません、夕方禪師がお歸り時となりまするとも、殘らず子供は斷つて歸して了ひ、本堂へ來つて知らぬ顏をして和尚の出迎へをして居りますから、怒る譯にも行きません、追々成長に隨ひお經も能く覺えまするし、總ての行儀も宜しいから、和尚は一方には茶湯或ひは生花、發句、俳諧などの如きものまでも敎へて遣ります

ると、至つて好む質でございまして、十二平歳の時には可なりその道も分つて参りましたから、これこそ後世名僧になるならんと和尚も悦んで居りましたが、十三歳の年、明けて申程から、如何なる故にや頭が痛うてなりませんからと申して、毫しも剃刀は當てません十四歳の春を迎へても、髪は肩打つばかりになりますが剃りません、依て宗圓禅師は「アー宗寳や、優婆塞の頭にて一生暮して苦しからぬは空也僧より他にはないから……」と申しますと宗寳は「和尚さん、實は私は最う僧侶は止めます　禅師「エ、……怪しからぬことを申す、何故左様なことを申すか　宗寳「エ、黙々考へますれば、僧侶は誠に佛前の番人にて八檀家を欺して布施を貪り、未だ見たこともない地獄極楽を説き、人の心を和げるばかりでこれと云ふ功もなく、泰平の御世なら兎も角も、私もこの間から取り〳〵の噂を聞きますれば、今は天下二十四天下に分れ、奥州に伊達あり北國に朝倉あり、西國には大内、大伴

その他銘々大國を領する者は、皆別れ〳〵に我こそは武將なりといふ權威を震ひ、狼烟時となくして揚り、陣太鼓の音絶む間なく、今や日本は修羅の巷と殺らんも圖り難し、然るに氣の毒は庶民の者でござる、實に私見るに忍びず、これより出家を止めて盗賊となり、これより一番盗賊となる心底でござります　宗圓「エ、ッ……これはマア恐ろしいことを云ふものかな、何故左様なことを申す　宗寳「第一私は佛法なれば厭になりました　宗圓「とは又何故に……　宗寳「和尚さん、貴僧は毎朝毎夕に本堂へ行つて、佛樣に對つて何を云つてお在なされます　宗圓「何を云ふて出家の本分、經を讀んでお勤めをするのぢや、宗寳「阿彌陀如來と云ふものは、前から拜むものでござりますか後から拜むものでござりますか、宗圓「彌陀の後へ廻つて拜む者があるか、宗寳「本堂の彌陀如來を見て御覽なされまし　宗圓「何と……」と云ふの

で宗圓評師はお起ちになつて、本堂へ駈け參り阿彌陀如來を見ますれば、身體に前に向いてあつて首は後を向けてありますから、これはとばかりに驚きまして　宗圓「コリヤ宗寳、何うしたことか　宗寳「何うしたことは片腹痛し、三年前の歲末に、本堂掃除のその砌り、私小刀で膝を創り落し、繃帶を拵へてそれを貴僧は御承知なく、足掛け三年の反對に纏いで置きました、そして毎朝拜んで居る本尊に氣が注かぬとは、誠に他愛もない今日まで、　宗圓「これ故フッ〳〵と氣が催しました　宗圓「これものゝやうに思ひます、それと云ふことを致した」　と除りのことに呆れ果て、は仕たり、マア何と云ふことで佛敎は三國傳來釋迦師は後は一言も出せなんだ　宗寳「これに依つて佛敎を傳へるは容易ならぬこと、牟尼佛の敎へ、我が日本にこれまで經文然るに末々に至れば皆出家は道樂となり、只布施をば貪るのみに心を寄せ、錦の法衣を身に纏ひ、七堂伽藍の主となり、精進ものとは云ひながら、榮耀榮華にその日を送り、我が身獨りを悅ばせ、佛菩

薩の敎へを背き、敎藥を旨とするやうな出家の如き馬鹿なものを見做ふのいフッ〳〵厭になりました、併し長らくの間お世話になり、親にも勝る大恩は忘却仕りません、私時節參ればお禮を申すことも出來ませう、隨分ともに師の御坊、長命をして下されまし」　と言葉短に云ひ置いて、風呂敷包みと何か棒鞘に等しきものを携へたまゝ、振り向きもせず宗寳はこの寺を飛び出して了ひました、これより出て參りましたは、南都へ通ふ暗峠に連ける十三峠と云ふのがございます、その麓に松尾村と云ふ處がございまして、其村に居る大太郎と申して樵夫山賊を生業として居る者の方へ出て參りました、

宗寳「大太郎さん、御機嫌さん　大太「イヨウ宗寳さん、何と云ふ風でございます、貴僧は月代を無暗に延ばして肩打つばかり、上へ上げり髮が結へさうぢやアござんせんか　宗寳「ハイ、最う私は寺を放り出て遣りました　大太「負け惜しみの強い放り出たと云ふことがありますか、放り出されたのでせう、宗寳「イエ〳〵　眞實放り出て遣つたの

で……ッ……　大太「それでは何をなさるお積りです　宗寛「貴下の處の生業を教へて貰はうと思つて參りました　大太「私の方の生業……イヤサ樵夫山賤にならうと仰しやるのですか、出家をなさつて居た貴下がそんなことが出來ますか　宗寛「イエ、私は樵夫山賤なぞをしたいと云ふのではございません　大太「そんなら何を……　宗寛「イエ、貴下の内證の方のね」と指を曲げて見せました　大太「こりやア飛んでもないことを仰しやる……　宗寛「大太郎、隱すな、此品に覺えがあらう」言ひながら風呂敷を開き、取出しましたる棒鼈の短刀、宗寛手に執つて熟と見ろい」ー大太郎はこれはと許りに驚きました　宗寛「ヘッヘッ、指折り算へば八年前、乃公が丁度七歳のとき、頃しも七月盆前の、軒の提籠の踊り時、午睡をしたいと思ツたが、見付けられては叱られるゆゑ、本堂の樣の下へ蓙を敷きヂットツ忍んで寢て居るとき、早や刻限も午刻下り、例もの如く柴を拾ひ、ノッ〳〵と出て來たは、大太郎お前ぢやわい、寺男衆に頼んで茶を貰ひ、涼しき風に吹かれながら、本堂の樣で辨當を遣はして貰はうと、獨言して辨當の木綿賣、話しをしながら双方その樣で辨當を遣うて居たが、樣の下ではこの宗寛が、聞いて居るとは露知らず、愈〳〵行かうと云ふときに、そんなら今宵はヅミのヅミの歸途、堂で會はうと二人の話し、その時は考へたが、扨ては盜賊には牧方の長者和泉八郎右衛門、堂と云ふのは田口村の地藏堂であらうと思つたゆゑ、密かに夕方拔け出でゝ、地藏堂に居るとも知らず自波の、辰の夜半に仕事をして、ズッしり背負つて出て來た二人、然うして上で別れるとき、懐中に双物があつては物が云へぬ、籠燈の下へ埋けて置かうと、土を堀つて埋めて置いたこの腰の刀、刀身の際に南無妙法蓮華經と、七字の血流しを彫込んであるこの短刀、覺えがあらう大太郎　大太「エ、ッ……　宗寛「ヘッヘッ、すりやあの時に探しに行けば、

秘蔵の短刀は紛失して居たが、ぢやアお前さんが取つたのか　宗實へ
ッへッ、七才の年から目を着けて、考へて置いたこの宗實、今から、
貴様の仲間に入れるが　大太イヤ、恐れ入りましたと云ふのは他で
もございません、この五郎市は怪力がございまして、稚い時から力
量衆人に超ゑ、稀代不思議の力のある男で、大太郎と云へども侮り難
いのでございますから　大太陪分事柄に依ればお前さんに從ひますま
いものでもないが、併し何う云ふ御了簡か　宗實然ればさ、私の望み
は縱令和泉八郎右衛門が豪家でも、田地持の百姓でも、多寡が町人
で卑劣のないもの、そんな者方へ盜みに這入ツて、僅かな金銀財寶
を奪ひ取るやうな小さいことは好まぬのだ、堂々たる大名のうちに
も隨分甚い盜賊は澤山ある、然う云ふ曲者の金銀を奪ひ取り、難澁
な者に施行して遣りやア、縱令盜賊と云ふ名を付けられて、末始終
は上の手に掛つて仕置は免れずとも、十人に悪う云はれても百人に
賞められたら、三千石五千石の賜を貰うて、軍人となつて戰場に功

を顯はすよりも遙かに優ることよ、と、踈て私ア出家のやうなものを永
くする氣はなかつた、雜兵槍持から出世り、名のある大將に仕へ、
限りなき働きを致して、何卒上は萬乘の君の寵襟を安んじ奉り、下は
萬民の塗炭の苦しみを助けて遣りたいと、十二の歳から思つて居た
が、何うも今の時節では、大名に仕へた所が普通のことで立身出世
は覺束ない、縱令三千石五千石貰ふ身になればとて、戰爭の時は兎
も角も、平常我が身に從ふ者は五人か八人、そんなことぢやア思ふ
に任せず、素破明日にも變事あるときは、千と二千の一味のないて
とにやア何うすることも出來ないから、そこで先づ足掛りとして貰
樣を味方に引き入れて小賊輩を從
取立てよ、又日本のうちで野武士
のだけに世の中を横行り、死んだ
が家臣石川小文吾の後胤なるゆゑ、
宗實、私の先祖は豫ねて聞いて居る、六孫王經基の家來、紀有恒
今より我が名を改めて、石川小

文吾友助と名乗るから、乃公と心を協せて大太郎、一番働く氣はないか」松尾の大太郎も賊なから一器量ある者でございますから、然々宗寛の話しの樣子をば聞きながら、ヤット顏を見て居りましたが如何にも一器量優れて居りますし、殊に大膽、自分の思はくなどゝは遙かに勝る大きな膽力でございますから、こりやア一番この人のふことなら立てゝ見やうと思ひましたから大太「何うせ汚れた大太郎、如何にも頭と敬ひませう」小文「ムヽ、それぢやア乃公の云ふことは合點が行たか」大太「ヤ、心魂に徹へました」小文「ぢやア心を改めて大切に食客に置け」大太「そんな挨拶があるものぢやございません」小文「人前は叔父甥、内實は手下と頭だぞ」大太「承知しました」小文「その代り盡夜の別ちなくこの小文吾に劍術を仕込め」何が何うなつたか皆目分りません、居候飯は喰れ、劍術は敎へ、その上この人に從ふと云ふ馬鹿な話しのやうではありますが、先方にそれだけの器量がありますから、手許に置いて内證は小文吾殿〳〵と奉て〳〵居りました、

そのうち追々大太郎と心を協せて居る者も近寄つて參ります、今日しも一人ドッサリと風呂敷包みを背負ひ込み「アーお暑うなりましたな大太郎さん」大太「ヤアお出でなすつたか大和の木綿屋さん、マア一服しなされまし」「有難うございます」荷物を傍に置き「ドレ内裡へ這入つて麥茶なりとも一杯御馳走になつて來やう」とその儘ズツと内裡へ這入りますると、火鉢の側に大胡座、頭の髮は束ねたなり紐で結ひ、木綿棒縞の單衣に小倉の帶を卷き挾み、麥茶をガブ〳〵飮んで居りますは例の小文吾でございまする「ヤア大和の木綿屋かい、何しに來た」「オヤ、お前さんは田口村の德禪寺の宗寛さんじやアございませんか」小文「コリヤそんな坊主奧い名前を云つて呉れるない、乃公アての客だ」「エヽッ、しておいては何うなすつた」小文「寺から放り出て逃つたが、安樂なことぢや居られないから、寺は此方から放り出て逃つたが、安樂なことぢやわい、併しての方の件は上首尾かな」と指を曲げて見せました、"木

綿屋は驚きまして　○「太太樣さん、宗鑑さんは飛んでもないことを申しますせ　大太「イヤ行かん〳〵、最う本音を表はした、貰はれて貰はれ樣〳〵だ　○「エ、ッ……そんならお前は……　大太「素より頭と尾注意をして置いて呉れりやア可いんだのだ　○「そんなことなら一言注意をして置いて呉れりやア可いもの……　大太「乃公も初めは驚かされたから、次手に驚かして遣らうと思つて默つて居たのだ　○「そんな性の惡いことがあるものか、併し頭、私は大和の國は壺阪の佐五七と申す者でございます　小文「ム、、目を掛けて使うて遣るわい　○「イエ、私は芋ではございません　小文「ハ、、、同類があるなら報して置け　○「心得ました」これより壺阪の佐五七は直ぐに一同の者に話しを致しましたから、祕宮の十郎和泉の半藏なぞと云ふ一騎當千の賊どもも皆小文吾に從ふことになり、後に至つて五右衛門は三十六人と云ふ勝れた所の手下が出ました、衛門の四天王と云ふは、強い弱いは扨て措きまし來ましたが、そのうちの四天王と申しまする、チロイと御覽を乘りまする

第二席

扨てその年も八月となつて參りました、見月前後と云ふものは秋風ソロ〳〵と吹き始め、何となう好時節、戸外から野猿を背負ひ身輕の身裝、弱に輕杉頭には淺黃の頭巾、腰には長くもない刀を一口帶しまして、竹の先に綿の鞠のやうなものゝ附いたのを持つて遊つて參りましたが　狼遊「ハイ大太郎さんお久し振り、一寸お顏を見に參りました　大太「オ、來なさつたか佐太夫さん、又何處ぞから御招待を受けなすつたのかな　佐太「ハイ、此度は當國の正覺寺の島山六郎重義殿からのお招きに應じ、太夫の國太夫もこの頃は劍術が上手になりましてな　大太「オ、左樣かなと喉がグウ〳〵鳴り始め、最う私はお宅の門まで來る流れて居る水を飲むのを樂しみに、此處まで來るのを待ち兼ねます

わいな　大太「サア〳〵、山から出る水は無銭でございますゆゑ、何程なりともお喫りなさいませ　佐太「御免なさいませ」と漸う船を傍に下し、そのまゝ裏へ出て行きました、然るに火鉢の側で寝転んで居た小文吾はムク〳〵と起き上り　小文「叔父さん　大太「何じや　小文「叔父さん〳〵」と云ひながら庭へ下りて来て手招きを致しますから、大太郎はツオ〳〵側へ参り　大太「何でごんす　小文「ありやア何者だ　大太「イヤありやア臭八間です　小文「ムヽ、ウ、仲間ぢやアねえか　大太「ありやア紀州の湯浅の人で佐太夫と云ふ野猿遣ひ、大名方へ出て行くと彼処に居るあの國太夫と云ふ猿が、人に剣術を遣ふさうで、それを大名方は見て悦びなされ、そんなことを大名の楽しみに遣るのでごんすわい　小文「ハヽア、道理で野猿坊に國太夫と云ふやうな人間の名前が付けてあると思つた、して正覚寺の畠山と云ふ大名は何の位ゐ所領のある大名か　大太「一萬石でございます　小文「一萬石……一萬石の禄を忝うして居ながら、己が家来と野猿坊とを、武士が第一とすべき武芸をば、目前に於て仕合をさせ、楽しんで居るやうな馬鹿な奴があるものか、実に大太郎、乃公やア少しく所存があるからその様をば見て遣りてえ、何とか乃公の身体をば、その佐太夫と云ふ人に頼んで、伴れて行つて貰うては呉れまいか　大太「それは此方の得意の話し、頭お行きなさる了簡ならゴテ〳〵はごんせん、承知しました」少時経つと佐太夫は水を飲んで内裡へ這入つて参りました　佐太「アー忝い、スウとして心地の快さ　大太「マアお掛けなさい　佐太「有難うございます　大太「時に佐太夫さん、お前さんにお頼みがあるのですがな……　佐太「へエー、何でございます　大太「他の事でもごんせんが、実は此処に居るこの小文吾と云ふのは、私の為めには遠縁に当るものでございますが、稚い時分から百姓家へ奉公に遣つて置きましたが、兎角百姓を厭うてこの間も逃げて戻つて来ました、七八ツも打殴はして親方へ返さうとは思ひましたが、何うあつても厭だと云ひます、で何になりたいと段々尋ねて見ると、乃公やア大名に奉公をして両刀差す

者になりたいと何處までも參りますので、併し私はこんな樵夫山賊のやうなことをして居りますから、武家なんどにやア到底貴樣はなし、それゆゑ實は右忠左考して居りましたが、今貴下のお出でなすつた所から思ひ付きました、何卒伴れ歩いて下さつて、縱令お足輕でも搆ひませんから、然う云ふ方の方へ奉公にでも欲しいと云ふ人がございましたら、この小文吾奴を何卒一ッお世話をして下さる譯にはなりますまいか 佐太「へエー左樣か、然う思召しがあるなら委細承知しました、如何にもそんなら私がお世話を致しませう、幸ひ今日は口開き、畠山樣へ伴れて行くと致しませう 大太「それは何うも有難うでございます、ヤイ小文吾、湯淺の叔父さんが伴れて行つて遣らうと云はつしやる、汝アその野猿を背負うて正寛寺へお供をするかい 小文「ハイ、叔父さん伴れて行つて下さい 大太「そんなら汝ア從いて行つて温順しうして何處ぞのお足輕衆へでも奉公に遣つて貰へ、汝れのやうな奴は最う〳〵困じ果てゝ厭になつて了つたわい、衣類を

一枚着換へて行け」とこれから奥室へ伴れて這入つて衣類を着換へさせるとき 小文「なア大太郎 大太「へエー………… 小文「手始めは好いけれど、盗賊に行くその乃公が、野猿坊を背負つて行くツてはなことは餘り感心しねいな 大太「イヤそんなことを氣にして居ちやア行けません、

小文「へ、、、、」笑ひながら態と尻垂れ帶に結び、奇妙な姿をして例の國太夫を箱諸共背負ひました 小文「それでは小父さん、お供しませうかな 佐太「オヽ、背負つて呉れるか、アー怜悧な子ぢや、大太郎さん悦びなされ、私は少々人の相を觀ますがな、この子は後世出世をしますぞ、甚いものになりますわい」この佐太夫の人相は能く中りました、後世日本一の盗賊となり、三千有餘百の手下を從へ、大膽不敵の者となるのでございます、人相もこの位ゐ見違うたら確かなものでございます、扨てこれより同國正寛寺へ出て參りました御城内へ通つて參りますると、近世の城廓から見れば他愛もない粗末なもので」その證據には太平記などを見ますると、新田の家來篠

塚伊賀守が一日に城郭を十三落したと云ふことが出て居ります、飛道具とては弓矢より他になきに、只あの人が豪傑であつたゆゑ、鍛の棒でも携へて叩き壊したのでございませうが、それでも一日に十三ケ所も打落せることなら餘り確かな普請とも云へません、尤もこの正覚寺は楠正成の頃はひは、八尾別當顯幸と云ふ人の居られました処で、誠に粗相なる城でございます、それ〳〵取次を願ひまして お上の耳に觸れますると、少時控所に待たせ置けとのこと、刻限参れば呼出しになりましたから、そこで佐太夫は小文吾を伴れて御前へ出ますると、並居る諸士、並びにお裡方をお傍にお控へなされ、男女列を正しての御見物でございます、小文吾は何のやうな馬鹿なとするであらうと、チツと見て居りますると、例年ともこの野猿の相手は横田新作、片山勘兵衛と云ふての兩名に極つて居ります、それは双刀の者でなければ遣れませんから、片一方は畜生でございますから、降參つたなどと云つたつて分りやア致しません、これに勝わ

ラと致しますと、右の手で木刀を携へ左の手の爪を立てゝ掻き撮りに參ると云ふ、劍術にない手を出しますから、屹度馴れない者が遣ると引掻かれて怪我をするに極つて居りますから、そこで今日も横田、片山の兩名が相手と云ふことに極りました、すると佐太夫は國太夫〳〵と野猿を呼びますると、これは能く人の眞似をするもので人間の語音が通じまするものと見えて、手許へ參つて身体を佐太夫の自由に任せまする、そこで稽古羅紗を着せて袴を穿かせ、小股立を取上げて後顧巻をさせ、細やかなる木刀を持たせまする、そのうち横田も姿を改め、木刀を携へて其處へ出ましたが、互に目禮を致した所は至極面白い風でございます、程經て位取りをなし、ヤツと聲を掛ける、その可笑しきことは實に腹を抱へるばかり、お裡方及び一同の方々は思はず噴飯しました、少時は圍ふと申上げたいが圍へません、背が遁ひますから、兎角野猿は先方の足下ばかりを望んで打込んで參りまする、然は朝へ此方も

打倒して遣らうと思ひますから、野猿の頭上を望んで打下しますると人間と畜生が飛び違へる樣は餘程稀代でございまする、ずるうちに疲勞が廻ると、例の如く左の手を放して爪を立てゝ奇々妙々な面をして人間の方が根負けをします、すると野猿は手許へ參つて頭を一ツ殿はしました、此方は例年叱られ馴けて居りまするから、木劍を其處へ投り出して兩手を合はして拜みますチャン〳〵坊主が日本人に掛つたやうな擽梅でございます、これに得心したものか、指示をして笑ひ出しました、誠に恥ち入る話しでございまする、入代つて次の者が云ますると、同じく右の如く、然るに遙か此方に見て居られましたる畠山重義「佐太夫、餘程國太夫は武術が上達つたのう 重義「三ヶ年以前とは餘程上達いたしたわい、今日横田、片山の兩名を立所に打つなどは餘程旨く相成つた、この上は余が一ツ國太夫に對うて見やう」この時小文吾は心中に馬鹿な奴だと思ひました、併し家來のうちに誰れ

か諫言をするものもあるであらうと見て居りましたが、誰れ一人として止める者なし、主も主なら家來も家來、斯樣な者に一萬石も足利は與へて居ると云ふのは武運の末だ、こりやア盜賊に限る、到底武家になつた所が無益でもあると、六郎重義は、後顧卷をして手許に近寄り、木刀を提げて 重義「國太夫卒さ參れ」佐太夫は國太夫〳〵と呼びまして手を突いて辭儀を致させ、然らばと互に位取りに掛らんと致しまするとはキツキツと叫ぶなり、後の方へ逃巡をして佐太夫に抱き付きました、そこで小文吾は「何さま、馬鹿なやうでも大名の位のある人は又格別、畜生如きの遠く及ぶべきにあらず、これ位ゐの價値がなければならぬ筈、縱令小さな領地でも領する人は領するだけの資格のあるものだわい」と小しく心に感ずる所がありますから、尚もその樣を眺めて居りまするとと 重義「佐太夫、他の者とは事異り、余は一城の主ゆゑ、畜生も少しは遊盧いたすのであらう」と仰せられました

是で佐太夫が一口乗の了簡でおんましたら「御遠にござりまする、君は君だけに畜生も恐れるのでござりませう」と答へたら事なく済んだのでございますが、この者五萬石十萬石の大名へは始終出入をしで居りますから、大名は少しも恐れません、お離掛りになることも度々ございますから容へに支へるやうなことはございません佐太御意にござりまする、これまで諸侯様の前へ度々お目通りを致しましたが、只の一度も御前に於て辟易いたしたことなき國太夫、然るに今日御前に對へば斯く怖き恐れ、手前の膝に抱き付きまするは、恐れ入りまするが御前の腰に帯びさせ給ふお佩刀は、餘程の御名刀と存せられまするが、如何なることにござりまするや（原註ム、此はこれ我が先祖畠山秩父庄司重忠が舎弟、畠山六郎重清、鎌倉源氏山の御旅館にて、右大將頼朝公より拝領せし鬼丸と名くる名刀である佐太御意にござりまする（原註ム、何さま、然らばそのお佩刀を恐れましたものと思はれまする、然らば此刀をそば此方へ取り置かう」

と小姓を呼んでお渡しになりました、すると國太夫はズン〳〵進んで出まするから、これを見た小文吾は「ハヽヽヽこの馬鹿野郎、問ふ奴も無作法なら話す奴も大笨棒、こりやアあの佩刀に價値があつたのであるが、本人には著しも價値のない奴、手始めに彼の鬼丸をば此方が盗めて遣らう」と乾と性根を据ゑました、然るに國太夫に對ひ卒さ勝負となりまするとと、例の如く打合うて居るうち、折節稍代な面体をして牙を鳴らすこと度々〳〵有繋の重義も少しく恐れる氣味あつて、ヒヨイと油斷を生じ野狼は飛び上るなり畠山殿の頭を礎と打らました、一万石の大名が野狼に頭を打殴はされ木剣を向方へ投げ出して「降參つた〳〵……」なれども降參つたと云つても分りませんから、擲げツンボに打つて來まする、横田、片山の兩人はこれを見て「御前、これでござります〳〵」と手を合はせることを數へました（原註ム、こと重義も仕方がないから兩手を合はして野狼を拝みました、すると指示をして牙を鳴らして笑ひ

出しました、小文吾は愈々愛想が盡きましたから、今晩は一ツての城内に足を留め、何うにか工夫をしてもの鬼丸を盜めて遣らうと、愈々心中にその工夫を凝らして居りました、併し大名が畜生に打たれたことゆゑ、餘り心地は快いことはございません、なれども畜生をば叱る譯にもなりません、臍て事終てますれば以前の控所へ引取り、御沙汰を待つうち大判二枚を包んで下し置かれました、その上、結搆な所のお料理が出まして、小文吾も諸共頂戴しました、彼是れするうち早や日も暮れまして、今宵は城内にて一泊せよとの御沙汰ゆへ、臍て寢床を布べて貰うてりました、小文吾諸共控所にて寢むことになりました、所が酒の機嫌か佐太夫は、枕に就いたかと思へば前後も知らず高鼾、我れを忘れて寢入つて了ひましたが、なか〳〵寢られぬのは小文吾、佐太夫の枕頭に在る腰の刀を、密と寢床から出でゝ手に取上げ、灯の側で眺めて見れば、別段これと云ふ程の刀ではございませんが、始終大名方へ出入をして居るだけに、正眞銘ひて居る刀も差しては居りません、獨り肯頭きその腰の刀を據へ、密かに控所を抜け出でゝ、裏手へ廻つて參りますると、山から落つる水勢激しく濺へ劃けて落ち込んで居ります、その音物凄きばかり淺瀬深所を見て置かねばならぬと、裸体となつて濺へ飛び込みました水練は田口村に居りました時分、淀川の流れに飛び入つて稽古は十分達いて居りますから、なか〳〵確かなものでございまする、十分穩子を見定めて上へ上り身体をば拭ひ、衣類を着て例の一刀を腰に差し、密かに裏口へ忍んで參りまして、此處を主公の寢所ならんと思ふ處に目を着けましたが、なか〳〵塀があつて容易に這入ることは出來ません、月明りに眺めて見れば切戸口のやうなものがありますから、力任せに押して見ますると、怪力の小文吾と云へどもなか〳〵開きません、そこで帶を解いて確りと帶の端へ腰の刀を脫鞘のせぬやう柄と鎺の處とを括り付け、エイッと云ひさま塀越しに柵の枝へ打掛けまして、それを傳りに塀を越え疋を掛けて、帶を傳ひながら

雖なく堺を撃ち破り、刀を外して口に咥へて枝上より飛び下り、切戸口の處そばこの一刀にて切つて取り、自由に開くやうに致し置き、秋のことゆゑ涼しのお障子、宝噪て様の方へ忍んで参りまするとも、尤もこの時分は蚊帳と内を見れば銀銀を釣つて寝て居られまする、これ幸ひと小文吾は忍び入り、云ふやうなものはございませんでした、銀銀の側へ近寄つて様子を見れば、裡には絹張行燈の灯も微かに、お妾と枕を並べて前後も知らず白川夜船、畠山六郎殿は熟く寝入つて居られます、枕頭には盞間見て置いた鬼丸の一刀が刀架に懸つてありまする、近寄つて参つた小文吾は、これを取上げ鞘を抑ひ、灯に透して熟々眺めで見れば、その様至つて不細工な作り方でございまする、ユヽマリ笑うて精神を抜して見て居りまする、この時六郎殿は目を覚されますと、ヤヨ〳〵風が吹き込んで参りますから、頭を上げてもヨイと見れば此は、如何に、枕頭にて一刀を引き抜いて行

んで居るは、未だ若年者とは云へどその様最と凄く、眼中飢く色淡黒く、宛然鬼をも挫ぐばかりの勢ひの者、ヘッと驚き飛び起きて、此は曲者よ狼藉者と呼ばんとする折しも、振り向きさまに小文吾は忽ち手に持つたる鬼丸の一刀にて、ヤッと云ひさまその場へ首を打ち落しました、この物音に驚いて目を覚したるお妾は、現在主公が右の仕合せ、有繋女の悲しさに、驚きながら怖ち恐れ、ブル〳〵慄へて居りまする、小文吾は「女中、お前方には彼是れはない、疾く早う逃げさつしやい、歴を立てると命がない、妾「ハイ〳〵……」と云ひながら起たんとすれど女の身の思ふに任せず、婆長の衣類ゆゑ寝衣の裾を踏んでハッとその場へ倒れました、思はずキャッと驚揚げましたから「ヱヽイこれまでは……」と背から胸まで逆に突き貫しました小文吾「ヨヽウ、なる程切れるわい、除程の銘刀、野猴の恐れるも道理なり」と独笑して居りまする、所が紙門一重次の室で宿直をして致し居りましたは、例の横田新作、片山勘兵衛〳「御前〳……」と次

室から駈け出ました、見付けられては一大事と、手許に有合ふお妾の衣類を行燈に着せ掛け、灯を隠して暗黒となし、左の手で鼻を押へ右の手に携へたる鬼丸の一刀を後方へ隠し「近う〳〵……」と聲を掛けました（新作「御前、お醒がお鼻に掛りますが、お風邪でもお召し遊ばしましてござりまするか　小文「近う参れ（新作「ハヽッ……」進み寄るを呼吸を見澄し、探り斬りに顔雪に斬り付けました、何かは以て堪るべき、その場へ撲と打ち倒れまする、折から今一名も遁つては困るぢやアない参り（勿兵衛横田、何うした、こんな處へ寝て了つては風邪でもお召し遊ばしましてござりまするか　小文「近う参れ（新作「ハヽッ……」進み寄るを呼吸を見澄し、探り斬りに顔雪に斬り付けました、何かは以て堪るべき、その場へ撲と打ち倒れまする、折から今一名も遁つてはか、コレ新作、何うした」と押せども突けども動きは致しません、そりや然うでございませう、胴と首とは分れて居りますもの……何う致したかと近寄つて参るを、同じくヤッと云ひさま胸から背まで突き貫いて、難なくその場へ斃して了ひ、遂にその儘逃げ出し、再び以前の佐太夫の寝て居る處へ取つて返し「小父さん〳〵、サアお逃げて下さい（佐太「ヤア小文吾か」と寝惚眼で妙な面体を致し（佐太「何

したのぢや　小文「私は今宵當城内の様子を探り、畠山さんの首を斬り落して、鬼丸の銘刀を盗み出しました」聞いて喫驚佐太夫は「マア飛んでもないことをして下された小の野猿を忘れては相成らぬと、傍に寝て居る國太夫を背に負ひ、これより外へ飛び出しましたが、迂路突く佐太夫を小文吾は「小父さんこれへ」と手を取つて塀の方へ伴れて参り、そのまゝ塀へ突き附めました、無論佐太夫も紀州生れの人ゆゑに、水練には十分達して居ります、野猿を助けて一生懸命、激しき水流を泳ぎ出し、小文吾諸共城内を扱け出で、水門を破つて塀より上り、そのまゝ先に佐太夫を逃して、跡に殘つて小文吾は、城内の方を振り向き大音聲「當城内へ忍び込んだるは、盗賊の巨魁石川小文吾本則と云へる者、只今畠山六郎重義を撃て立退くなり」呼はりながらそのまゝ正寛寺を逃げ出しました、の所が小文吾も頻りに息苦しくなり、ものゝ半里も来たかと思ふ頃、路の傍に一ツの森

がございますから、これ位強と其の中へ逃げ込み、旨々と首尾好く鬼九は手に入れたが、追手や掛りは致さぬかと、森の外を透して見、するとき、片傍の淡暗所より「誰れじゃ」と聞を掛ける者がございまする　小文「エ、ッ……」と小文吾は驚いて鬼丸の柄に手を掛けて居ります、此は何者でございませう……。

第三回

○イヤ喫驚さつしやるな小文吾殿、佐太夫でござる　小文「オ、ヲ、渇茂の小父さんか　佐太「甚いことをして下さつたな、私は何にも知らずにお前を伴れて行つて、畠山様の御城内でものやうな騒動を為出し て呉れ、度を失うて此處まで逃げて來たが、最う二進も三進も動けませんゆゑ、國太夫を負うたなりこの森のうちへ逃げ込みましたがしてお前は怪我はせなんだかね　小文「その儀は小父さん心配して下さるな、決して聊かも怪我はしません、定めてお前さんは驚きなすつたであらうが免して下され、群しい話しは松尾の大太郎の許で致しますから、兎も角も……」と扨て大太郎方へ戻りますると　小文「イヤ最う他うでござんした　これより松尾村へ同道して參りました一萬石の領地を與へるなどゝは、足利の天下の變東ないのも有理なことだ、何ぞ目欲しいものでもあれば仕事をしやうと思つたが、それと云ふものもなかつたゆゑ、ヤア乃公が一生の差料にしやうと思ひ、夢ひ取つて來たのはこの一刀　大太「オヽ、然うでござんしたか、それは一向本意ないことでござんしたな　小文「併しそんな事は扨て置いて、高宮に壺阪に和泉を呼びに遣つて、これからこの佐太夫の方へ遣はし、一家を片附けて家内があれば迎へ取り、早々逃す工夫をして遣らねと、何れ畠山から追手が掛るであらうから……　大太「イヤ承知いたしました」と直ぐ彼等の隱れ家へその事を報せまする と、委細承知と右の三名は夜を日に繼いで紀州の湯淺へ立越し、佐太夫

の使ひとなつて家内を連へ、且つ諸道具萬端の取片附けをして、淺より船に積んで大阪まで送りました、斯く致し置いて佐太夫に右の趣きを傳へ、迎へに來つたる女房に會はせますると、佐太夫も少しは安堵の思ひを爲し、佐太アーヤレ〳〵私も當生を追ひ廻して、これまで諸侯樣方へ出入をして、世を安く送りましたが、斯樣なことの出來たのも、當生に無理な藝を仕込んで苦しめた罰が報うたのでございませう、最うこれからは道具萬端を賣拂ひ、夫婦の者は六十六部となり、諸國を廻つて身の罪滅ぼし、最うこの野狼も逃して遣りませう」と人間に物云ふ如く野狼に言ひ聞かせ、暗峠の方へ逃して遣りし、荷物萬端を賣佑なし、それを路用として大阪を後になし、斯くて夫婦はこの邊の寺の住職を賴みて出家得道をなし、心安く諸國行脚に出で行きました。

小文「扨て大太郎、その他の者、何うしたものであらう、豫て乃公の所存はお前方にも話した通りだから、こんな山麓の聞狹い處に住所

を構んで居ては、到底大きな仕事は覺束ない、今日本で名のある野武士とでも云ふのは誰れ〳〵でございます、私等は商ひに出て歩き廻りまするが、未だ一度も會つたことはありません、この時高宮の十郎は「然れば云ふ者がありまする」この者はなか〳〵普通ならぬ野武士と聞きます、併し此人は容易に話しにやア乘りますまい、又松浪友九郎と云ふ者奥州に在れど、路遠ければ思ふに任せず、四國は伊豫の燒山に丸山の燒石坊と云ふ者ありとは聞きますが、始終出歩いて在下にはふのは、信州は伊奈郡伊奈ケ嶽の山中に、木曾川彌八と云ふ者があ居らぬ勝の樣子、先づ今差當つて頭が行つて相談相手にしやうと云ると聞く、これこそ文武兩道の達人、足利の世の政治を憂てく思ひ手下を引き纏めて野武士となり、隱れて居ると云ふことですから、先づその人を賴めば力にもなつて呉れませう　小文「然らばこれより登るとしやう」と、これより松尾村の一家を取片付けて、四名の者を

引き伴れて信州伊奈ケ嶽へ出て参り、木曾川彌八に面會いたし、申を打明けて自分の所思だけを話しますと、彌八もハッと膝を打ち「何さま何うもお前さんは人の上に立つ人だ、一々お前さんの云ひなさることは私の胸に適中する、如何にもそれなら頭と頼み、又ですながら私の覺ねて居るだけの文武の道はお前さんに傳へませう」劍道を傳へてその人を要とすることは可笑しいやうに聞ねますするが、これ器量があるからでございます、越後の謙信でも喜平次の以前、本莊越前守の周旋に依て、宇佐美殿河守の許へ伴れ參つたる、時、喜平次の相貌を見てこの人必ず大將となるべき器量ある人と見込んだが故、自分は文武の道を傳へて遂に大將と仰いだと云ふことがあります、欽て宇佐美も俱に名が出ました、これ人を見る所の器量があつたのでございます、彌八も小文吾は一器量勝れたる者にて、後に大勢の者の上に立つ者と見ましたゆゑ、我が頭と仰いだのでございまする、斯して晝夜寢食を忘れて小文吾は彌八から文

武の道を傳へて貰ひました、早やそのうちに追々と月日を過ごし、既に小文吾も二十歳の外へ一二歳越しましたから、今は劍道も除程達し、この上は何卒いたして忍術を學びたいものと種々に心を痛めましたが、何分にも賊の身のことゆゑ思ふに任せず、そこで彌八と相談いたし、一人にて伊奈ケ嶽を抜け出で、遂かちず忍術を盜覺り立歸るまでのその間は、何事も狐りに手を動かし、過ちを爲出す勿れと云ひ置いて出で行きました、お話し轉つて茲に伊賀の國は名張の片傍なる山田の里を云へる處に住居を致し居りますのは、忍術のことは毎々申先生にて百智三太夫と申す仁でございまする、忍術のことは毎々申上げまする通り、人皇五十六代清和天皇の御宇、始めて紀有經が鬼州へ修行に參つたる際、我が家來諸共覺ねて戻つたものでございまして、京都へ立歸つて主君六孫王經基へ申上げましたる所、密して武家には傳へざるやう致せよとの仰せ、依てその當時は決して武家ではこれを學んだものはございませなんだ、然るに年經るに随ひ、

石川五右衛門

人皇九十代の頃はひに至つては、追々これを武家方にて知る者が出來り、既に後醍醐天皇に忠勤を盡しましたる楠正成の家來、板持三郎はこの忍術を學びて他の者にもこれを傳へ、楠の家來のうちには二十餘人も忍術に勝れた者のありましたことは、さま〴〵の書にも見えて居ります、それより八方に擴がり、信州では小枝那木流、越前敦賀では甲賀流、伊賀では百智流とそれ〴〵擴がりました百智流は一名伊賀流と申しまして、就中一番有名いのでございます、その伊賀流の家筋に當るのはその頃はこの百智三太夫、然るに盜上方などにはこの忍術を能くお學びになる方がありますから、始終京都へ對けて歎へに出られます、尤も宅にも數多の門弟もありまするが、入門をするにはその主人の何某と云ふこと一々記し、京都へ出でゝ雲上人の手を經て、時の執政の許可を經て、始めて入門を許すと云ふ位なものなので、なか〳〵これを學ぶには餘程手數なものでございます、三太夫は月のうちに十日は家來を伴れて京都へ出

石川五右衛門

向けられまする、「別段公卿方から頂くものは、金銀では頂きません」けれども、下し置かれますものは結搆なものをば拜領いたしまする文助と云ふ家來に兩掛を擔がせ、山城の木津川堤まで參りまする、左を取卷き「ヤイ待てッ、汝ア伊賀の名張の片邊、山田の里に住む百智三太夫と云へる者であらう、三日に上げず京へ出て公卿へ出入を致し、さま〴〵な高價なものを貰うて來ると云ふことは、確かに聞いて居る、きり〳〵兩掛の中の品を出せば可し、服と吐せば仕方がない、掛換のない命を取るぞ」三太「イヤ〳〵老年寄つた三太夫、素より代物を惜しいとも思ひません、望みに任して差上げませうが私の所持するこの代物は、お前さん方に進げても何にもならぬ、何れ一品として賣拂ひました所で、皆印しがあるものゆゑ直ぐに役人に聞ひて、賣つた者は兎も角も買うた者は即座にお取上げ、目の利いた道具屋なればこそ求める氣遣ひはござりません、無益なことゆゑマア

お止めなさる方が宜しからうをば離る奴かな、クヅ〳〵言はずと縛り上げろ」と主立つた者が指圖を致しまするとうちに三太夫、文助の兩人を高手小手に縛めました、是でございます芝居でするやうに忍術が自由自在に行はれるものなら、指を二本握つて「死後昇天、破羅刹蘇破羅刹……」と云つてドロン〳〵と消えて了ひさうなものでございますが、そんな譯に行くものぢやアございません、尤も指を二本握つて人間が消えて了ヤア、江戸廿屋の若い者は毎日消えて了ひます それ相當な行をせんければ、決して術を施すことは出來ないものだ さうでございまする、今は樹の空へ縛り上げられ、只これまでと三太夫は觀念を致し、毫しも屈する色なく覺悟を定めて居りまするが家來の文助は「ヤアモン賊の方々、欲しいものがあるなら皆お持ちなさつても拂ひません、私は縱令死にましても厭ひません、年を老られた旦那樣、斯樣なことをされましては到底身體が保ちません

○「エヽイ、何の新のと入らざることを言はずと縛り上げろ」と主立つた者が指圖を致しまするとうちに三太夫、文助の兩人を高手小手に縛めました、是でございます芝居でするやうに忍術が自由自在に行はれるものなら、指を二本握つて「死後昇天、破羅刹蘇破羅刹……」と云つてドロン〳〵と消えて了ひさうなものでございますが、そんな譯に行くものぢやアございません、尤も指を二本握つて人間が消えて了ヤア、江戸廿屋の若い者は毎日消えて了ひます それ相當な行をせんければ、決して術を施すことは出來ないものだ さうでございまする、今は樹の空へ縛り上げられ、只これまでと三太夫は觀念を致し、毫しも屈する色なく覺悟を定めて居りまするが家來の文助は「ヤアモン賊の方々、欲しいものがあるなら皆お持ちなさつても拂ひません、私は縱令死にましても厭ひません、年を老られた旦那樣、斯樣なことをされましては到底身體が保ちません

お慈悲お情け、お助けなされて下さいませ　○「喧しいわいこの一文奴め、ギヤア〳〵吐しやア主人を首め汝等まで殺して了ふぞ」云ひながらも何かワイ〳〵云つて居ります、所へ向よの方より霜降小倉の輕袴に黒餅の衣類、袈裟形の風呂敷包みを連尺に背負ひ、無反の大小刀落し差しに致し、右の手に松明を持ち、草鞋穿きにて出掛けて參つた一人の武士、キヤア〳〵叫ぶ文助の聲を聞き、早くも手許へ近寄つて參りましたが、不圖樹の空を見れば、此は怪しからぬ二人の旅人を吊り上げてありますから、氣の毒の至り何者の所爲なんと、一少時イんで樣子を見て居りまする、折から淡暗より二三名の小賊輩バラ〳〵と立ち出で　△「ヤイ〳〵旅武士、汝等の知つたことかおやアねへ、チヤツと早う彼方へ行け　武士「イヤ、武士はものゝ憐れを知ると云ふ、人の難儀を見捨てゝ通り過ぎる理由はない、定めて貴樣等は賊の類ならん、金子が欲しくば遣りもしやう、この者を助けて取らせよ　△「エヽイ、忌圖〳〵吐すと斬うして遣るぞ」と喝な

る一刀引き抜いて、斬らんとするを身を引外し、忽ち手に持つ松明にて、一人の小賊の横面を殴き倒しました、そりやア松明で面を撲かれりやア心地の快いものぢやアございませんから、キヤツと叫んで後方へ倒れました、猪牙才なりと右と左より二人の小賊、粗忽付いて來やうとする奴を、イケ面倒と松明投げ捨て、左の手に持つたる鎗扇をば早くも右に取直し、一人の者の脳骨を、砕けるばかりに打ち据ゑました、眼から火の出る思ひをなし、撲とその場へ捨り倒され、又一人の曲者は、左の足で陰嚢をヤツと云ひさま蹴上げました一た、この手腕をば眺めて居た頭やうなる者「汝れなか〳〵な手並の奴、この上は乃公が引導授けて遣らう」と朦なる大刀抜き放ち、両断になれと斬り込むを、心得たりと引外し、鯨骨の鐵扇を取つてヤツとばかりに利腕打てば、ガラ！得物を取落し、無念と思ひしか大手を擴げ「卒や來い組まん」と飛び掛るを「心得たり」と此方の

武士、早くも扇子を口に咥へ、無手と互に引組んで金剛夜叉の力を出し、腰なる帯に右手を掛け、左手に襟髪引抱へ、エイツと大喝一聲共、傍の土手下へ頭顛倒と投げ付けました、この有様を眺めて以前の二三の曲者は、後をも見ずして逃げ行きました、そこで手早く右の武士は、二人の者の縄を寛めて樹の空から下しました 武士「聴かし迷惑いたされたであらう、疾く支度を致されよ」 両人の悦び何に譬へん言葉もなく 三太丞う存じます、手前はこれより伊賀の方へ立退る者……武士「其は何より幸ひのこと、我等も寓はその伊賀とや らへこれより探ね參る者、然らば御同道仕らう 三太「併しこれから向方は南都へ參るまでに、これと云ふ旅宿もなし、奈良まで參らすは なりますまい 武士「それは一向苦しうござらぬ、御同道申上げませう」とこゝにて三名伴れとなり、南都へ出て參つて、小刀屋へ泊りました、初めてホッと太息を吐きましたが、三太夫は毎々泊る宿許なれは宿屋も馴染「これは名張の旦那樣でござりまするか」と最と叮嚀

な待遇、又その三三太が同道しましたる此方の武士ゆゑ、極く叮嚀に待遇しまする、左右いたし居りまするうち酒肴の用意をして持ち參りました、これは三太夫が世話になつた禮の爲めに一盞出したのでございまする　三太「サアお那ひでなくば一獻何卒お過し下され　武士「これは何うも御心配に預かり、氣の毒千萬に存じます、折角の御馳走なれば頂戴仕りませう、左は然りながら尊公は伊賀の名張だと云ふことを宿許の者に承りましたが……　三太「左樣、武士「その名張の片邊に百智三太夫と云ふ先生がお在でなさることを御承知はございませんか　三太「これは不思議なことをお尋ねなさるものかな、その百智と云ふは拙者でござる　武士「何、そりやア御貴殿が百智氏とな、アーお、い、實は手前は京都へ參り、閑院宮樣に賞緣を以てお願ひ申し、何卒許可を得て百智先生に從ひ、猥りに許し給はざるその忍術を御傳授に預かりたいと存じ、態々參りし拙者でござる、何をか隱さん拙皆ことは、備前の國は御野郡岡山の城主、浮田備前守直家の家臣、

秋山彌左衛門の悴同苗彌助と申す者でござる、我が父彌左衛門は主君が戰場馬場にお出しの節、必ず肌身離さず御所持おる一寸八分の圖孚提金の觀世音菩薩、これをお預かり申し、日頃その觀世音をお殿り致す役なるが、同藩中にて田川强太夫と云へる者あり、屢々御前に於て父彌左衛門と軍學の論よりその問答に敗けたるを意恨に思ひ、全く强太夫の所爲なるか、大切なるお預かりの觀世音紛失いたし、父彌左衛門は主家に對して申譯これなしと、腹一文字に掻割いて相果てましたることにでさります、私そのことを無念に存じ、百方手を盡してさま〴〵取調べると云へど、更にその所在相分らず御家老長船殿の仰せには、それを詳しく調べんとなれば京都へ參りたるべき雲上人に賴縁を求めて許可を願ひ、伊賀の國は山田の堂々たる奥義を極めなばこの岡山へ立歸り、田川の許へ忍び込み、觀世音の所在を探り、愈々彼れが奪ひ取つたものと見るときは、證據を

押へて願ひ出で尋常の勝負をせよと呉れぐ〳〵も仰せに就き、早瀬玄蕃殿の許しを受けて國許を出で、晝夜を分たず京都に上り、閑院の宮樣に實證を設けて願ひ出でたる所、本日百智は京都を立ちしとの趣き、ヤレ殘念や、今一足の違ひにてその先生に會はるべきものを遺憾の至りと取るものも取り敢ず、跡を慕うて參りし途中、不思議に先生にお目に掛り、この事をお願ひ申すも、これ師弟の緣あつてと〳〵身に取りましては如何ばかりか忝う存じ奉ります。あはれ武士の情けを思召し、我等に對けて、親を思ふの志をお察し下され、御傳授下さることはなりますまいか」と搗てゝ加へて賴み込みました、三太夫は少時頭を垂れて聞き居りましたが、少時あつて 三太「ア何さま切なるお賴みゆゑ意に應じたくは候へども、何か一ツの證なくては、猥りに許さぬ家傳の忍術、何か證據はござるかな 彌助「その儀は素より、御覽下されと」と懷中より出しましたる錦の袋、裡より一通の書付を取出し 彌助「卒ざ御覽下されたし」と百智へ手渡し致しますると、三太夫は取つて押頂き、披き見れば奉書の紙に麗々と記してあります「一此者儀我が藩中に相違これなく貴殿の忍術指南に預かりたく賴み入り候、百智殿へ、浮田備前守直家」と記して立派なる印を捺してあります、如何にも堂々たる大名の御諚筆の認めたるに相違なしと思ふばかり 三太「何さまこれは主公の御捺印ならんが其許も只今語らるゝ通り、我が家の秘傳は公卿方の許しがなければ公然お傳へ申すことは相成らぬ、然は云へ、看す〳〵木津川堤にて辛き難に出遭ひし處を、お助け下されし其許の御厚志と云ひ、ことりやア三太夫も困つたことである、併し彌助殿とやら、一失禮ながら我等諸共山田の里へお出であり、水仕男の眞似でもして、人知れず毎夜〳〵お學びなさるお心はござらぬか 彌助「ハ、ツ、水仕男は愚かなこと、如何なる眞似を仕りましても…… 三太「すりやアノ身を落してもこ…… 彌助「仰せの通り 三太「左樣なればこの南都にて武家の姿を變へ我等諸共山田の里へお越しあれ」と是にて姿を變へ、大小刀を隱し

て葉苞に入れ、人知れず三太夫に從ひ、遂に南都を立つて伊賀の國は名張の邊なる山田の里へ參りました、これから名を彌助〳〵と文助もての事を含み、諸共水仕男となつて働いて居りますから、夜が明ければ日の暮れるまで引きも切らぬ門人も氣附かずに居りました所が夜に至れば三太夫は、密かに彌助に百智流の忍術を傳授に及び自分も夜寢所に入りますと、枕頭に頻りと稽古に及ばせますから、自然と一卷の書に經めやうと云ふ了簡ですから、紙筆を取寄せ、これを記して一卷の書に心を寄せて居りまする、然るに光り、幸しの油斷もなく忍術のみに陰に關守なしとやら、斯くて二年の年月は夢の如く暮しましてござ いますが、斯る人物でございますから、最早忍術の奥義を極め、確かなものとなりました、是にて忍術は十分に相分り、今はこの地を出立したいと思ひますが、妙なもので人情として、へエ左樣なら長々大きにとは參りません、何とかそこは道理を付けて厚う謝し得心の上で別れたいものと尤も現の敵を討たねばならぬと云ふこと

は前にも述べて居りまするが、餘り三太夫が心を懸けて呉れますから、その情に絆されて立ち退き兼ね、何うしたら可からう、やらと、そのことのみ心に懸つて居りまする、然るに百智は女房のお安と云ふを手許に招きまして 三太「のウ安や 安「ヘイ……… 三年頃、發子を迎へねばならぬがこれと云ふ人もない、併し斯う云ふことは男親より女親、誰れかれば と思ふ人があるならば、 三太「娘のかよも最遠慮なう申すが可からう 安「イエ、旦那樣、妾も一向左樣なことには氣も付きませず、又かよにもそのやうな心もないやうでございますから、數多門人のある中にもこれぞと思ふ者も乃公の鑑定に適うたのは、 三太「左樣か、然らば乃公より申すがないが、お前方は詳しいことを知らぬから、不思議に思ふでもあらうが、實は宅の召使ひの彌助と云ふは、備前岡山浮田家の落士にてあれは秋山彌助と云ふ立派な武士ぢや 安「ヘエー、左樣でございますか 三太「そこであの人は大望のある人ゆゑ、今この處で發子にする

と云ふ譯には行かねど、將來は何卒あの位ゐな人と夫婦にして遣れ
ばかよも幸福、此方も滿足、依て一應かよを呼んでこの事を云うて
見ては呉れまいか　やす「ハイ、左樣なれば然ういたしませう」とこれ
から娘を呼んでその邊の話しを致しますると、最う二十歳近うなつ
ては居りまするが、男とは違うて女は謹愼の深いものゆゑ、お賴み
申しますとは心に浮んで居りましても、然らは得に申しません、な
れどその實彌助は容貌醜からず、誠に忠實しく働き、殊に武士の
胤から出でたる人にして、世を忍んで居ると聞いて見れば、尙更慕
はしく存じましたゆゑ、何うやら本人も悅んで居るらしうございま
すから　やす「それでは其方は今宵彌助の居室へ罷り越し、篤と樣子見
て參れと、云つたのは親から許しの上で、彌助の心を見る積りでご
ざいます、所が娘も餘り憎からぬ彌助ではございまするが、左樣な
ればと直ぐに受返事も能ひません、只眼の縁を赧らめて、袖を口元
に當がひ、羞しいやら恥かしいやうで、何とも云へぬ素振りにて、

母親の後方へ密と顔を隱しまして　かよ「阿母アさん……」と申した限
りで後の言葉も出でません　やす「父よりお許しなされた程に遠慮に及
ばず行くが可い」とのことでございます、併し一口などは不器用も
ので斯う云ふお話しは何うして可いやら分りませんから、この位
ゐの處で御勘辨を願ひまする、然るにその日も暮れて夜に入ります
れば、娘のおかよは密かに寢所を忍び出で、ソツト彌助の寢所へ遣
つて參りますると、高鼾を發いて枕を外し、鼻から堤燈の二個も振
下げ、寢床から手足を投り出して、放肆し亂體を仰向にしたやうな寢姿
なら、阿波から這出しのお三どんでも肝を潰して逃げ出しませうが、
晝間は荒々しき水仕男の眞似をすれば、夜に相成れば寢衣の上から
帶を卷挾み、寢も遣らずして一心不亂に小聲で讀書を致して居りま
すから、娘は障子を開けて　かよ「彌助さん……」と云つたからとて敢
て部屋のお里ではございません　彌助「これはしたり、御息女かよ殿で
ございますか、夜中何用あつてこの處へお出でになりました　かよ「へ

……彌助「へゝア、最う年頃になるなされ、男盛しやとのお心かも不義は何れも禁ゆの嚴しいもの、私は當屋敷へ御奉公申しましたは息女と不義をしやうと心得て勤めて居る者ではござりません、丹波の國なら卒さ知らず、伊賀の名張で女の夜這ひ、呆れ返つたことでござる」娘は只一言も能ゐ言はず、ホロ〳〵涙を酌しまして、如何に情ない男だとて、餘りと云へばお情けない、斯う云ふ人と知つたなら、縱令父のお言葉とは云へ、斯く忍んでは來なんだものを、情けないやら恥かしいやら、阿呆らしいやおまへんか……とも正躰無く逃げ出して母親の寢所へ參り、睦ひは致しませなんだらうが、早々に組み付いてワッとばかりに泣き出しました「コレ娘や、何うしたか」と「阿母アさん、これ〳〵の情ない致方」「ホヽヽヽ、それでこそ眞の武士でもらう、妾等は女のことゆゑ分らぬが、然う云ふ心の人ゆゑに、阿父さまも惹はしう思召したのであらう、夜が明けたれば阿父さまにこのお話しを致しませう、何も羞ぢ入ることはない、親の許さぬ不義淫奔ならお叱りももらうなれど、現から許したことゆゑに、叱られることはないからその心配には及ばぬこと、さアッと寢たが宜しからう」早やその中に明けの鐘、可愛〳〵と啼て起き出で含嗽手水を遣ひ、朝餐の支度に掛らうとする折から、父の三太夫も寢床を出で、手水を遣うて元の座に着き、朝餐を濟まして煙草一服燻らす折から、姿を改め旅支度、小刀を前半に着け、大刀を右に携へ出で參つたる秋山彌助、佩刀を片傍に置き、中指突いて三太夫に對ひ、彌助「長々の間お世話に預かり、それのみならず種々の御厚志實ふるに物なく、有難う存じまする、豫て南都の宿許に於てお話し申上げ候ふ如き拙者の身の上、一時も早く本國へ立歸り何卒仇を報いたく候へば、今日よりお暇下し置かれますやう……三太「オヤ有理でもある昨晩の始末、扨ては娘は遂り損うたか、イヤ、その潔白は誠すべきことと、何事でござりまするか　三太「イヤ、これは他聞もないことでござる、が彌助殿、其許を取留めた

くは思うても、拙者も兼ね〴〵承知いたし居ること、其を知つて留める譯にも參らず、本懐をお遂しなさるは譯て覺悟の上なれば、袖引き留むる理由もなし、ではござるが老の三太夫が一ツのお願ひ、何と叶へては下されますまいか　彌助「此は他ならぬ師の仰せ、身に適ひましたることとなれば何なりとも……　三太「其は餘の儀でもござらぬが、不束なれども拙者が娘、あれなるかよを何と其許の妻にはして下されますまいか　彌助「へ、ツ、木石ならぬ拙者も人間、情けを知らぬ者ではござりませねど、御承知の通りの身の上、仇を討たうと思ふが拙者の所存、討つ擊たるゝは時の運、首尾好く本懐を相遂し、事成就せしその上は……　三太「すりやあの娘をば……　彌助「妹背變らぬ夫婦と契り、三太「末高砂の尉と姥、友白髮まで添ひ遂げて下さるか　彌助「如何にも承知仕りました　三太「おれを聞いたか娘かよ……　かよ「阿父さん、聞きましたわいな　三太「其は眞實のことでござるかな　彌助「何の虛言僞言を申しませうや、斯くの通り……」と大刀を取寄せ小柄を拔

いて刀身を叩き　彌助「金打を仕りまする　三太「よ、、それで間違ひは萬もあるまい、娘、秋山氏が御承知下されたぞ　かよ「コレ文助、お前氣の毒ながら横町の戶長さんへ行つて印紙を一枚買つて來てお吳れ、證文をして貰はにやア當てにならぬ」これは今日でございまする、正歟往昔はそのやうな馬鹿なことはございません　彌助「左樣でござらば御師匠さま　三太「秋山氏、名殘は惜しいが片時も早く……　彌助「軈て吉左右お聞かせ申さむ　三太「や、天晴れ〳〵　彌助「御免……」と云ひつゝ皆々に別れを告げ、彌助は百智の宅を出で行きましてございまする。

第四回

扨て前回に伺ひましたる通り、彌助の出立いたしましてよりは、日毎にその便りを待ち居りまするは、娘のおかよでございまする　かよ「阿父さん、伊賀の名張から備前の岡山へは凡そ里程は何のくらゐで

さいまする　三太「左様さ、大野と八十里餘りもあらう」　鳥になりたや翼が欲しや、飛んで行きたい心地、るが何の音信もございません　かよ「ヘヽテな何うしたのでございませう　今日か明日かと待ち暮らします三太「然ればさ、本人の身に取つて見れば、なか〳〵返書だの禮狀だのと筆を執つて居る間もあるまい、ヤアそのうちには何とか音信もあるであらう」云ひつゝ猶んを三月四月を暮しましたが、餘りと云へば薄情な彌助さん、最うお返事のありさうなもの、何故このやうに晩からうと吃いて居りまするうち、彼是れ半年も經ちました、餘りのことに待ち遠く思ひ、娘は思ひ過して恨み泣き、腹を立てゝ居る表口より、年齡三十歳前後の飛脚体の武士、少々ものをお聞き申したい、の伊賀の國名張の邊、山田の里と云ふはこの邊でございるかなかよ「ハイ、左樣でございます」　とかよは立ち出でました　三「この邊に百智三太夫先生と云ふ……　かよ「その百智は手前の方でございます三「アーでござるか　かよ「阿父さん、誰方かお客人が見えました　三太

オヽ、可し〳〵、アー三太夫は拙者でござるが、其許樣は……　三「手前ことは備前の國は御野那岡山、浮田の藩士でござるが……　三太娘や、悦べ〳〵　かよ「ハイ、尊公は秋山彌助樣のお使ひでございますか　三「イヤ〳〵惟盛彌助は釣瓶鮓、手前の參つたは左樣なことではござらぬ、實は浮田家の藩士にて松山重兵衛殿と云へるが、當先生の處へ參るべき筈にて國許を出立いたせし所、御本人出立の後、急ぎ呼び返せと御親父が俄然の御病氣、捨て置き難きことゆゑに、主公の御錠意、已むことを得ず拙者訪ね參つたることにござります松山重兵衛と云へるは未だ御當家へはお見えなされませんかな　三太イヤ〳〵、左樣な仁は未だ一向見えません、重兵衛殿より拙者方にては實は岡山の方の音信を……　かよ「ハイ、左樣でございますのゥ娘　松山と云ふお方はお出でになつたことはありませんが……　ハヽア、それでは重兵衛殿は未だお出でに相成らぬか、ヘヽア、扨ては思ひ過して拙者は當方へ先へ訪ねて參つたか、それでは大方松

山氏は伊勢の山田の縁者の方へお出でに相成つたものと見える、何れ御當家へ立ち寄られるでござらう、ながら、この狀箱をお預かり置き下されたい（三太「アーモシ〳〵、就きましては誠に恐れ入るてとなが、も面識もないお方、況して姓名だに承つたこともない、然るに左樣な文筥などをお預かり申すと云ふも異なこと、就ては御聞き申したいこともござるが、備前岡山の御藩中に秋山彌助殿と云ふはござらぬかな　△「然ればでござる、左樣な御仁は聞き及びませんが……三太「それでは秋山と云ふ苗字のお方はござるかな　△「それはないてとはありません、秋山與右衛門と云ふ方がありますね……　三太「イヤ、左樣な御老人ではござりません　△「それでは秋山源三郎と云ふ方がござるが……三太「それはお何歳ぐらゐ　△「當年十三歳か四歳……三太「それは餘り少年すぎる、二十三四歳でもござらうな　△「左樣……そんな御仁は一人もござらぬ、マア何しろこの狀箱をお願ひ申す」と投げ込むにして駈け出して了ひました　三太「これは慌てた御仁もあ

ればあるもの……　かよ「阿父さん、マア備前のお方には悪かり相手になり遊ばすな、私ア備前の岡山育ち、米の實る氣は未だ知らぬと云ふ無法無体な人ばかり、愛想もこそも盡き果てました　三太「マアマアそう云ふ粗相な使ひの御仁では深いことは分らぬが、大方山田と云ふ粗相な使ひの御仁では深いことは分らぬが、大方山田とやらへお出でなすつたゆゑ、何れ先方で會へすれば此方へ戻られるに違ひない、姓名さへ碌々云はず、あんな粗忽しい人と云ふものはあるものではない、能く〳〵急ぐ用事であらう　かよ「ホンにマア徐り粗相な人でございますわいな」と云ひつゝその日は暮して居りましたが、伊勢の山田と申しても伊賀の名張から七日も十日も掛る處ではございません、然るに殆どこれより半月も經ちましたが何の音信もございません、これは何うも合点の行かぬことゝ娘のおかよ「阿父さん、何うも不思議ではございませんか、殊にこの狀箱には封じも何もしてはございませんから、一遍御覽遊ばしては……　三太「イヤイ

や他人様のものを無暗に開けて見る譯には參られぬ」このとき女房のお安は側から やす「旦那さま、その仰せは御有理ではございますが、縁のないことなら兎も角も、百々智三太夫と立派に姓名まで申して訪ねて見えたお使ひゆゑ、由縁の全然ない人なら出て來る道理はございますまい 三太「何さま、それも然うぢや やす「殊に封じもないての狀筥、開けて御覽遊ばしても差支へはないと思ひます 三太「なる程、負うた子に敎へられて淺瀨を渡るの例ひ、縁あればこそ訪ねて來さつしやッた、幸ひ封もしてなければ、娘の胸の晴れるやう、それでは開けて讀んで見やう」と頓て文筥を取寄せて、蓋取除ければ一通の書面、下には小判で二百兩、表書には「伊賀名張の片邊山田の里、百々智三太夫大先生、秋山彌助より」とあります 三太「こりやこれ正しく秋山殿よりの御書狀 かよ「それ御覽阿父さん、空ばつかり吐くのでございます 三太「待て〳〵、何か伃細のあることならん、兎も角もやすも開け、かよも開け」と眼鏡を懸けて書面を披き見れば「書面を

以て申上げ候、その後は打絶にて御不沙汰、先般中は御厚情に預かり何とも謝うるにものなく、早速御禮狀差出すべき筈の所、何かと彼是れ取紛れ意外の御不沙汰、平に御容赦下されたく候、就ては出立の際は私事假に息女と夫婦の約束を仕り候ふなれど、これには種々く伃細あつて拙者は妻を迎へることと相成らず、この儀は夢の浮世の夢と思召し、かよ殿は他家へ縁付け下さるとも、將た御孃子を御迎へ下さるとも御隨意に相任せ候ふ、就ては二百兩の金子は此方の飯料として御受納下し置かれ候ふやう願上げ候、先づはお禮旁々斯の如くに御座候 百々智大先生、奥様、 かよどの、 備前岡山藩秋山彌助事、盜賊の巨魁石川五右衛門友則」と記してございまする、讀んで身も世もあら悲しや、扱ては盜賊に秘傳を許せしか、これは我が心にも恥ぢ入り、京都の方にも面向はなり難し、切めては忍術はこれれて斷念いれさん、と、書面を以て京都へ謝り、頭を圓めて釋迦の御弟子となり、是にて伊賀流と云へる忍術は百々智は捨てることに相成り

ました、それは扨て措きまして信州伊奈ケ嶽におつて石川五右衛門友則と改名なせし右の小文吾、最早これにて事足りたり、この上は名のある野武士を引き入れんと、信州より書面を以て奥州の住人松浜友九郎を連へましたる所、これに應じて直ちに松浪は伊奈ケ嶽へ參りました、そこで木曾川、極浪の兩人を左右の手下として相談を致しますれば、何れも望みは有理なれど、只心に懸るは四國は伊豫の燒山に在る燒石坊を顧はくば味方に引き入れたい、なれどもこの者普通の使ひでは容易には應じまいか、田中の惣七を遣はしませうかと、二三の名のある者を星を指して兩名が談じまするとと、五右衛門は左右に首を振り　五右「その儀はならぬ、我れ自ら參つて燒石坊を從はすべし　甲八「けれども使ひでは行かぬ、我れ自ら參つて燒石坊を從はすべし　甲八「それでは到底應じまい　頭「お前が……　五右「イヤ〳〵、乃公でなければ到底應じまい　甲八「それでは道中氣を付けさんせ　五右「オヤ、油斷はせぬ」是にて五右衛門は信濃の絹商人と云ふ風体となり、鬼丸の一刀の裝飾を變へさせ、

此刀を腰に帶して中三度笠を被り、引廻し合羽を身に纏ひ、雲齋の賜宇に雲齋の甲掛、切緒の草鞋を高紐に結び、誰れが見ても商人としか見えません、信濃より美濃を經て江州へ出て參りました、遂に草津より瀨田の橋を後になし、今や大津の八町へ掛つて參りまする と、後の方より一人の男、オーイ〳〵と呼びながら出て參りますから、後方振り返つて見ますれば、これも同じく商人風の者でございまする 商人「錢井から前後になつて、何うやらお前さんもお商人らしいゆゑ、何方へお出でになりますかは知らねども、都合の好い方へお越しなら道伴になつたら、好いと思ひまして、斯く跡を慕うて參りましたが、案外の早足でなかく追付けません、漸う今瀨田の橋で姿を見ましたゆゑ、何うやらこれまで追つて參りましたが、貴下は何地へお出でになりまする 五右「それは〳〵、左樣でございましたか 私はこれから四國路へ買物の都合で參りますので……　商人「それは何よりのことで、私も實は讃岐まで參るものでございますゆゑ、旅は

道伴れ世は情けとやら、それではお供いたしませう。五右「何さま然うして頂しませう、に貴下は何と云ふお名前で……商人「私でございます、か、私ア江州の彦根の片邊、柳ケ瀬の絹商人で權兵衛と申します、して貴下は……五右「私ア信州伊奈の者にて五右衛門と申します 權兵「然うでございますか、それでは鬼も角も御一途に參りませう」と話しながら遂に伏見の錢取橋まで連つて參りました、尤もその頃は三十石なぞゝ云ふものはございませんから、荷船を以て大阪まで客を乘せて參つたものでございまする、所で伏見の船宿にて支度をしてそれ〴〵辨當の用意なぞを致して貰ひ、三人か四人前の處を借り受けまして、兩人は船に乘り込むことになりましたが、この權兵衛と云ふ人間は普通の商人ではございません、所謂道中を働く騙兒で、狙うたものが盜賊の巨魁、掏摸も齒うた怪しい者二人、船中にて一方の權兵衛は頻りに五右衛門の懷中に目を着けて居りまする、五右衛門はこれを承知して居りますから、支拂ひ

萬端彼れに錢を取替へさせ、船中の金錢を殘らず盜はして了つて遣らうと考へて居りまする、そのうち辨當を遣ひ四方八方の話しをしながら、敵方より佐太、守口を後にして明る日の拂曉八軒家の濱へ着いたしました、これより上り支度をして、舟にて大阪より、野田、伽ヶ崎へ參りまするとて 五右「一寸權兵衛さん、草鞋を一足求めますから、一服しては何うでございます 權兵「宜うございませう」と二人は休んで草鞋を穿き換へ、一杯飮んで立ちしなに 五右「權兵衛さん、何れ歸路まで御同道いたしますから御勘定はその節…… 權兵「ヤ、是りました」と權兵衛は立替へました、これよりその處を後になし、西の宮へ參つて晝中食を致し、又權兵衛に立替へさせ、又權兵衛に立替へさせ、遂になりました 五右「宿許の飯は美味くない、權兵衛さん、當所は平家の由緒ゆるべき地往昔より遊里もあり、此地は平家の世盛んの頃は須

御方の邸でいもあつたものと見える、その往昔の形を忘れず御簾の代りに吊したのでございませう」

権兵「御簾の代りに暖簾とは、へゝゝ、こりやア稀代なことをしたものでございますな」と笑ひながら明石の人丸の神社を右手に眺め、丁度明石の市中へ這入りました頃は早や正午と云ふ刻限でございます

権兵「なアモシ五右衛門さん、腹が敵へ渡りまするには、一番近い處から渡ると云ふと備前の下津井ですが、そこの明石から多度津まで乗つては何うでございませう」

これを聞いて心中に笑を含んだ五右衛門は、「ヘア扨ては此奴僕中が大分淋しくなつたと見えて船へ釣込まうと掛つたか、信濃の國の山中に住居をして居ては何彼に就けて不都合、一艘ぐらゐの小船があれば重疊、これを幸ひに船を分捕つて遣らうと念頭に浮びましたから　五右「何さま、私は信濃の山奥に成長つて、一向海川のことは辨へませんゆゑ、船などのことは心付きません」　権五「それでは私が船を雇うて參りませう、私の親類の宅もありますから……」

磨の内裡があつたとやら、柳原の遊里へでも參り、旅の憂でも晴しては如何……」　権兵「宜しからう」と宿許にて下駄を借り、宿の案内に伴れて柳原の遊里へ參り、その夜は大傚快を極め、又権兵衛に十兩ばかりを立替へさせ、翌朝宿許へ立歸り、支度をして立ちましたが権兵衛は熟々と考へました「甚いい奴に引掛つた、金子は持つて居るに違ひないが、何處に持つて居るか更に分らぬ、淋しい處で醒を掛けやうとは思へども、何處やらに威勢があつて何うやら武術も心得て居るらしく、何うも小氣味の悪い奴」と有繋の権兵衛も空しく醒を掛けずに了ひ、何時しか尻池の里を後になし、これより田井の畠村に掛り、繩敷天神から須磨の浦回の菖蒲、磯馴味噌屋の戸外を通りますと、有繋平家の内裡跡、店頭には簾を吊してございまする、

権兵「なアモシ五右衛門さん　五右「ハイ　権兵「味噌屋の店頭に簾の古つたのを吊したのは何う云ふ理由でございませう　五右「サア、私も信濃の商人ゆゑ、故事來歴は知られねども大方内裡のあつた頃、此處邊は公

と濱邊の茶屋へ來り　權兵「娘、何うぢやな　娘「オ、、柳ケ瀬の權兵衛さんでございますか」と馴れ〳〵しく挨拶を致しますから、五右衛門はハ、ア此奴この邊を始終徘徊く奴だな、可し〳〵と笑を含み　五右「娘御や、お邪魔ながら一ッ燗けて貰はう、ねね權兵衛さん　權兵「左樣りますまい　五右「娘や、代價は拂はぬに飲て、成るだけ美味い物を持つて來て呉れ」こゝで一杯飲みながら茶屋の娘に對つて、權兵衛は「當地にこの頃は多度津へ通ふ船は居らぬかな　娘「ハイ、沖の明神丸は僅か多度津へ行くやうでございます　權兵「よゝう、そんなら何卒云うて呉れ」そこで濱邊へ出まして茶店の女は沖を望て金切聲を出して「明神丸ゥー〳〵」と呼びました、所が沖から「オーイ」と云ふ答へに、お客のあると云ふことを報せましたので、水夫はそれは太きにと云ふので、それから喰船に乘つてヨッシヨイ〳〵と漕ぎ着けて參りました　水夫「姐さん、一番度お客さんを大きに……　娘「ハイ……お前は仁右衛門船の水夫

ぢやアないか　水夫「ヤア、柳ケ瀬の旦那か　權兵「此處にお在でなさるは信州飯田の絹屋さん、江州からお出でも又御愛顧にならにやアならぬ、お前の方たいと思ふが、出帆は何日ぢやな　水夫「それは〳〵　權兵「多度津まで行きすから明朝出帆します　權右「それでは五右衛門さん乘りませうか　五右「それは大きに宜しうございませう、直ぐに乘るのですか　水夫「エ、秘等はこれから陸へ上つて買物もしたうございますし、日の暮れ方にお迎ひに參りますから……　權兵「そんなら此處で少時休息して居るから……」と聽て中食を濟ませ「アーヤレ〳〵草臥れたと、五右衛門も權兵衛も臂枕で寢込みました、そのうち日も早や暮れまして、買物に參つた水夫等は戻つて來ました　水夫「サア旦那樣、お迎りと申しませう」とのことに、茶屋の支拂を濟ませ、五右衛門、權兵衛は噺船に打乘りますると、腕に縒を掛け、櫓を押切つて沖の船へ伴れて參りました　水夫「船頭や　船頭「オヲ……　水夫「柳ケ瀬の權兵衛旦那が

のウ、信濃のお客様と御一緒で多度津までお出でになるゆゑ 船頭イヤ、其奴ア何でもない、幸で朝の嵐で出帆る積りだ、サア何卒乗つて下されまし、是にて本船へ乗り移り 船頭イエ、何う致しまして……併し信州の旦那エ、私の船はお客船とは違ひまして根が荷船のことゆゑ、何うもお客さんに待遇が出来ませんから、そのお積りで心置きなうお出で下されまし、併し胴の間の帆柱の際へは腰の刀をお置き下されぬやうお願ん申します、船 五右「イヤ、それは心得て居る」と片隅へ寄つて横になり、肱を枕として寝に就きました、グッと一寝入する ちに、遠寺の鐘歴然かに聞え、嵐が吹いたか帆を七合に掻き上げて船は岩の鼻を廻り出し、堪能七時を向方に見て矢を射る如く出て参りまする、然るに何思ひけん眞島に向ひまするとゐかりを投して船を泊めました、そこて五右衛門は「船頭衆や、風は好いやうだに船は泊つたな 水夫「左様でございます、貴下方はお素人、風のことは分りま

すまいが、この風を受けて船を出す時は、何のやうな難風に出遭ふかも図り難いのでございます、風に逆らつて無理に行くは険難でなりませんゆゑ少時見合はすのでございます 五右「アー左様か、沖の風と云ふものは心地の好いもだ、アレ、手水でも遣はうか」と淡水を貰うて口を嗽ぎ、船の屋根に上つて金毘羅様の方をば拝み 五右「アー彼方にして斯う蒼海原を見た所は何とも云へぬ心地である」と独言を申して居りまする、然るに厚司を身に纏うて上つて参つた一人の船頭 船頭「お客人 五右「ハイ…… 船頭「お氣の毒だが船玉様を貰ひたい、 五右「ハヽア、私は信濃の者ゆゑ船玉なぞと云ふことは知らないけれども、若し出すにした所でそれは畢竟高の極まらぬものであらう、 船頭如何にも…… 五右「それは路寄はお前の方で勝手にするかも知れぬが、私の方では勝手に路寄の出来るものでない、船は船頭に任してゐるのだから、上陸る処で一時に進せませう 船頭「イヽヤ、そんな端下のものでないと 五右「ヘヽア、端下なものでないとは 船頭「身諸共

脱いで貰ひたい、この船を普通の荷船と思ふか、五右衛門を積んでゐるや ア荷船であらう、澤山乗客があれば客船であらう、賃を遣べば賃船であらうし私は一向荷物とより思ひやうがない（細川へッへッ、それでは云つて聞かして遣らう、昨日は浪華ド夢を見て、今日は長崎、薩摩潟、所在定めぬ海の上、ホンに浮世はうたかたの、泡と消ね行く身の果てを、神や佛にも見放され、沈めば忽ち地獄の境界、息も通らうちの業しみと、諸國の産物を積み重ね、酒と色とで命を縮ぎ、漾々に着く度に、肥前長崎丸山町、博多で名高い柳町、雪降深き越路では三國の湊、名代の小女郎、越後で新潟、七日町、出羽で酒田よ松前のかの字は何時も厭ふと、人も知つたる南部では、鳴の高い殿代さ、相耳で惚嫁もドッサリと、諸や田邊に播磨潟、尻の早い仁右衛門船と云ふ海賊船だわい」聞いて喫驚顔色變へ、エー失策つは未練が殘る、浪にユラ〳〵由耳の戸の、客人、この船はの由耳の扨ては荷船と思ひの外盜賊船であつたのかと、肝を出して慄へた、

るかと思ひの外、益々落着き体を固め 五右 私は知らずに乗つたれどこれまで厚く馴深を重ねた商人船と思つて乗つた樣兵衛さんは嘸迷惑、 樣兵 暗しいわい五右衛門、普通なら陸地を御徊ひ、これと目星を着けられれば、取り損はぬこの乃公が、汝のやうな商人に、抑も伏見から明石まで、小鰡一文出さずして、能くも乃公をば腹一杯、懐中空した横着者、身諸共脱いで簀屑となれ」と知つて尾いたら横着者、 五右 ヤイ、一同の小賊輩のとき五右衛門は大口開いて呵〳〵と打笑ひ、知らずに尾いたら不憫な奴、今本名を聞かすから、耳を浚つて能く聞け、當時信州伊奈ケ嶽に在る盜賊の巨魁石川五右衛門友則とは乃公のことだ」ァッと驚し一人の賊、南無三矢敗つたと思ひ、懐中に隠し持つたる一刀スラリと引き抜いて、五右衛門望んで切り込んで參る白刃の下、休を躱し利腕摑み、片足突立て岩石落し、船屋根より片方の海へ眞逆樣、頭倒とばかり投げ込めば、水音高く手下の一人は、その儘〳〵深屑と消ねました、この時

五右衛門は大音揚げ「ヤア〳〵筑紫權六、この乃公を今日まで知らずや、
怪々と、尾いて參つた白痴漢、過ぎつる歳の秋の空、山城から南都
へ通ふ途次、園らず通つた木津川堤、この五右衛門に高所より、投
げ付けられたる覺ねがあらう　權六「ても恐ろしい眼力でござんすのゥ、
何にも斯く云ふ五右衛門だわい　五右「汝等ア盜賊で世渡りをしながら役に立たぬ困つた野郎、サアて
の上は詮なくこの船を乃公に渡せ、應と申せば可し、否と申せば片
端から一人も殘らず擔飽七島の藻屑にして遣るのだ、性根を定めて
返答しろ、言はれて驚く由眞の仁右衛門　仁右「ヤイ權六、仲間同士で
ありながら、こんな馬鹿なことをして、何の遺恨あつて乃公の船ま
で取られるやうな詰らないことを爲仕して呉れた　權六「そんなことを
乃公が知るかい　五右「イヤ〳〵爭ふことは無用だ、何うせ汝等は斯う
なる上は何と云はうが從はさにやア措かぬ、それとも從ふ心がなけ
りやア敵つて勝負をして見るか　仁右「サア……それは……

……」と、の結局、今は仁右衛門絶体絶命　仁右「イヤ、從ひ
ますから頭、永くお前の手下にして下されまし　五右「そんなら今から
乃公の手下にして遣るが、必ず商人なぞを脅かすことは相成らぬぞ、
それが承知なれば如何にも乃公の手下に加へて遣る　仁右「それでは從
ひますから萬事宜しくお指圖を願ひます　五右「そんなら必ず違れよ」
と是に於て頭手下の約束を結びました、そこで船中一同の者を自分
の手下と致し、多度津まで船を進れと申しますると權六は「頭、お
前さん四國へ渡つて何處へ行きなさる積りでございます　五右「イヤ、
實は伊豫へ參り、丸山の燒石坊に出會ひ、味方に引き入れる積りで
ある　權六「イヤそれは止かんせ惡いことは云ひません　五右「すりや又何
故に……　權六「アア頭聞かんせ、この權六が身の成行き、燒石坊に出
會うた始末、一通りお聞き下され」と是にて權六は如何なることをも
申し出しますか、幷は一服いたして次回に飼がひますることにいた
しませう。

第五回

扨て權六が五右衛門に對つての話しと云ふは、この燒石坊に出會ひましたるその身の失敗の物語でございますると、それは何う云ふことかと申しますると、この權六と云へる者は以前は筑前の國那珂郡博多、俗は名島と申す處の出生で郷士の悴でございまする、親父は採るに足らぬ鍋鍬片手に、只用事あつて出歩く時は大小刀を差すくらいの郷の士、然るに權六は斯る取國の世に生れながら鋤鍬を擔いで農業でもあるまい、何卒して一人前の武士になりたいと、志を立て故郷を出でましたるは十八歳のときでございまする、家に傳はる錦刀を腰に佩用み、僅かの路用を懐中なし、故國も遠けき筑紫潟、後に見做して曠然と、筑後の南之關と云ふ處まで遣つて參りましたると權六の跡より尾いて參つたは一人の出家でございまする、お若衆〳〵と呼び止めますから、權六振り返つて見ると立派な僧侶で

ございまする　權六「ハイ、何か御用ですか　出家「お前さんは何處へ行きなさる　權六「私はこれから上方筋へ修業に參る者でござる　出家「左樣なれば丁度幸ひ愚僧も一途に參りますせう」とのことに、それではと云ふので伴れ立つて參りまするとバタ〳〵馬を牽いて、武士やうな者が一兩名宿屋の戸外を迂路突いて居りまする、所が右の出家の申しまするには「お武家、貴下は氣の毒ながらこの空行李を提げて一足先へ行つて下さらぬか」とのことに、持てば輕い空行李、ポンの手提のことなれば、それを提げて路の二三町も來るかと思へば、俄かに聞ゆる鐵砲の音、ハテ訝しなことだと思つて居るうちに、此方は慌たゞしく駈けて參つた右の出家「サアお若衆、お待遠であつたそれでは一途に參りませう」と無暗に路を歩きまする、靜分らすながら右の出家に尾いて參りましたが、イヤその坊主の能く歩くことと云ふものは、止め度なしに歩き出しまする、所が豐後の國の鶴崎と云ふ處へ出て參りまして、當處の柏屋と云ふ宿屋へ泊り込みまし

た、扨て湯にも浴つて座敷で話しの一ツもして居りますると、宿の亭主は出て参り「亭主」お泊りさまは何れ様でございますか「出家」愚僧は出雲の宇龍崎の者にて覚念と云ひます、又此者は小姓の主水と云ふ者でありますが、何でそのやうに厳しう名前なぞを調べて、一々帳面へ記けなさるのぢやナ「亭主」イヤ、これは他でもございませんが、実は筑後の南之関で九州方のお飛脚が、京都へ金子を持つて上る所を、朝立ちしなに飛道具で撃つてその金子を奪つて逃げた者がある様子で、それゆゑお上から厳しい所のお吟味でございます「出家」ハヽア、それは早いものぢやなア、最うこの騒ぎまでは知れましたか、上の御威勢と云ふものは恐れ入つたもの、イヤ一向愚僧などは左様なことは存じません「亭主」イヤ、貴公方に限つて左様なことのおありなさる気遣ひはございませんが、これが宿屋の念でございますから、一応承つて置かねばなりません」と亭主は帳面に控へて引き取りました、少時すると下女は食事を持つて参りまして「下女」サア遠うなりましてございます、何卒召上つて下さいまし「出家」これは〳〵御馳走さまで……」そこで両人は食事に掛りましたが、出家は御飯を一口喫ると、椀の縁を持つて汁をグッと一息に吸つて了ひまして「出家」女中や、愚僧も長旅をして居るが斯様な美味い汁は吸つたことはない、お気の毒ぢやが最う一杯下さらぬか「下女」畏りました」と云ひながら盆の上に椀を載せて起ちました、するとその跡で右の出家は菓子椀の汁を手の掌へ塗り附け、お椀の中へ手を突込んで、凡そ二合ばかりの飯を一握りに握り詰め、傍の手盥皿に載つかへたる澤庵をその中へ投げ込み、扨て権六に持たせて参りました空行李の中へ投けました、この体を見て権六は呆れて飯も喫はずに眺めて居りまする、そのうち下女はお汁の代りを持つて参りました「出家」姐さん、斯う何遍も代へては済まぬが、お前の所の澤庵は格別に味が美い、最う一ツ呉れぬか「下女」承知いたしました」と云ひつゝ下女は小皿を持つて起ちました、そのうち出家は再度握飯

そして行李へ投り込み、持つて來た汁を一息に呷つて了ひました、所へ再び下女は出て參りまして澤庵を其處へつけました、すると出家は又椀を出して 出家「馬鹿の三杯汁、恐れ入るが餘り美味い、最う一ツ下さらぬか」 下女は呆れたやうな顏をして、ハイと云ひながら盆の上へ碗を載せ、又傍處へ行つて行李の中へ投り込み、今度下女がお汁を持ち如く飯をクイッと握つて行きました、その跡では例のつて參りましたときには、お櫃は最う空でございました 出家「嫂さん今日は如何にも心地の快い日で思はずお飯を喫べ過し、尚た少々足らぬやうな氣がするで、何卒お飯のお代りを……」と櫃を突き出しました、これには下女も實に呆れて了ひましたが、頓てお櫃の空を携へてお飯の代りを取りに參りました、これから權六と二人で喫つたもく、思ふ存分喫ひました、然うして置いて二人は宿屋の緣側へ出て、そ無暗に步き廻つて運動を始めましたが、扨て夜も更けて寢やうとするとき、右の出家は若衆く と呼びますから 權六「ハイ、御坊何で

ございます 出家「サア、この藥をばお前に一服進げる、今夜この宿屋の雪隱の隅と、嘉所と奧室と取合の棟へ、乃公は鉋連火と云ふものを掛けたに依つて、夜半にそれから火が發る、その時煙が鼻へ這入ると眼を廻すから、眼を呟さぬやうにこの藥を口に咥へて愚僧と一途に逃げなされ、サア草鞋も此處に置いてある、足拵へをして草鞋も穿いて寢て居なされ」と申しますから、權六は不思議に思ひまして、此は恐ろしき出家なりと、大小刀を枕頭に置いて、袴も穿いて寢所へ這入りましたが、なか〳〵氣になつて寢入れません、時はや夜半の鐘の聲、折から聞ゆる物騷さ、火事よ〳〵と呼はりますゆゑ棄破てそ大變大騷動と、見るうちに四邊は烟々と燃え上ります から、是ぞ一生懸命の場所と、出家諸共行李を抱へ、鶴崎の宿許を逃げ出しましたが、「海を向方へ渡りなば、僅た一里の海上なれど、船の自由にならざるゆゑ、櫓の浦の裾を廻つて同國下毛まで遣つて參り、鶴崎の方を振り返れば、火の手盛んに烟々と燃え上つて居ゐ

ますると、御坊、何うも亂暴いことをなされましたな」と申します
ると、右の出家はへゝゝゝと笑ひながら「出家、最う明方にも程近い
が夜が明けたら見さつしやい、豐後の鵜崎は殘らず黃土になつたで
あらう、併し最う鵜崎も大分家が古いから、あれだけ燒いて置いて
遣れば新しい家が建て可からう」權六はヲヽ大膽な惡僧かなと呆
れ返つて居りまする、そのうち夜はホノ〳〵と明け渡つて參りまし
たから、當地にて伊豫の大洲へ通ふ便船を求め、これに打乘つて伊
豫の國へ同道しまして、大洲へ上陸つた時右の出家は金子を三百兩
出して權六に與へ「出家盜賊する身の處へ押込んで、險はずに貯めたやうな端下金を盜れば、その恨は十層倍、大名などの金子を盜れば、一時は騷ぐやうなれど、後の處置に當惑せぬから、恨みも始終は消えて了ふ、消滅すれば世界の融通、乃公ア幼いころに肥前長崎に暫く足を留め、和蘭陀人からこの錦連火と云ふものを製へることを習うて、それで大名の金などを

奪つたときには、必ず逃げしなには火を掛けて逃げるのぢや、然うして行方を眩まして、吟味が急に出來ぬやうにするのが乃公の奥義だ」權六はこれを聞いて益々呆れ返り、「出家しておいさんは何と云ふお方でござるか、出家乃公か、乃公は伊豫の丸山に居る燒石坊と云へる者だ、只世に怖いと云ふものはないが、伊豫の燒山は四國十八將の一人なる、吉冥播磨守と云ふ者の領分、その播磨だけは眼の上のたんこぶだ、それゆゑ伊豫路ではドツシリした仕事は出來ぬのだ、併しアお前も隨分氣を付けて道中を修行しながら行きなさい、又若し盜賊でもするならその燒石坊を見倣ひなさい」と言ひ聞かして別れました、扨て權六は燒石坊と別れて諸國を流浪ひ、好き大名もあらばこれに仕へ、立派な武士にならんと云ふ心底でござりましたが、何時しか金子も遣ひ果し、流れ〳〵て末始終、無賴の徒とも打交り、何時ぞや丸山の燒石坊に云はれたる言葉の如く、切取强盜武士の例に漏れざる仲間入りをして、五人八人の手下を

設け、已れも一方の巨魁となつて、縦横六と縛名を博るやうになりました、この因縁を残らず石川五右衛門に物語いたしましたうへ、

権六「これだに依て頭、なか〳〵丸山の焼石坊と云ふ奴は、油断のならぬ悪僧でござんせ　五右「ムヽ、ウヽ、イヤ縦令何程の者とても恐るゝに足らぬ、乃公は乃公だけの工夫を以て焼石坊を手下に従ける考へであれば、兎も角もこの船を多度津まで遣つて呉れ」とのことに、左様なれば〳〵と云ふので錨を抜げ、風に任して讃岐の國は多度郡、多度津の港へ船を着けました、上陸る時船中一同の者に對ひ五右衛門は「乃公が歸るときは勝手に便船を求めて便利の地へ渡るゆゑ、この船は兎も角も大阪近くへ寄せて置け、その上一先づ信州へ行くなれば、隠さず斯う云ふ譯合から乃公に出會つたと云ふ話しをば、信州の伊奈へ參れば木曾川彌八と云ふ者も居るし、又松浜友九郎と云ふ者も居るから、この兩名に語り、乃公の歸國を待つて居るが可い、併し乃公の歸るまでは必ず猥りに仕事はするなよ　権六「委細承知いた

しました　五右「陰分氣を付けて行〳〵が可い」と別れを告げて只一人、ソヽリ〳〵と上陸りましてございますが、これより伊豫路へ參りますには、觀音寺と云ふのを通つて參りますするが順路ださうでございまする、路の三四里も遣つて參りますると、網代の笠を目深に被り、墨染の法衣を身に纏ひ、錫杖の長やかなるを右の手に突き、左の手には鐵鉢を携へながら、徐々遣つて參つた眞言の老僧　出家「お商人〳〵……」と呼びまするから　五右「ハイ私ですかな　出家「何處へお出でなさる　五右「これから伊豫の方角へ參る者でございます　出家「伊豫は何方へ……　五右「實は少し用向がございまして丸山の方へ參ります　出家「ハヽア、それでは愚僧も同道いたさう、この向方の佐倉三里と云ふ處はなか〳〵路の勝手の分り難い處ゆゑ、案内旁々愚僧が同道しませう　五右「それはさうでございますが」と打ち伴れ立つて參りましたが、早やそのうちに佐倉へ掛つて參りました　五右「御坊や、この頃は伊豫街道は非常に用心が悪いさうでございますな　出家「イヽエ、陸分用心は

好い方ではござらぬ、併しお前さんのやうな仁が通行すれば、此方の用心より先方の方が餘程用心が悪いわい　五右ヱ、ッ……出來隱す

ない五右衛門、今日は來るか明日は來るかと、港へ出ては船を待ち

臓が咳けば來る船に、眼を着けて居たところ、多度津の港から

上陸つた其方、見た顔れに、尾けて來た丸山の絶石坊だ、隱すにやア

及ばねえ」これを聞いて五右衛門はイヤ成程、權六の云つた通り、

この坊主は一筋縄では行かぬわいと心中に考へました、絶石坊は言

葉を續ぎ「定めて伊豫の絶山へ其方の出て來たと云ふのは、この絶

石坊を從はせ、自分の屋家へ伴れて行からと云ふ了簡であらう又こ

の乃公も其方に出會うたら、我が味方に引き入れて、一方の腕と頼

まうと、隙ねく待つて居た拆から、其方が乃公に從ふか、乃公が

其方に從ふか、互の勝負は絶山の絶頂、ヤア兎も角も隱れ家までで

んせ」とこれから絶石坊は先に立つて己れの隱れ家へ伴ひました、

所が手下の輩は今や〳〵と頭の歸宅を待つて居りましたから、それ

と見るより　○これは頭お歸りなさいませ　絶石お客人があるから

其邊を取片付けて、酒肴の用意を致せ　○ヘイー、してお客人とは

……絶石「噂の高い信州伊奈ケ嶺に隱れ居る石川五右衛門……○ヱ

、ッ……絶石「この人物だ、乃公を從はさうと思つて、遥るく山阪

越にて讃岐まで船で渡つて來られたのだ、所で明日は互にこの絶山

の絶頂にて、何方が敗けるか但しは勝つか、運否天賦の勝敗を決す

るのだ、先づそれまではお客人、今宵は夜と共に四方八方の、話し

を下物に酒でも飲み、足腰伸してこの隱れ家で、ヤア緩容と寢ませ

せ」とこれより酒肴を取寄せまして、五右衛門に逃走いたしました

左右いたして居りますうち夜も甚く更けて參りましたから、遂に五

右衛門は床に就き、絶石坊も寢ましてございまする、然るに東雲を

待つて兩人とも起き出でまして　絶石「この絶山の絶頂、互に運を天に任せ、勝つ、も敗けるも時の機

み……五右「して其方は越物は何を持たつしやる　絶石乃公は坊主のて

とゆるに、兎に角持合せのこの如意だ、」して石川其方は……」五右「然ればさ、其方が如意を持つて行けば、乃公も腰の刀は持つて行けないと、それでは乃公はこの銃拳で相手になろう」燒石「イヤ、面白からう」そこで両人は打ち伴れ立つて立出でやうと致します、この時燒石坊は手下の者等に打對ひはならぬぞ、縦令何のやうなことがあらうとも加勢はならぬから」と手下の者に申付けまして、サア行かうと、両人は同道して燒山の絶頂の平坦なる處へ出て參り、燒石「サア石川、何うして其方はこの乃公を從はせる積りだ」五右「ヤア御坊、其方から打込まつしやれ」燒石「それおやア恨んで呉れるなよ」と如意を振上げて構へを附けました五右「遠慮にやア及ばぬ、打込めツ」燒石「ムヽ、燒石坊のこの如意が受けられるなら受けて見よ」云ひつゝ打込む如意の下、早くも五右衛門掻落う、忽ち姿は見えなくなりました、燒石坊は「怪しいことをする奴だ……」と叫びながら四邊をキロ〳〵見廻して居ります、丸山

の燒石坊はその者が怪しいと云ふ位ねですから、餘程怪しいに違ひございません、五右「此處に居るヲ」との聲に、ヒロイと振り返つて見ると、傍の岩に腰打掛けて居りますから、汝れと云ふなり振り向きさま、打込む如意のその下を、掻潜つたかと思ひますると、双姿が見えません、前に現はれ、後に在り、後かと思つて振り向けば前に居るかと思へば彼に在り、手を叩いては相手を致しますから、忌々しいことだと燒石坊は、熱湯の汗を流して悶されて居ります、この時最うこれまでと覺悟を定め、再び打込まんで此方へ投げ出す、と打下す、彼れの利腕を無手と摑み、金剛夜叉の力量に、少時は驚き燒石坊只呆氣に取られて茫然たる有様でございまする 五右「何うだ丸山、恐れ入つたか」燒石「イヤなる程、何うも聞きしに勝る其方の手並、如何にも驚き入りました、呉めて御身を頼と頼みませう」五右「それでは今より從ふか」燒石「如何にも、それでは兎に角乃公の隠れ家へ踵つて下んせ、手下の奴等に暇を告げ、早速其方さんと同道して、信州伊奈

へ行きませう　五右「ム、ウ、然らば……」と是にて両名は打寛いで山を下らんとする折から、隙を狙らひて後方より、再び打込む如意の下、引外したる石川五右衛門、右手にて焼石坊の利腕を摑み、手許へ引き寄せ絞め付くれば、五体痺るゝばかりの有様　焼石「ヤア一頭、発して下んせ　五右「ヤイ焼石坊、卑怯なことをするな　焼石イヤ、決して卑怯ではござんせぬ、乃公も生涯の頭と頼ひ尊公ゆゑ、猥りに不意を撃たれるやうでは何うであらうと思ひ、様子を見たのでござんすが、イヤ最う恐れ入つたる今日の働き、実に喫驚いたしました　五右「ム、ウ、然う見て呉れたら重畳のこと、汝等ア

○日本で聞えし頭同士、大したことでもあらうと思ひ、跡から尾け今日は尊公の値はなかつたな　焼石「ヤイ、汝等ア見に来たのかい

と笑ひながら山を下りそのまゝ隠れ家へ戻つて参りました　○頭

最う蔵き入りました　五右そうやうでは、他人のものを只は盗れぬわい　焼石「ヤこりやア恐れ入つた」

の乃公そは日本に隠れなき野武士の張本と見たゆゑに、皆従うたのであらうが、その乃公さへ斯う云ふ人が出て来て、又立所に従へることであるゆゑのゥ、何うしたつて上に上のあるものであるから、諦らめて必ずこの後は盗賊の念は断つて了へ、此処にある物は残らず貴様等に遣るから、今のうちに此処を立去つて、何処へなりと行つて堅気になれ、再び盗事をすると聞きやア、今後出會うた時に貴様等の命は助けぬぞ　○「イヤ、分りました　焼石「分つたら早う出て行け、到底汝等のやうな者を伴れて行つても、この仁の処ぢやア手下には出来ぬ、石川の頭は人の物を盗るばかりを望む男ではないからも是非なく、二言と云へば承知をせぬと……」云はれて手下の奴等も是非なく、二言と云へば承知をせぬと云ふ平素の気性を知つて居りますから、そのまゝ銘々金銀を分けて貰ひ　○お頭、何うも有難うございます、左様なら随分御機嫌好う……」と皆それ〴〵に出て行きました、跡に残つた草の家は、墨建具を建て列ね、一所に害せて火を放けまして、捺ね上るを見ながら

に、完爾り笑うて二人伴れもない、然らば……」とあつて五右衛門と同道いたし、一遂に焼山を後になし、以前の多度津へ出でましたが、當地より備前路へ渡ること になりました 綱五「サア、那うして行けば心殘りは毫し、頭、道中は何うして行きませう 五右「然れば矢張りお前は出家の姿、乃公は相變らず商人姿、一里許りは路を前後になり、夜は待ち合して同じ宿に泊ることにしやう 綱五「何さま、それは宜しからう」とこれより打ち伴れ立つて前後〳〵に備前路から大阪の方角へ出掛けて參り、漸くて京都へ出でまして十分と地理をば見て置き、その上大津へ出て參りました、所で賭所も過ぎ粟津近くへ迫つて參り、茶店に腰をば打掛けて、兩人は茶を飲んで居りまする、すると二三の雲助は迫つて參りまして ○御坊、瀬田へ廻れば三里の迂回、御座れ矢走の船に乘しよと申しまして、三里の路は遠いやうでございますが、船を待つて暇の入ることを思へば、割方座の方が早うございます、お商人とお二人で、丁度駕籠が二挺ござ

いますから、召して下さいませんか 綱五「ハイ、お商人何うでございますな、武士の矢走の渡し越さずとも、急がば回れ瀬田の長橋、そこは御坊の御勝手次第 綱五「恐但は船は大の嫌ひ、又駕籠も大嫌ひ、駕籠に乘ると頭痛がしてならぬ、殊に修業の身の上で、馬駕なぞに勝けられて參る法もなし、それともお商人さん、お前さん乘るなら乘りなされ 綱五「イヤ、私も素より旅勞れませんか、殊に私も駕籠は大嫌ひ、御坊が乘れば附合ひますが……、 ○イヤ、恐但は最う決して乘りません ○和尚さん、そんな事をして、足の捗取に桃を剝り、又眺めて居る奴ばかり 今「そこは値と相談ちやアございませんか ○何うでございます草津まで一里を百文の割合で、お一人前三百文では何うでございます、一里の路をば荒男二人が擔いで行つて一人が四十八文、草津まで三百文なら廉いものでございませう、召して下さいま

せ、ねえ和尚さん、オヤ、止きませう　○「ちやア二百文では何うでございますな　綱石「イヤ止しませう　○「百文ぢやア何うでございます　綱石「止きませう　○「五十文で何うでございますな　綱石「止きませう、　○「ぢやア此方から銭を出すが何うでございますな　綱石「イヤ止きませう　○「ヤイッ……　綱石「ハイ……　○「この糞坊主奴ッ、往昔から銭まで出して濁昇が濁籠に乗つてもふつてねな馬鹿なことが世の中にあるかも綱石「イヤ、別に愚僧はもないとも云ひません、其方で云つて其方で怒り、腹を立てるなら勝手にさんせ、此方の知つたことではない　○「エヽイ、愚圖〳〵　吐せばこの糞坊主、掴り倒すぞッ　綱石「イヤ、坊主に違ひござんせぬけれど、別に糞は着いては居ぬゆゑ糞坊主と云はれる因縁はない　○「エヽイ、何う云やア斯うと、愚圖〳〵　吐す、その儘なれば斬うだと」と拳を固めて突然に、坊主の頭をセンヤリと一ツ掴り倒しました　綱石「イヤ、氣に入らにやア何程なりと打つて下され」側に見て居りました五右衛門は、腹の痛いは

可笑し〳〵てなりません、知らぬが佛とは云ひながら、四國は伊豫の燒山で、人に知られた大悪黨、燒石坊ともあるべきものが、澁した顏して雲助に頭を掴らして頓着なく、眞面目な顏をして居るとは扨て〳〵人をくつた坊主かなと、看る〳〵うちに三人は、代る〴〵に掴り倒しましたが　○「ヤイ〳〵　△「ムヽヽ……　○「乃公もこれまで人と喧嘩をして、殿つたこともあれば殿られたこともあるが、こんな訝しな奴に出會したことは、後にも前にもないことだわい、扨て恐ろしい堅い頭、乃公の手が痛んで來た」こりや何うしやうと云ひながら、有繋向方見すの雲助共も、顏見合して呆氣に奪られて居ります。

第六回

所へ一人向方から、頭髪は宛然櫻潤帶を逆さに立てたるやうにて、院やかなる腐の衣服を着して、小倉の帶を貝の口に結び、無反の

一乃佩用へて、草履を穿いて草畚天の如く駈け來る男「コリヤ〳〵
二言目にやア喧嘩をさらして……馬鹿なことをするな、何うあらう
とも相手は客人、汝等ア雲助の分際で、客をば打つたり叩いたり、
姓にも合はぬ腕立さらすか、手暴いことは決してならぬ、何う云ふ
間違ひかは知らないが、乃公が間へ這入つて口を利いて遣らう……
イヤモシ和尚さん、此奴等ア取るに足らぬ人足共、朝から徒手れて
百文の錢も儲からず、酸い酒の一杯も飲めない所から無理に進めた
のでございませう、何卒その處は何とか話しをして、一里でも乘
つて遣つて下されましては何んなものでございませう 幾石「イヤ、そ
りやアお前さんの顏も立てたいし、吹けば飛ぶやうな旅僧でも、乘
と成行に依りやア百文や二百文の鳥目は、緣も因もない人にでも、
進上申さぬものでもないが、ヨシャリ〳〵と頭を掻られ、最う小錢
一文も能う出しません 男「ム、然う吐しやア是非がない、汝ア乃
公の顏をば平潰しに潰しやアがるんだな、ヤイ土坊主ッこの界隈三

里四方、人に知られたお大尽様だ、汝等のやうな土坊主に、馬鹿に
されて居ちやア明が日から飯が喰へぬ、サア出て來いッ」と宛然強
石坊の胸間を絞め上げました 幾石「そんなにせずとも何うせ歩かにや
アならぬ身体、何處へでも行きますが、何處まで行つたら可いのヽ
やな 男「ヤイ、愚圖〳〵云はずと栗津まで出て來い 幾石「イヤ、承知
しました、お商人さん、何卒茶代を拂うてこの塗笠を持つて來て下
さらぬか 五右「イヤ、委細承知しました、この体を見て茶店の女は喫
驚いたし 女「モシお商人さん、あれは在下で有名の大惡黨、何とか
貴下からお話しをなさつては何うでございませう 五右「これは私に
ます、一ッ間違つたら大變な騷動になりませうから 程ようお調停なさつては何うでございます、一ッ間違つたら大變な騷動になりませうから 五右「これは私に
關はつた話しではない、伴れの坊さんが堅意地から勝手に喧嘩をし
なさつたのゆゑ、殴られやうとも先方を殴るとも、勝手にするが可
いではございませんか、甚いお邪魔を致しました」と茶代を置いて
笑ひながら、ノソ〳〵と五右衛門は、幾石坊の笠を提げて栗津の

方へ出掛けて參りました、先に引張られて燒石坊、苦く胸間を絞め上げられ、粟津の松原まで出て參りますると　男「コリヤ土坊主、逃れは一体人を馬鹿にした奴だな、斯く絞め上げられても何とも思はぬとは、扨て〳〵野放途な坊主だわい」このとき燒石坊は忽ちその手を捻ち上げて　燒石「ハヽヽヽ、小悴奴、ホヲ抵抗さらすない　男「エヽ……燒石「先程乃公の頭へ手を掛けた人足共、人間だと思やア呢、み殺して了ふんだけれど、餘が止つたと思つて我慢をして居た、汝れはこの江州で、少しは人に知られた堅田の小雀と云ふ鼠盜だな、我が名を聞いて驚くな、四國は伊豫の燒山にて、人に知られた丸山の、燒石坊とは己ふ結搆な和尚様だ、エテ〳〵さらすと斯うして遣る」と右手を伸して小雀の、鬢髪グッと驚摑み、大喝一聲諸共に、傍の松の根方を目掛け、頭顱倒と投げ付けました　燒石「間誤〳〵すると捐り殺すぞ」云はれて驚く堅田の小雀「頭、何うもお見外れ申しました何卒御勘辨を願ひます　燒石「ヘヽヽヽ、乃公ぐらゐな者に畏ぢ怖れて驚くやうぢやア、向方から來る人の名を聞きやア卽死をして了ふだらう　小雀「エヽヽヽ……ダメ誰れが見ねます　燒石「向方から來る御仁と云ふは、當時信州伊奈ヶ嶽に隱れ居る盜賊の巨魁、石川五右衛門と云ふ、乃公の爲めには頭だわい　小雀「エヽヽヽ！……」云ふなり氣が遠くなりました、所へノッ〳〵出て來た五右衛門　五右「御坊、最う遣つたのかい　燒石「頭、聞かんせ、奥持のならぬ小悴の生意氣、捐り殺して遣らうとは思つたけれど、命だけは助けて遣りますわい、

五右「ヘヽヽヽ、こんな者は殺さぬ方が可い、殺した所が蟲のやうな奴だ　小雀「頭、餘りそりやア酷いちやアございませんか、何卒今から尊公の手下に小哥も加へてお呉んなさいませ　燒石「サアそりやア乃公が願んで石川の頭の手下にして遣らないものでもないが、汝等のやうな根性ぢやア、到底頭の氣にやア入るまい、雲助ぐらゐの者を味方に從け、都合好くは旅客の所持金を捲き上げやうと云ふやうな腐つた性根玉ぢやア、盜賊の中でも陣笠下ぢやわい　小雀「イヤ、それは

度改心いたします、私は役にも立ちませんが、私の兄分にてこの江州は蒲生郡、仁正寺の領主市橋家の浪人にて小鮎の源五郎と云ふ者がございますから……　焼石「ふゝ、そりやア一寸聞ねて居る男ぢや、

小雀「その男を一途に伴れて行きますから……　焼石「ふゝ、小鮎と共に來るのなら詫まず伴れて行つて進らう、のう頭……　五右「そりやア丸山の了簡次第にするが可からう」是にて堅田の小雀、小鮎の源五郎と云ふ二人の者を手下となし、信州伊奈へ立戻りました、扨て五右衛門はこの上は京都の様子は如何にと窺ひますると、秀吉公は今や盛んの勢ひにて、天下を一統するの大氣ありと云へど、只戰爭をなすのみにして萬民の迷惑一方ならざる様子、何卒いたして貧民を助けて遣りたいものと、この点に石川は注目いたしまして、遂に京都は三條河原町に一軒の草庵を設け、表は半塀造りに致して無德齋と名を變へて、茶湯生花その他俳諧の宗匠を致し、多くの門人を集つてその附屆にて、樂々と世を安く過すと云ふ体に披露し、首に合財

袋を懸けて鬼丸の一刀を腰に差し、朝な夕なにブラ〳〵と、京都の街を彼方此方と見物いたして居りまする、今日しも出て參りましたは三十三間堂でございまする、彼堂は長承の元年平忠盛普請奉行を勤め、熊野の梛を以て棟木となし、三萬三千三百三十三体の千手觀音を安置して、第七十五代崇徳院のお頭痛をば平癒させ參らせんとして、建立なすつた堂でございまする、尤もその頃はこの界限では人の遊び場所は多くはこの三十三間堂、そのうちに三軒茶屋と申して三軒の茶店がありましたが、その中央は山本と云ふ宅で、この茶店の店頭に年の頃なら二十七八歳、倔强の荒男、貧しい風体をしたなりで突立つて○オイお秋さん、お前に貸した一貫の錢、一体何うして呉れる積りぢや、あき「大きな聲をして七藏さん、稼業の妨害になるわいな　七藏「そりやア、何と云ふてとを云ふ、人に錢を借りて置いて返しもせず、稼業の妨害てねことがあるか、乃公も亦無理に取ちうと云ふやうなことは云はぬゆゑ、兼て約束をして置いた通り、

お前が乃公に抱かれて寝る気か、但しは娘の小冬を乃公に抱寝をさせるなと、何方なとすりやア一貫は長点だ、サア何うして呉れる、

七蔵「七蔵さん、又してもそのやうな無法なこと、妾には浪人ながら山本左膳……

七蔵「オッと皆まで云ふな、一の橋の片傍、腰の抜けた猫見たやうな彼の足利の流人、山本左膳も今迄き立ての座禅豆もお

るものかい、この間乃公がお前を口説いたら、そりやア最う一貫のさりやア、何うなとお前の好きにさんせと銭さへ心配して貸して下さり吐したちやアないか、それに今日となつて卑怯なことを云ふな、そんなことをハイ〳〵と聞いて居る鳥羽の七蔵さんぢやアないわい、抱かれて寝るとも銚を返すとも、何方なとするが可い、居催促ぢやわい」と喚鳴り立てゝ居りまする、折から網代の笠を被り、合財袋を首に懸けて這入つて参つた無徳斎「御免なされ、頼ハイ、お出でなさいまし

五右「茶を一ツ下され〳〵召喫りませ」とこれから

梨の入つた茶碗に茶を汲んで出しました、五右「これは〳〵……」と

活いやうな顔もせず、グイとその茶を飲み終り、五右「御馳走でござつた」と起ちしなに合財袋より鳥目を一貫出して置きまして、五右「左様なれば……」と戸外へヒヨイと出ました、頼有難う存じまする」云ひつゝ娘の小冬は出て参り、一貫文の茶代「阿母さん、今のお方がこのやうに……」

アヽア小冬……僅か泥茶を一

と云ふのは、そりやア何かの

可い小冬「ハイ……」と云ふの

急きも慌きもせず、堂宇の前、池の此方にゐんで、四辺の景色を見て居りまする、小冬「モシ旦那さま

五右「ハイ、何か御用かな、小冬「このお銭はお間違ひではございませんか、五右「イヤ〳〵決して間違ひではありません、何ぢやな、小冬「イエ、

鈴り澤山でございますので……五右「澤山なれば可いではないか、少

なければ最ツと進げやうか、私は茶代に置いたのぢやない、陰徳を

施すのぢや、小左衛門でございますか、それは何うも有難う存じます」最と叮嚀に禮を述べ、そのまゝ立歸つて母親にこの悲きを傳へると、おあきも涙に暮れて悦びました　ア、世の中には情け深いお方もあるもの、お茶一杯召喫つて大枚のお錢を下さるお方もあり、僅かな錢を恩に着せて、無体なことを云ふ奴もある……七藏「コレ〳〵、錢を人に借りて置いて、ヤッと持つて行つて下さんせ」と呟きながら一貫の錢を手に取上げ　七藏エ、イ、今日の手許おちやア何のやうなことがあつても返せねと思つて來たに、餘計なことをさらして彼奴が一貫置きやアがつたので、右から左へ返しやアがつた、この上は乃公も行つて、彼奴の陰德とか云ふものを横奪つて遣らう」とそのまゝ貴家を飛び出して無德齋の跡を逐うて參りました　七藏「ヤイ陰德、一寸待つて呉れ　五右

イヤ私は陰德と云ふ名ではない、無德齋と云ふ名ぢやわい　七藏「無德でも陰德でもそんなことは構つたことはない、一貫の錢で乃公の色事を妨げやアがつたな、やア、乃公にもその德陰てゐものを呉れろ　五右「イヤお前さんは餘程無法な人ぢやな、誰方に憑んで誰方に憑まぬと云ふ陰德には區別がないゆゑ、お望みなれば進せませう、ヤア持つてお出でなされ」と又一貫出して與へました、見るより烏羽の七藏は「イヨー緡のない錢を又一貫、こりやア大きに有難うございます」と頭を下げて二貫を抱へ、剰染も盛に墨染の、街へ急がん心より、是れより七藏は色里をさして出て參り、二晝夜ばかりは面白う、剰染の女郎を揚げて樂しみましたが、錢がなくなれば色里に居られず、遂に墨染の色里を飛び出して、又舞ひ戻る三十三間堂此度は貸金も何にもないゆゑに、茶店の軒端にイんで　七藏「お秋さん好い日和ぢやなア、あゝ日和が好ければこそ店を出して居るのでござんす、雨が降れば店が出せるかね　七藏エ、イ、然う薄情にものを云

ふものぢやアない、氣の毒ぢやが茶を一杯呉れぬか　あき「氣の毒ぢやけれども未だお茶が煎立たぬ、これから沸へるのぢや、隣りのお婆さんにでも頼みなさるが可いわい　七藏「コレ、茶を一杯呉れるのにもコテ〳〵云やアがる……オイ隣りの姐貴、茶を一杯貰ふお方にお錢を頂かねば女「氣の毒だが妾の方のお茶は、休んで呉れぬわい　七藏「ナニ忌々しいことを吐しやアがる」と怒つて見ても致方のないこと、今は七藏も懐中には錢一文もなく、三日の間は喰はず飲ますで三十三間堂の邊を迂路〳〵致して居りましたが、最う三日目には腹が空つて眼が眩ひさうになつて參りました無錢ではなら茶、無錢では能う追ぜぬに依て、四隣が渇いたら七藏さん、一の橋の下へでも行つて水なと飲んでお出で　七藏「ヤイ、この駄多羅女、種々雑多なことを云やアがる、この間の潰松茸のやうな笠を被つた陰徳は未だ來ぬかな　あき「お前のやうな貧乏神が、この三十三間堂で間眼突いて居るうちは、蟲でも氣の利いたものは飛んで來はせぬわい　七藏「ナニ忌々しいことを吐しやアがる」と怒つて見ても致方のないこと、今は七藏も懐中には錢一文もなく、三日の間は喰はず飲ますで三十三間堂の邊を迂路〳〵致して居りましたが、最う三日目には腹が空つて眼が眩ひさうになつて參りました、所へノッ〳〵出

て參りました無筭髪、今門をズイッと通入つて來る姿に、目を着けたるは烏羽の七藏、慌てゝ側へ近寄つて　七藏「オイ陰徳さん、この間のお若い衆か　七藏「能く來てお呉んなすつた、最う又陰徳を貰はにやア何うもならぬ、腹が空つて眼が眩ひさうだ　五右「他人の懐中を的にして、喰はず飲まずで居るとは又大膽な人ぢやのう、併し今日は錢はない　七藏「そりやア困る、〳〵そんなことを云つて呉れてはし大体乃公の身体が保たぬ　五右「錢はないが金子では何うでござるな、

七藏「エ、ッ……そりやア結構、誠に結構でございます　五右「貰うて下さるか　七藏「イヤ貰うて進げる段ではございません　五右「左様なれば……」と小判を一枚出しました　七藏「これは忝いッ」と手の掌へ戴せて忍はず頂きました途端、手の掌を見れば此は幷も加何に金子はござ　七藏「オヤッ……今貰つた小判がなくなりましたわい　五右「ハ、、、、除り頂いたので後方へ飛んで居るわい　七藏「こりやア忝い」と拾ひ取り、懐中へ入れて臍の上に當がひ、左の手で押へたまゝ、

腹の空つたのも打忘れ、有難う存じますとその場を飛び出し。壁染の方へと雲を霞と駈け出しました、折から向方より大髻の摑み賊、ノッ！〳〵と出て来る者に、突き立つたる烏羽の七蔵　男「ヤイ気を付けろい、間誤突きやアがると洩されて了ふぞ　七蔵「御免なすつて下さいまし、余り嬉しうて眼が見ねものでございますから……　男「汝れは嬉しいか知らないが、人の出て来る胸先へ秋の茄子見たやうな頭を打付けやアがつて……　七蔵「イヤ未だ二十八歳でございますから、それまで死げてはございません　男「エイ、何う云やア斯う云ふ、恐悦〳〵云やア蹴飛ばすぞ……ヤア、汝ア烏羽の七蔵おやアないか　七蔵「オヽッ、頭でございますか、酷い云草だなア　男「汝ア又何が嬉しうてお呉んない、この小判は何うでございます　七蔵「頭」これを見てこりや怪しい　七蔵「サア、然うちやらう、何うで徒呉れたものぢやから……　男「けれども汝ア成勢好く走つて来たではないか　七蔵「金子の力で走つて来た　男「乃公が一歩二朱に買つて遣らうか　七蔵「けれども頭、買ひなすつたつて通用らぬものは仕方がないぢやアありませんか、　男「ハヽヽヽ、汝のものを取らうとは云はぬが一体何うした　七蔵「へゝ、訳はこれ〳〵斯う云ふ次第で貰つて来たのです、それでこれから墨染へ走り込み積りです　男「鹿な奴だ、サア遣矢すな」と小判は七蔵に返して遣りました　男「併し其奴ア澤山持つて居るか　七蔵「持つて居ないのやございませんが、今日はメッシリ首に懸けて、何処の人かは知りませんが、人品の宜い餘程工面の好さゝうな仁です、の金かからの貰け積け、それぢやア少し無心を云はう　七蔵「頭、行かんせ、お前なら又澤山貰へませう　男「ムヽ、懐中にありきり頂はにやアならぬ、七蔵、案内をしろい　七蔵「そりやア困つたなア、幾分何うあらうとも一両と一貫の強理てねものが……言はゞと案内をしろ」とそのまゝ七蔵を

案内者として三十三間堂へ引返して參りました、所が此方は無禮齋徐々と門を出で以前來し京の街の方へ歩んで來る後方から、七蔵「オーイ陰德ー〜〜……」と呼びますから、後振り向いた無禮齋、五右「ヘイ爺だ何ぞ御用があるのか、七蔵「イヤ他でもないがこりやア私の頭でごんす、氣の毒ながら金子を少し恵んで遣つて貰ひたい、五右「ヘヽア、お見受け申せば立派な姿、殊に腰の刀まで帶して居なさる、陰德などを施して貰うやうな仁とは見ゑぬ、私は斯う云ふ方に施す金銭は持たぬから、お氣の毒だがお斷絶り申します 男「ヤイッ、ちやア何か乃公にやア呉れぬと吐すのか 五右「能う物事を考へて見なされ、人に頭だとか親方だとか云はるゝ者が、他人に物を遣せと云ふからして心得違ひ 男「イヤ、然う吐しやア是非がない、一途に來ひッ」と突然右の男は無禮齋の胸間を掴んでグイッと締め上げ 男「ヤイ七蔵汝も一途に此奴を七條河原まで引摺つて來い 五右「イヤ、縱令七條河原でも、何んな淋しい處へでも來いと云ふなら參りませう」と打ち

伴れ立つてその儘で、彼は我が身が露と消ゆる、七條河原と露知らず、引摺られたまゝ出て來た無禮齋 男「七蔵、この者を殺つて了へ、七蔵「陰德さん、お前には義理はあれど、頭の云ふことを聞いて呉れにやア仕方がない、これなと喫へ」と七蔵は拳を固めて飛び込みさま、打たうとするを無禮齋は引外し、右手の拳を固めたまゝ、十一肋骨ムヽッと一當、氣絶をしたる鳥羽の七蔵、そのまゝ其處へ打倒れ、若くなつたる姿を眺め、猪牙才なりと右の男、刀の柄に手を掛けて、抜かんとするを手早く附込み、襟髪取つて引き倒し、足搦掛けて頭顛倒、河原の此方へ投げ飛ばし、起きんとする背を足にて蹈み据ゑ 五右「ヤイ夜叉丸、貧乏動きでも出來りやアして見ろ 夜叉「ヤアッ、誰方かは知らないが免して下さんせ、物に恐れぬ四條の夜叉丸も、これにやア敵はぬ免して下され 五右「へゝゝ、恐れ入つたか、鳥羽の七蔵と云ふ一文奴は、取るに足らざる者ゆゑに、云ふがまゝに金を與へ、自由になつて居るものゝ、汝れは四條の夜叉丸と、踏

て見給はるのある奴、無慈悲とは世を忍ぶ假の名、餓は石川五右衛門友則である、今後心を改めて乃公の手下となり、この後は京都の町人を脅かし、金銭を貪ることを止まれば可し、然もなくばこの場において息の根を絶めて遣るから覚悟を致せ　夏ヤアー待つて下んせこれ頭、聴いて居る、近江有名の小盗、小鉤も、皆お前に從うて、今では手下となつて居るさうな、乃公も疾から手下になり、從ひたいとは思へども、機がないゆゑ時後れ、今日まで恐圍〳〵して居ましたが、從ふからには お前に對けて一ツの頭を願はしませう、五右ムヽ、様子に依れば聞きもしやう、してその仔細は……　夏「聞いて下んせこれ頭……」と膝立て直して夜刀丸は已れの身の成行を話し、金〳〵これより大仕掛に掛らうと云ふの一段……

第七回

この時四塚の夜刀丸は石川に對つて申しますには　夏「頭、私は以前

紀州は加太の片供、久瓦見村の生れで、名は八蔵と云ふが本當の名でございますが、私の面が斯う云ふ妙な面ですから、誰れ云ふとなくもりやア鬼のやうな奴だと云ひ囃され、この京都へ來ましてから四塚に住し、遂に四塚の夜刀丸と云ふ綽名を博つたのでございます、そこで私の以前生れました久瓦見村に、二字帯刀御免で久瓦見金太夫と云ふ豪家がございます、玉つて强慾非道な奴で金子はウンと云ふほど持つて居りますが、何とこの金太夫の許で一仕事遣つては何うでございませう　五右ムヽウ然うか、乃公は大体人の命を無暗に奪つたり、それ限りで以て後の立行かぬやうなことをして遣るのは餘に心には進まぬけれど、强慾非道な奴とあれば行つても可い　夏實は頭、私はこれまでから疾くにお前さんに從はうとは思つて居りましたが、ツイ手下に成り後れ、今日まで尊公の向ふを張ると云ふ譯でもないが、斯う云ふことになつたのでございます　五右イヤ然う聞ればそれまでのこと、親の敵と云ふでもなし、

併し夜叉丸、この七歳と云ふ奴は何うしやう
お匿きなさい、夜露でも口へ這入りやア息を吹き返して、又正気になるでございませう　五右「そんなら兎も角乃公と一途に隠れ家へ来ゐ
とも、又出直して来るともそこは都合好くするが可い　夜「それおやすい御用です」
ア何れ晩はお参りませうから宜しくお頼み申します」　是にて夜叉丸に別れを告げ、五右衛門は隠れ家へ立帰りましたが、遂にその夜夜
叉丸は三條河原町の五右衛門の隠れ家へ連つて参りました、所で五右衛門は木曾川彌八を以て番頭に打扮たせ、小舟の源五郎を下手代
となし、夜叉丸を荷持と致し、その身は町家の若旦那と姿を変じ、
還に京都を後になし大阪へ出て参り、路を急いで紀伊國へと連つて
参りました、表面は眼病にて紀州の和歌の浦並びに紀三井寺をば見
物に参ると云ふ体に披露して、久良見村を差して出て参りました、
五右「アー眼が痛んでならぬ、八助「エー五右「何處ぞ此邊に良い水の湧く處はないか」と聞ゐるやうに聞ゐやうに金太夫方の戸外に

て八助に問ひまする と 夜「左様でございます若旦那、この久良見金太夫様と云ふ郷士様のお屋敷には、恐ろしい良い水が湧きますからこのお屋敷をお頼みなされては何うでございます　五右「何さま、それは可いけれども先方はこれだけのお屋敷、お願ひ申すも異なことであるから　夜「そりやア若旦那、お手代の源五郎さんにお頼ましなすつたら可うございませう、別段金銭の無心合力に行くのではございませず、水の一杯ぐらゐ貰ひにいまして這入るのに何う斯うはないではございませんか　五右「何様それも然うだ、源五郎、氣の毒ながら頼んで呉れぬか　源五「へエ、承知いたしました」頃て一同の者を戸外に待たせ源五郎ばズッと屋敷のうちへ這入り　源五「ハイ御免下さいまし　Qドレ……　源五「手前は京都三條の片側、絹店の若い者でございます、
Qヘヽアなる程　源五「主人五三郎眼病にて當地へ保養に参りましたが、薬は持つて居りまするが何うも良い水のないことには癒すことが出來ません、然るに當お屋敷には至極良い清水が湧くと云ふこと

を承りました、如何なるものでございませう　○ハイ〳〵左様かな、當家の旦那は出すことゝ云つたらけれど、水ぐらゐなものは地から湧くものゆゑ、敢て何う斯うはありますまい　佐平「何卒一ツお願ひ申します、何かお土産でも持つて參るべきではございますが、突然思ひ付いたることゆゑ別段お土産も持つて參りませなんだ、これは眞に失禮ではございますが……」と何程かの金子を紙に包んで差出だしますると　○「これは〳〵忝う存じます」云ひつゝ紙の上から一枚でございまする　○「只今水を汲んで參りますから此處にて一服さつしやるが宜しからう」是に於て家來は内裏へ水を汲みに這入りました、然るにこの体を見た主人の金太夫　金太「コリヤ佐平太　佐平「ハイ……何か拵しさうにコソ〳〵して居るな、何が拵してそのやうに悦んで居るのぢや　佐平「イエ、別段何う斯うと云ふこともございま

せんが……　金太「イヤ〳〵然うでない、今旅人が戸前へ水をば貰ひに來たであらう、その旅人からも貴樣は何か貰うたな　佐平「ヘエ、貰はれでございます」と手で○を形へて見せますから　金太「何、○印だ　佐平「左樣でございます　金太「宜いことを致したな、何程貰つた　佐平「イエその……」と口籠りながら　佐平「最う少し上でございます　金太「最う少し上だ、それでは二兩貰つたのか　佐平「ヘエ……　金太「太い野郎だ、主人の水をば旅人に遣はすのに、二兩も貰つて飲つて居るとは不埒な奴、サア一兩遣せ」云はれて家來の佐平太は「斯う云ふ慾の深い主人だ、これでは家來の立行く所はない」と呟やきながら遂に一兩取られました　金太「最う貴樣は其處に控へて居れ、此方が水を持つて出る　佐平「ホイ〳〵……」そのうち手桶に水を容れて自ら金太夫はこれを提げて出て參り　金太「サア〳〵此處へお這入りなされ、手前方の水は至つて清水でござる、何程なりとお使ひなされ、

五「有難う存じまする……サア若旦那、水を呉きました　五右「オ、、
氣の毒なやのウ」そのま、五三郎は這入つて參り、藥袋紙の中から
白い藥を出して限へ付けましたが、これはその實藥ではございませ
ん、白砂糖でございまする、依て跡が粘つて心地が不可いから水で
洗はねばなりません　五右「アー〳〵清爽として心地が快い、併しこ
れから何處かで宿を取らねばなるまいが、この邊に宿屋のある處はな
いか聞いて見て呉れまいか　五「へエ〳〵、エー一寸お伺ひ申します
金太「ハイ〳〵　五「これから宿屋のある處までは何程ございませうな
金太「左樣さな、好い宿屋と云へばこれから向方へ尚だ二里も行かね
ばござらぬぢや、が今から二里は扨て措き半里も行かぬうちに日が
暮れて了ひますから、苦しくなくば手前の方でお泊りなすつては何
うかな、旅籠賃さへお出しなさりやア心配は入らぬではありません
か、魚は近いし魚類は自由……　五「ちやと申して當お屋敷に泊めて
貰ひましては……　金太「何さ〳〵、そんな事に御遠慮はござらぬ、錢

さへお出しになれば惡しも遠慮のないこと……　五「それではア、お
泊め下されますか、成に何うもお氣の毒でございますな　金太「イヤ何ー
う仕りまして、先刻は又家來へ斷けてお心得を下されて過分の至り
又手前にも定めて下されるでござらう、お氣の毒でござる」と見る
から强慾なる面搆へ、何さま夜叉九の云つた通り酷い奴だ、よし〳〵
立ちしなには殘らず貰つて行つて遣るぞと、五右衛門は心の裡に笑を
含みましたが、然あらぬ体にて　五右「それでは誠に恐れ入るが一夜御
厄介になることにしては如何なものでもあらう　五「それは貴下樣さへ
お厭ひがございませねば私共は何のやうな處でも搆ひません、物置
の隅でも一夜明さして貰ひますれば結搆でございます　金太「イエ〳〵
何う致して……貴下方お三人は奥の室へ御案内申上げ、荷持の衆は
私の方の下男の部屋が空いてありますから、それへでもお入れ申し
ませう……コレお清や、このお三人樣は奥座敷の十八番、お下男の
お方は表の二十五番へ御案内申せ」なか〳〵惡らい奴で最う直ぐに

宿屋根性になつて了ひました、呆れ返つて五右衛門は奥の室へ通りましたが、成程座敷は随分立派でございまして、室毎〳〵に惜し気なく真材が使うてございます、八助の夜具丸は表の下男の部屋へ投り込まれ、唆ふものは同じものを呉れましても、居室は大きな差違でございまする、所が此方は金太夫、茶、菓子などの用意をして持つて出ました　五右これは〳〵恐れ入ります　金太「イヤ〳〵お泊め申すからはそんな事にお心遣ひは御無用のこと、今娘を遣しますから、御用事があれば何なりとも娘へ割けて仰せ付け下され　五右これは痛み入ります、手前の方に召伴れて居る者もございますから、用事があれば此方から馳ひに遣はします　金太「イエ〳〵そんな事は決して苦しうございません」と云つて入交つて当家の娘のお滝と云よ、当年取つて十九歳、花の盛りの美婦が挨拶に出て参り　何か御用はございませんか」と優かに手を支へ、行儀正しく挨拶に及びました　五右これは〳〵御当家のお良女でございますが、不思議の御縁で意外の御

厄介、お氣の毒千万なことでございます　イエ何う致しまして、誠に面苦しい処ではございませんか、何卒御緩容とお泊り下されますやう、何もお進げ申すものとてもございませんが……　五右イヤ最う結構なお心遣ひ、お氣の毒でございます……、一寸お待ち下され、何かお土産とは存じますが、何も所持のものもございません、取だ失礼ながらこれにてお好きなものにてもお求め下され　イエ何う致しまして、……」誠に失礼でござるがと金子を五両包んで出しました、ハイと云ひながらも娘は、眼の縁を赤らめたなりで起つて行きましたが様の事でございまする、然るにその夜は心易く当家に於て泊ることになりまして、金太夫も夜に入ると自ら莫益を提げて其処へ参り、種々のお世辞をば振り撒きまする、すると頭八、源五郎の二人が話相手になつて四方八方のことを話して居りまする、そのうち五右衛門は床掛を開けて中より衣類、金子などを出しまして、この方は何うであつたなどゝ云ひながら手が着いたのでもつたか、その方は

判金の包みを三ツも四ツも見せましたが、有るが上にも欲しがるは金子、殊に強慾の金太夫、ゾク〳〵するほど欲し氣が立ち、幾日ほど泊めたればあの金子で皆差引きが出來るであらうと、己れのものを取られることに氣も付かず、他人の金子にばかり目を着けて居りまする、五右衛門は金太夫の顔を、見るともなしに横目で以て眺めながら、始終の様子を探つて見れば、二人の者とも話しは上の空、只五右衛門の扱ふ金子にのみ目を着けて居りまする、此奴飽くまでも強慾な奴なり、よし〳〵その儀なれば此度遠からず目にもの見せて遣らうと思うて居ります、扨てその夜は金太夫も起つて行き、跡で皆々枕に就きましたが、明くる朝となりますると、五右衛門は宛も辛さうな顔を致し

五右「アーこの眼が疼いてならぬが、さう〳〵當家に御厄介も掛けられず、お禮を申して立つことにしやう」と内證話しのやうにして金太夫に聞ゆるやうに話しました、すると金太夫は出て參り

金太「先づ〳〵、お眼の痛むのを無理からお立ちなさるに

は及ばぬではございませんか、最う少しお樂になるまで、手前方に御逗留あつては如何、何も宿料をお出しなさつてお泊りなさるに遠慮は露ばかりも入らぬこと、郊外へお出ましに相成れば景色は佳し四邊に草木も澤山ありますから、お眼にも一段の養生になります、然うなされましては如何……」と勸めて呉れますから

五右「それでは誠に申兼ねましたが、今一兩日逗留さして頂きませう」と是に於て遂に腰を据ゑることになりました、然るに金太夫は都度娘のお瀧をば若旦那の側へ行け〳〵と云つては遣はします、五右衛門も旅の憂さ晴しと、何時しかこのお瀧と云ふ娘と別なき情交となりました、これ芝居狂言で致しますと五右衛門の女房でございますが、決してこの頃はひ五右衛門は女房などは持ちません、所が詰らぬは例の夜叉丸の八藏でございまする「アー馬鹿〳〵しい、同じ兄弟分でも他の奴は四角四面の面相に生れたから、番頭だとか手代とか言はれて居るが、乃公を見ろ、彼奴等から然う込遣られるやうな者ぢやないが

面相が下品いたけに大仕掛の案内をしながら下男の役廻りとは……イヤ取うそれも父母を恨ひよう他はない、性質の滑稽面相、アレマア其辺でも散歩いて来やう」と呟きながら飄然と戸外へ出ましたが彼是れもの八一刻も経つたと思ふ頃、周章を喫つて転け戻りました

次「ヘエモシ若旦那様……」

しいではないか、お眼が不快いとて閉いでお在でなさる若旦那、それに汝れは飛び歩いて面白さうにもせんが源五郎さん、今私は栗島さんへお参詣を致しました、すると大阪の春日先生に出会ひまして、何しにこんな處へ来て居るのぢと仰せられますから、実の所は若旦那様がこれや八助、とこのやうに仰せられなら恩老が行つて診察をしてお進げ申せば直ぐ癒りもするであらうが、先方が薬家の然ふ云ふお屋敷で二字帯刀のお家として見れば、何うも此方から出向けると云ふ辞にもならず、何うも仕方がないとこのやうに申して居られました」

次「ヘエモシ若旦那様……」

「ア然うか……若旦那、お聞きの通りの次第でございます」

春日先生が當地へ保養旁々お出でになつて居るとな、あの先生は親共以来懇意の先生、診て頂きたいとは思ふけれど、御當家へ對けて然う〳〵御迷惑も掛けられず……」

金太「イヤ、〳〵向苦しうございませう、何なら當方へ引き寄せてお泊め申して居られるのでございませう、何なつては如何でございませう」

五右「ヘエ……何も宿賃を頂くから置いて、治療をしてお貰ひなすつてはそれでは苦しうございますまいか」

金太「一向……何も宿賃を頂くから差支へはございません、廣い屋敷ゆゑ五十人前や八十人前は手前の方に収器物も多分はございませんから……」

五右「それでは恐れ入ることながら、八助を呼んで来て呉れ」

次「畏りました」

そこで八助の夜然う云つて先生を迎へて来て呉れ　次丸は駈け出しましたが、翌日先生と同道して立帰つて参りました、外に薬箱持が一人、春日先生と云ふのは

大兵肥滿の坊主でございますが、これ丸山の燒石坊、藥龍持となつて出て參つたは堅田の小僧、そこで例の春日先生は「アー、これは〳〵御保養でござるかな、イヤ折々は御保養なすつたら、土地を轉へて閑部な所へ云ふ處にて暫く御保養なすつたら、屹度眼は全快しませう、幸ひ良い藥を持つて參つて居りますから差上げませう」と又水藥やうなものを出して「これでお眼をお冷しなされ」これ同じく砂糖ぶでございまする、弱つたのは五右衛門で、叩けても暮れても砂糖水で眼ばかり洗ひ、心地が不可いからと直ぐ紅絹の布に唾液を附けて、眼を押へるやうに見せて砂糖水を拭き取り、早う何うにかせぬことには心地が不可うてならぬと困つて居りまする　五右「時になつて直樣書面を認めて當家よりも經ちまするが、戸外の方より」　○御免下さいませ、金太夫は醉を

聞き付けて　金太「ヘイ誰方……」　屋五左衛門の出店、京都三條の絹屋五三郎方の若い者でございます　金太「オ、それは〳〵」　○承れば御當家樣に、若旦那五三郎樣並びに番頭共が御厄介に相成り居りますとの趣き、誠に本家の親旦那もお悅びでございまして、お禮旁々兎も角私共が參りましたやうなことで……　金太「それは〳〵……」　○エイ手前は近江の國は彥根在の絹巻などを載せて持つて參つて居りまする、そこでこの節を直樣彌八源五郎の兩名に告げまするとこれは誰れかと思へば友九郎どん、大太郎どんに半藏どんに佐五七どん、御苦勞でございました　友九「イエ、何う致しまして、若旦那のお眼は何うでございます　彌八「イヤ追々快い方で、それに願うてもないことには春日先生が當地へ御保養にお出でなされたのにお出會ひ申してな　友九「オ、それは〳〵　彌八「それで春日先生を當家へ迎へて泊つて頂き、側に付添うて療治をして頂いて居るやうなことで　友九「それ

はマア何よりのことでございます」彌八「それでマア追々若旦那も御快方に赴いて來ました、此品は御當家へのお土産かな、よし〳〵……」

ア！御主人、些だ粗相な品でございますが、何卒お納め下されます

やう　金太「マア何から何まで御心配、寡う存じます、娘や、斯様な品を下された、厚くお禮を申せ　有難う存じます」次九「併し彌八さん私共は若旦那樣にお目に掛りませんでも、最う貴下にさへお目に掛れば宜しうございますから、これから何處ぞ宿許のある處へ參つて一泊いたし、直ぐに京都へ歸りませんければ、店も無人でございますから……」彌八「ム、、それも然うだな、併し一應若旦那にこの由を言うて見やうから、マア一寸待つて居て呉れ」すると金太夫でございます　金太「イヤこれ御番頭の彌八さん、このお方々も何うせ今宵は宿許でお泊りなさることなら、迎ものことに手前の方で、尚だ座數も空いて居りますから、何うせ宿賃をお出しなさるものなら、私の方でお泊め申しても可いではございませんか」彌八「それでは餘りガヤ

〳〵と……」金太「何のそんなことに頓着はございません、若旦那へ對けてこの事を申したら、若旦那も豈や泊るなとも仰しやいますまい　彌八「左樣でございますか、そんならお前方も疲勞れて居やうから、幸ひ八助も居ることゆゑ、八助の部屋でいも今宵は一晩泊めて貰ふかな　友九「ハイ、誠に何うも恐れ入ります」が、ちやア然う云ふことにさして貰ひませう」そこで五右衛門の五三郎にこの由を申しますると、顏を顰めながら　五右「お氣の毒ちやのウ、けれども可愛さうに彼等も疲勞れて居るのに、これから三里もある處へ遣るもの氣の毒、そんなら然う云ふことにして貰はう」と遂に京都から參つた者は皆當家に泊ることになりました、扨てその夜に至つて一同は五右衛門の居る室へ打寄りましたが　夜又「サア頭、これだけ揃へば可いではないか、仕事に掛つては何うだ　五右「ム、、可からう、然らば銘々支度をしろい」この時彌八は側より　彌八「頭、待たんせ、臨兵急に慌てずとも、お前に一言

云ふことがある　五右「何、貴様が……　留八「他のことでもないけれど、實の所お前はこの家の娘のお瀧と、疾うから手を着けて居るでおらうがな」五右「イヤ、最う然う知られたら仕方がない、實は退引ならぬことゆゑに、恥かしながらこの家の娘に手を着けた　留八「それぢやア何うも荒い療治も出來まいがな　五右「然うさ、温順に金子さへ出せば荒い療治も出來ないが、こりやア乃公の一生の誤り、アー迷惑なことが始まつたわい、併し間誤〱して居ては露顯の原因、寸時も早う仕事に掛らう」彼是れ用意のその折から、慌たゞしく駈けて參つた娘のお瀧「アレモレ五右衛門さん、少時待つて下されまし　五右「何この乃公を五右衛門とは……　瀧「疾より承知を致しました、一日二日は心若かずに居りましたが、恥かしながら新枕、交し〻尊公のお身の上、大抵それと分りました、實に父上金太夫殿、強慾非道の方ゆゑに、お憎しみは御有理なれど、惡い人でも親は親、何うも無殘〱殺されましては……　五右「ム、、イヤ親子の情愛然もあるべし、

左ば然りながらこればかりは、何うして見ても助ける譯には相成らぬ、疾く用意を致せ一同の者……」合點なりと京都より持つて參つた、絹卷の臺にしてある二重底のうちより、手槍、大刀その他の兇器を持出し、手ん手に用意に掛りました、所へ金太夫は慌たゞしく駈けて參り　金太「少時お待ち下され五右衛門どの、金子が入るなら何程でも進上いたしませう、如何にも私はこれまで強慾非道な事をなし、我れを忘れて細民を苦しめ、百姓共に迷惑を掛け、非道な金子を取立てました、今度お前樣がお出でになりましたのも、長者の若旦那と思ひしゆゑ、御所持の金子に眼が眩れ、只金子が欲しい〱と思ひ詰め、無暗に尊公を引き留めましたが、その御滯在中娘のお瀧と別なき交情とおなりなされたことも、今立聞きをするまで知らず、手前より娘が前に承知をして、尊公方をば盗賊の巨魁石川五右衛門殿を首めその手下の方々と看破きましたは、娘の方が遙かに目が高うございます、縱令尊公が盗賊でも、天下に聞えし石

川五右衛門、最うこの上は是非がなて逃つて下されまし、生来短きこのめましたから敗心いたし、金子は殘らず進上申さう　五右「イヤ、強慾、は無慾に似たりとやら、極悪者に近しの例し、最期の際にその氣が付いたか、然りながらこれまでの罰られ、種々様々に難儀をなせし者共の、恨みは到底免れる理由はない、併し望みに任せ娘のお滝はこの五右衛門が添ひ遂げて遣らうと仰金太「これ娘　あれを聞いたか、五右しやる「阿父さま、それは眞實のことでございますか」年齢は十九歳で一人前の娘にはなつて居りますが、都會を離れた片田舎、阿嬢兒育ちの娘のお滝も嬉しげに駈けて參り　そんなら石川五右衛門どの、末始終添ひ遂げて、夫婦になつて下されますか　五右「如何にも夫婦になつて遣らう」云ふより早く鬼丸の柄に手を掛け、抜く手も見せず娘お滝の首をそのまゝ前へザクりと切り落しました

これを見るより金太夫、魂を天外に飛ばす感ひをなし、此方にあり合せる長押の槍を取るより早く一振り振つて槍鞘を拂ひ、リウ〳〵と扱き立て金太「石川五右衛門氣が違ひしか、血迷ひしか、何故娘のお滝をば、我が眼の前にて切り捨てた　五右「この世の縁はこれ限り未來で永く夫婦になつて遣るから左樣心得よ　金太「ヤア最う斯うなれば娘の敵、其處動くな」と五右衛門目掛けて突き掛りまする、丸山の燒石坊、木谷川彌八、その他の銘々各自に鑓を掛けんと、イデ我々が金太夫を永眠らして了はん　五右「イヤサ貴樣等が手を出すまでには及ばぬ、此處には掃はす一刻も早く土藏の金子を……小雀、夜叉丸「ヘエ……　五右「孫家内の者は如何いたした　夜叉「孫て頭より吩咐けられましたる通り、一人殘らず耳とゆる、悉く後手に縛り上げ、眼を覆して轡を噛ませ、殘らず土藏の穴に蹈をば致して置きました　五右「イヤ、それで可し〳〵、この上は早く土藏の金子を引揚へよ　皆々「合點でござんす」このとき金太夫は

無念の切齒をなし金太「ヤア汝れ、縱令命を捨てるとも娘の敵を取ら
いで措かうや」と激しく突き込んで參る槍尖を、一聲踏共斷り込ひ銳き五右衛門の太刀尖を、
少時鬪ふそのうちに、一
槍の柄を以て發矢と受けたが運の盡き、直ち槍の柄を半程より切り
折られ、餘る刀で肩口より乳の下へ掛けて大袈裟に斬り込まれ、血
煙立て人打倒れました、そのうち早や土藏の戸前を打壞し、中より
取出す金箱を、躡て便利よき處に船を繫ぎありますから、追々く其船
へ對けて金子を積み込み、衣類や器具には目を掛けなと、早くも一
同引き伴れて、五右衛門はそのまゝこの處を立つて大阪に來り、直
樣伏見までその船を上し置いて、伏見の里から京都の隱れ家へその
金子をば運ばせましたが、凡そ五千兩餘りございました、斯の如く
五右衛門は非道な奴の金子を取上げては、京都洛中洛外の難澁者に
それとなしに施して遣り、只自分は風名を受けて百人の人間に恨み
を受けるとも、萬人の難澁人を助けて遣りたいと云ふ了簡でございま
すから、朝茶花俳諧の宗匠となつて彼方此方俳回いたして居り
ますが、茲に一ツの間違ひが出來て參ると云ふは、秀吉公關白に
御昇進、五右衛門、秀吉公の意中を察したるが爲め、有緊天下を一
變せられし秀吉公も、五右衛門を氣になさつたと云ふ、秀吉、五右
衛門出會ひと云ふお話しに引き移りますが、一息いたして辨じませ
う。

第二回

扨て五右衛門は三條河原町の隱れ家に在つて、始終京都洛中洛外の
貧民へ對けて、それとなく施行をして遣りますから、貧民共は河原
町の宗匠無德齋と云へる方のお情に依て今日の糊口を凌ぐことが出
來ると限りなく悅んで居りまして、茲に五右衛門はございまするが、
秀吉公の身体擧動に注目いたしまするに、彼の人容易ならざる大器
ある御大將なれど、著久しからずと五右衛門はそれのみに目

を苦げて窺ひ居りまする、然るに秀吉公は上の者が奢つて遣らいでは細民が立行かぬと云ふことを常に仰しやりまする『殘りなく枝打ふ月今宵、また來ん春のこと』何うしても大名と云ふものは一年に百萬石の知行をお貰ひなすつたら、百萬石の所帶をしてゐらぬければ細民の立行くものではございません、奢つて居るやうではございますが然うではない、それが融通でございますから、一百萬石の知行を取る人が、五十萬石で臣等萬般の扶持から且つは一年間三百六十日の費用を勘定方に命じて活計を立てさるやうなことをして居てはん到底町家の立行くものではございませんさうで、そこで秀吉公は酣中お氣の大きな方でございますから、物を惜し氣なく人にもお遣はしになりまして、既に天正十年山崎の一戰に伐り勝ち十一年賤ケ嶽にも勝利を得、同十二年小牧山に於て北畠信雄の爲めに徳川家康と戰はれましたが、家康、秀吉の大器を知つて遂に和談と云ふことに相成り、今は概ね天下は御自分の掌中に握るやうな故

合に相成りましたが、何うしても四國路は少しく歸服いたし兼ねまする、そこで秀吉公は只管四國へ對けて目を着けられました、と云ふのは足利十四代義輝の公達覺慶乙丸と云ふを、長曾我部元親が預かり、これを補佐して再び足利の天下に致さうと云ふ考へがございまする、秀吉公は深くこれを心にお懸けなさいまして、何分四國の長曾我部は容易ならざる家柄にして、聖徳太子にお味方を申上げ、その英名を天下に轟かしたる楠川勝が末孫、殊に勇士は星の如く集まり居る、事の理由も糺さずして短兵急に軍勢を差向くるは迚だ忽の擧動のみならず、先方へ報さずして突然に軍を出すと云ふは秀吉腰痛の閊ひを受けん、一應四國へ對けて使立を差向け、秀吉の意に從へば可し、自然從はざる時に於ては、軍馬を發して一戰に及ばんと云ふお考へからして、この使者には甲が可からか乙が可からかと云ふことになりましたが、茲に一方の勇士福島正則は「拙者に仰せ付けられますれば、速かにこの使者の役目を相勤め候はん」と事

もなげに申しましたが、毎々申上げまする通り福島と云ふ人は、成るほど勇はある人でございまするが、猛勇と申して前後に考へのない人で、なか〳〵人と応接などの出来る人ではございません、只兵の軍人にて腕力業もて暴れることには随分用に足りる人でございまするなどゝは思ひも寄らざること、尤もこの役は勇よりも智恵と辨舌に依るものですから、何でも辯の能い者を遣はされば相成らぬと思召し、そこで登営つて石田三成に申付けられました、三成謀んでお受けを致し、然らば拙者速かに四國へ参り、一首の下に長曾我部を説き伏せ申さん」と返答に及びまして、この時正則はハッと許りに石田を呪め付け、如何に三成、汝は四國の長曾我部を、田夫野人と思ひ居るか、恐れ多きことながら容易に我が君の言葉に従ふ長曾我部にあらず、先づ御前にも罷りとお考への上、彼の地へお遣はし遊ばす方、至極宜しからうと存じまする」と申上げましたが、此言は福島が一代のうちの名言でございまする

と云ふのは、秀吉は今三位宰相で在せられまする、尤もこの三位宰相の位は天正十年十月十五日、織田御親子の御法事を紫野大徳寺に於て営まれました時、御所より下し賜かれましたのでございまするそれに就て、最う儘かなことですから、切て關白まで御昇進あれば その御威勢に依ても従うて歸服することもあらんかなれど、三位宰相の御資格ではなか〳〵四國の長曾我部は容易には應じますまいと云ふ、そんな深い考へがあつて福島が申したのか、但しは他に何ぞ所存があつて申したのかは知りませんが、先づ心ある人の聞く所に依れば然うより他に思ひやうはございませんから、秀吉公も亦成程と云ふ所へお氣が付きました、そこで天皇へ奏聞し奉りまする と、人皇百五代の帝正親町院、汝は朕の赤子なりとまで宣ひし程の御寵愛深きことでございました、依て關白にて、秀吉は至つて天皇の御寵愛深きことでございました、公卿には近衛殿と云ふ關白の白も顔へば許可になるかも知れねど、一寸この話しは秀吉も容易には頗ひ難いのおありなさることゆゑ、

でございまする、それに内々聞き合はして見ますれば、到底近衛殿に於ては拒まるゝであらうと云ふ評もございますし、又二ッには系圖と云ふものを持ちませんければ少しく遜び難いのでございまするそこで秀吉お考へになりましたのは、當時備後の國鞆と云へる處に足利十五代の義榮と云へる方がお在でになりまする、當地は長州の御領分にて毛利輝元の世話に依て置いて貰うて居るのでございます、當時輝元は秀吉公の幕下同樣、何ぞ足利を招くに毛利に於て彼是れ言ふべきことやあらんと思召し、そこで使者を以て足利義榮を京都へ迎へました、すると義榮は儘かな家來を引き伴れて、京都へ對けて着の上南禪寺をば旅館としてこれへ逗留になりました、そこで秀吉我のときに義榮の考へまするには、今や天下七分の泰平と相成り、秀吉我れを迎へしは畢竟我れを將軍に直す所存ならんと思ひまして夜中二條城へ參つて秀吉に面會を求めまするとひになりました、そこで足利はグッと發怒きまして

備後の鞆にて漸く毛利輝元の情けに依り、一萬石の鼻紙料を貰うて發はれ居る身の上、旭々京都まで呼び寄せ呉れた秀吉ゆゑ、無念を地へて義榮挨拶を致しまするとと、秀吉の申しまするには「苟くも我が等匹夫より昇進り、織田氏に仕へてより漸く今日の地位を得、殊に天皇の龍顏麗しく洩らせられ、三位宰相とまで立身仕りましたが、這般秀吉をして關白に昇進させるであらうと云ふ内々勅命もこれあると云へど、情けないかな秀吉系圖なくては高位の貴族に昇ることが難しく貸し下されたく、お貸し下さるに於てはその借用料として、近江の國蒲生郡安土山に於て、放信長公の設けありし一城を貴殿に差上げ且つ御隱居料として十萬石の知行を附け申すべし、然すれば追々八方へ去りし足利家の浪士も、銘々立歸つて君を保護することに相成るやと存じ候ふゆゑ、何卒右御申知これありたし」と最と叮嚀に秀吉より勸み入れました、すると義榮は「この儀は一應余も臣等と和

石川五右衛門

談いたさねば即答はなり兼ねまする」と云ふお答へでございます、秀吉「何さま御有理のことゆゑ明日此方より使者を以て御返答を伺ひに出ますから、篤とお考へ置きを願ひたい」そこでその夜はそのまゝ別れることになりましたが、扨て翌日となりまして正午の刻までに差控へて居りましたが、足利の方より何等の返事もございませんから、秀吉公は脇阪甚内安治を以て、南禪寺へその返事を伺ひに遣はしました、すると義榮は最と嚴格に「脇阪に對ひ　義榮「秀吉が家來甚内汝使者の役目にて罷り越したるか　甚内御意にござりまするが　昨夜の返答を聞かんが爲めでもあらざるは汝の主人秀吉なり、苟くも足利家は初代尊氏より今日義榮の代に至れるもの、時の形勢に從ひ、毛利の食客は致すとは云へど、十五代相襲ぎたる家柄にて我れは源家の嫡流である、然るに汝の主人秀吉余の系圖を借らんとは何事である、秀吉は織田に任へて漸う平の姓を頭に頂くと云へども、その以前は尾張の國は愛知郡中村より

石川五右衛門

出でたる、筑阿彌彌助と云へる上民の許に成長つたる百姓ではない、その身の程も顧ず足利の系圖などゝは片腹痛きことである、立歸つて左樣申せ」このとき脇阪安治は心中に、汝れ小癪な義榮の一言、毛利家は安保親王の末孫大江廣元の家筋にて堂々たる家柄と云へど、時の形勢に依ては主人秀吉に從へり、斯く輝元殿ですら秀吉公を主の如くに敬はるゝに、その毛利の領分に情けを以て置いて貰ふ瘦浪人の分際にて、我が主人を罵詈るとは返す〳〵も憎むべき奴あのこゝな義榮奴、摑み殺さんとは思ひましたが、否や〳〵然うでない、使者に參つて左樣な無法なことも相成らず、無念を堪へて立歸り、この旨主人秀吉公へ申上げんと、早々安治は南禪寺を引き取り、二條城へ立歸つて主人に對ひ　甚内「恐れながら御前、以ての外なる義榮が挨拶にござりまする　秀吉「ム、イヤ彼れは恐鯨な者である如何やうなことを申したか　甚内「汝の主人秀吉は尾張の國は愛知郡、土民の家に生れし百姓ではないかなどゝ種々無禮なることを申し、

系圖を貸せよなどゝ、何事であると、樣もネヤ、の挨拶でござりまして」秀吉公はコンヤツと笑を含み給ひ「ヲヽ愚鈍な者は致方なきもの、日本に源平藤橘の四姓あれど、源氏盛んなる時は平藤橘の三姓は皆源氏の配下なり、平氏盛んなる時は他の三姓は平氏の配下なり、義榮の如きは時の形勢を知らざる奴、斯る愚者を討取るも無益なり、ヤア〳〵誰か島正則は居らぬか」ヘツと答へて福島正則御前へ罷り出でますれば秀吉「汝これより南禪寺へ罷り越し、足利義榮を備後の朝へ逐ひ歸せ」心得ましたと福島正則、鬼の如き自分の臣下、四五の勇士を引き伴れて、栗毛の馬に打跨り、二條の城を出づるや否や南禪寺へ駈け來つて大音聲「如何に足利義榮、身のはを知らざる白痴漢、能くも我等の主利の青侍、確かに承れ、今この處にて正則が陷み殺さんは最と易けれど、汝等如き愚蟲には手を下すまでもない、疾くこの南禪寺を引き拂ひ、備後の朝へ逃げ歸れば可し、咫尺して彼是れ申すに於ては、正

則ち此度所存があるぞ」言はれて驚く足利義榮、肝を冷して這ふ〳〵の体にて備後の朝へ逃げ歸りました、すると長州より秀吉公に申上げまするには、毎公に對して無禮をなしたる足利義榮、手前の知行所に置くも何とやら異なこと、早々逐ひ拂うて了ひませうやとのお尋ねになりました、秀吉公お聞きになり、諱元實に行屆いたることなれど、今諱元にして彼れを逐ひ出さば、日本のうちにて彼れの如き馬鹿者を世話する大名はあるまじ、情けを以て朝とやらに置いて發うて遣れとの仰せ、漸く秀吉公の情けにて餓え目をせぬだけのことでございまする、扨て秀吉は斯る如く義榮に系圖を借らんとせしを謝絶られ、何とか致して系圖をば調べたいと思召しまするが、この系圖と申しまするものは然う自由に賣買の出來るものではございませんから、秀吉公御威勢强しと雖も系圖だけは私に求めることは出來ません、就中この日本は歷史と云ふものゝ正しい國でございまして、斯樣なことは皆さま御承知でございませうが、系圖上

ばては日本くらゐ正しい國はないのでございまする、既に人皇百二十餘代とまで皇統連綿と續きました御事は、恐らく我が日本を除きて他國にその例を見ないことでございまする、然るに秀吉系圖の手に入らぬを頑らはしく思召し、幸ひ御自分の御養子としてある、三好秀次公の簇中は、菊亭右大臣の姫君でございますから、この菊亭公へ系圖のことを御相談になりますると、菊亭公の仰せられますには「歴もこの事は飽くまでも計らひたくは思へども、貴下と歴とは緣續きのことゆゑ、私の緣故を以て右大臣卷季周旋をなしたと言はるよも殘念、御所に於て評定もこれあらば、歴直ちにこの事を貴下に報すべし、貴下倘はそれまでのうちに、それ〳〵公卿に手入れを致し置かれる方至極宜しからん」とのことにございまする、前に話し申しまする通り、物は惜し氣なくお遣はしになる秀吉公でございますから、そこで公卿方へは十分のお手入が出來ました、これに百八の者は九十八まで皆秀吉公に從ふことになりました、然るに御所に於ては天正十三年九月愈〻評定と云ふことに相成り、上は左右の大臣より大納言、中納言、小納言に至るまで、悉く紫宸殿に集められての御評定でございまする、然るに菊亭右大臣は內々この事を秀吉へお報せになりましたから、未だ評定一決いたさゝるうちに秀吉早くも馬に打乘つて參殿いたしました「羽柴筑前守し」と お觸が掛りましたから、思ひも寄らざる處へ秀吉參殿いたしたりと 近衛殿も興醒いたされました、待てば程なく筑前守、紫宸殿へ進んで一同の公卿方に挨拶を致され、而して後近衛殿に對ひ 秀吉「關白殿に伺ひ奉る 近衛何事でござる」とお答へになりまするその聲、恰も雷の轟くが如く、ウンと氣張つて音聲を發する時は、八町も響くと云ふ位ゐの大聲でございまする、奇妙奇体烈なる顏附に怒氣を含みて近衛殿を睨め付けました、秀吉は猿面と云ふことを申しまするが、近頃の者に秀吉は猿面にあらず犬面なりと記したのを見ました、猿には似てな

かつた犬に似ておつたと云ふのです、何方にしても畜生は外れないと云ふ如な面でございました、なれども武威を四海に輝かし、百戦に百捷を得、その器量は公卿方も皆知る所なれば、有繋の近衛殿も少しく阿易の色を現はされました「恐れながら這般天皇の詔勅に依て、秀吉を關白に昇進なし下し置かれ給ふに、何ゆゑ近衛殿に於ては是れを彼是れ申すべき所なけれど、系圖なきものは猥りにこの職には遇め難し、依てこの儀評定いたすなり」秀吉「恐れながら近衛殿に伺ひ奉りまする、系圖さへ正しくば主殺しにても惟任將軍に御登庸遊ばすや、秀吉は天正十年身は中國に在つて主家の大事を聞き、敵を誅つて引返し、勝負を山崎に決して主の仇を報ひ、悼りながら上は萬乘の君の宸襟を安んじ奉り下は萬民の苦しみを助け、且つ盛上人のお困り遊ばすを秀吉今日

を孤々様々に心勞なし、漸うこれまでの泰平に到らしめたることにござりまするが、何ゆゑ近衛殿にはこの勅吉を斯くまで憎しみ給ふや、御返答を聞きたい」この一言には有繋の近衛殿もウンと詰りをしました、この上は天皇に對して奏問いたすべしとあつて、遂に直様參内問を遂げられました、所が勅命に依て秀吉は關白に任せられ、これまでの素平を賜ばることになりました、總て此の日本は豊秋津洲と申して鮮鈴の如き形狀になつた國ださうでございまする、そこで豊秋津洲に一人の臣と云ふので茲に豊臣と云ふ姓を下し置かれたのでございまする、成程唐土日本の出世の龜鑑と云はれるも道理でございまする、依て最う誰れに遠慮もございませんから、天皇から直接に姓まで賜はり、立派に關白に昇進なされたので誰れでもらうが頓着なく、秀吉公關白の服を着けて御參殿さるゝやうになりました、扨て誰れ一人も秀吉公を捉む者はないやうではございまするが、何しろ近衛公

は御家でございますから、又五人七人は近衛殿に同意をする人もありまして、この人々は勿論秀吉を憎みまする、何時ぞは秀吉を因らせて遣らうと密かに考へて居りました、然るに或時秀吉公例の如く参殿いたされまするとする　秀吉「何事でござる　○這般某所の神官より延喜式局を剔ひ出でましてござりまするが、如何計らひませうや、秀吉公は一向分りませんから、これが為め一人として言葉を返さず、空しく引き取りましたことは此方は分らぬ、分る者に尋ねられよ」とその醜例の大酔にて、耳底まで貫かれるやうでございまてござゐまする、又秀吉公はお歸りになりまするとして　秀吉「幽齋、余は最う関白を辞めやうと思ふのぢや呼びになりまして　幽齋「其は又何故でござりまする、今日も御所に於て前公卿輩が余に対して延喜式局と云ふやうなことをうたわいしてましたが、殆んと困つて了ひ出しましたが、そのやうなことは此

方は分らぬゆゑ分る者に尋ねられよと申しました　幽齋「それで宜しうございりまする、延喜式局と云ふものは、それは斯う〳〵斯様なものでござりまする」と一々教へました　秀吉「ムヽウ左様か、○余もこんな困つたことはないぞ　幽齋「それは御前、御存じなきことは御前は武家のことゆゑ知らぬと仰せあればそれで通りますから……　秀吉「左様か　幽齋「殿下は近衛関白殿を逆臣日向守を任将軍に任せられたる賑を以て、玉川へ封けて配し給ひましたるゆゑ、近衛殿に親しき公卿輩が殿下を恨んでのことでござりませう尚だ〳〵その位ねのことはオメの端緒でござりまする、最つと古事を殿下へ封けて申上げるも圖り難うござりまするゆゑ、その節は何も臨機應變の返答遣ばせ、及ばずながら幽齋存じ居る限りは御指南申上げまするから……　秀吉「頼もしきその一言、余も其方一人が頼みおやわい」他人を便りの関白でございますから、これが本當の暖白でございませう、又幽齋は足利家の武士でございまして、何事も

能く存じて居りまして、殊に歌道に於ては大内にても立つ者なき位ねの名人ゆゑ、公卿も細川には一歩譲る位なでございまする、扨てその後秀吉公參殿いたされまする公卿達何か待ち合して居りまする、最う關白になりまするとの大臣でなければ掛りませんと云ふ譯で、これは關白か左右うになつたのは、これ程の仁でも嬉しうございまする、別に威張るとと云ふ譯ではございませんが、秀吉公は御自分の身の程を能く辨へて在つしやる人でございますから、それだけ餘計に嬉しう思はれまする、今日しもコヽ〳〵と笑を含んで下殿いたされんとする時、例の公卿方は秀吉公に對ひ○關白殿へ伺ひ奉ることあり　秀吉「何事でござる」ながら關白殿に御昇進のお悦歌をば願ひたうございまする」すると秀吉キツと公卿方を睨め付け　秀吉「二十五歳より紙田氏に仕へ、永祿四年四月四夫下賤の草履取より、天上十五年の今日まで二十五年の間、戰の場を往來なし、晝夜を別たず苦心の末今日の身の上となりし暁盡の關白、和歌俳諧のやうな氣樂なものを稽古する餘暇は一日もなかつた」この一言に公卿方は唖然いたしてヘッと云つて平伏して了ひました、賊に稽代な關白でございまする又秀吉公も先方が平伏して見ると和歌の一首も詠めぬと云ふは口惜しいと思はれまして　秀吉「併し俳句ぐらゐは少しは遊れやう」云はなんだ方が宜かつたのでございまする、和歌を詠んで呉れよと云つたのですから、俳句のでございますから、先方は熟練者ばかり寄つて居るとさへ云へば望みでないからそれには及はぬと云ふだらうと思ひました、所が何でも捻はぬ一ツ困らせて遣らうと云ふ公卿方の考へですから　○俳句でも詰捻でござりまする、秀吉はこれは失策つたと心中に當惑いたしましたが、何しろ稽古のしてない人ですから心に不圖浮んだまゝ　秀吉「奥山に紅葉ふみわけ……」とまで出鱈目に口走りましたが、待てよ、これは猿丸太夫の和歌なりと思ひ返しました

と云ふのは自分の顔が猿面で平素人に猿だ〳〵と云はれますから不圖猿丸太夫のことを浮んだのでございます、何うも奥山に紅葉ふみわけと出たのでございますから啼く鹿だと云へば笑はれるでございませうし、尾は出ず當惑の体でございましたが、公卿方は「奥山に紅葉踏み分け……」と聞を聞へて申しましたから、秀吉公も當惑の餘り「なく盛りやわい」と云つたなり、其赤な顔をして下殿いたされ、そのまゝ二條城へお歸りになりました、お室へお這入りになると直ちに細川幽齋を呼べとのお言葉直様お側役よりこの事を告げますると早速幽齋は出て參り

幽齋「何事でござりまする」　秀吉「幽齋、今日下殿の際大内に於て斯々でもあつて、余も口惜しく思うたが、斯様〳〵に申した　幽齋「御立派なお答へ、それで宜しうござりまする」　秀吉「所で脇をぬといふのは殘念と存じ、俳句ぐらゐなら少し遖ると申したで脇をぬといふのは殘念と存じ、俳句ぐらゐなら少し遖ると申した自智それは可けません、じて何う云ふことをお吟みになりました、秀吉「吳山に紅葉踏み分けなく盛と云つた　幽齋「それは大依和歌にも俳

句にもなつて居りません　秀吉「道理で皆が笑うたわい　幽齋「有理なことでござりまする、イヤ幽齋何うにか致してお恥辱をお雪ぎ申しませうと」　秀吉「武藏野に籔をたばねて降る夜半は、益よりしかなく蛩ぞなき」と以前の笑うた公卿に書いて贈りました、公卿方も正歟そんなには有るまいとは思ひましたが、詠人が細川幽齋でございますから、これが爲め公卿も笑ひもせずに續て和歌と云ふものは無いことでもその道理に適うて居れば、それで以て和歌になるのでございますから、これが爲め公卿も笑ひもせず置りも致しませんでした、その後幽齋は秀吉に對ひ　幽齋「御前、些と殿下も歌道にお心をお寄せ遊ばしては何うでござりまする　秀吉「然うぢやのう、余は軍人にして和歌のやうな因循なことは心に遖まなんだが、些と遖つても可からう　幽齋「それは太田道灌でさへ恥ぢを掻きまして歌道に心を寄せましたことがござりまする　秀吉「ムヽ、太田道灌は上杉定政の臣にして、至つて武勇れし者にして歌道など は嫌ひにてありしを、彼の山吹の一首よりして遖に歌道に心を寄せ

文明十八年十二月最後の日も、相にて突かれながら和歌を詠んで死んだと云ふことを聞く、余も疎つて見やうかのウ　幽齋お疎り遊ばしませ　秀吉何う云ふことから稽古を致さば宜しからう　幽齋先づ殿下がお心に浮んだ通りお詠み遊ばせばお宜しうございまする、彼の百人一首のうちなる蝉丸と云ふ人の如き、あの人は極く不器用なる質にて、餘り不器用にて仕様のない所から、逢坂に配せられて閑居の身の上となり、如何にも口惜しいと思はれて、思ひ侘つて詠まれたるその和歌は、定家卿の撰まれたる百人一首のそのうちにも、湖點のない和歌と云ふのはこの蝉丸の和歌だけでございまする「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」何うでござりまする、他のお方のは天智天皇を首めとして、所有方々もお歌のうち、一字なり二字なり湖點を附けねば和歌にはなりません、蝉丸ばかりは湖點を付けては歌にはなりません、斯く不器用な人にでも一生のうちには斯る名歌を詠まれたことがございまする、依つてお疎り遊ばせば決して詠めぬと云ふことはございません　秀吉なる程、イヤ余も一ツ稽古を致して見やう」とこれより秀吉和歌を詠み出すと云ふ大滑稽のお話し、チロイと一息御免を蒙りまする。

第九回

扨て秀吉公はこのとき少時考へて居られましたが　秀吉ノウ幽齋殿　幽齋ヘヘヽツ　秀吉歌と云ふものは涼しく細う出て半程でポンヤリと大きう……　幽齋左様でござりまする　秀吉末の止めをばキチッと止めれば歌になるでもらう　幽齋御意にござりまする　秀吉「糸薄布袋の腹に細巻いて、荒金造りの金槌で打つ」何じうやア、幽齋それは何でござります　秀吉糸薄は細うて涼しいわい　幽齋それは枕詞になつて居りまする　秀吉布袋の腹に細を巻いて見よ、ポンヤリと大きうて工合が可からう、荒金で造つた金槌で打てば能く固まつて可からう　幽齋それは和歌とも判じものとも謎へ方がございません

秀吉「可かぬかナ　幽齋「それでは全然お座へは出せません　秀吉「ム、ウ、然らば最つと大きう詠んでは何うぢやな　幽齋「大きいのは宜しうござりまする　秀吉「地痴から屋の親父が飛んで出て、火事の火の玉吹き消し、にけりとは何うぢやな　幽齋「ヘエー、何のことでござりまする　秀吉「地痴と云ふのは山のことぢやわい、屋の親父とは月のこと、火事の火の玉吹き消しにけりと云ふのは、風がフウーと吹いたので朝の日の出の邪魔になつたと云ふことぢやござりませんか　秀吉「ヘヽア、全然採るところはござりまするが、何ぢや　幽齋「お題を下し置かれますれば、狂歌と云ふものは一番詠み易うござりますから、幽齋この席に坐して即吟いたしませう　秀吉「ム、、題さへ出せば何でも狂歌になると申すか　幽齋「左様でござりまする　秀吉「ム、、よし〳〵、然らば『吹くに吹かれず掴るにすらに吹かれず掴るに掴られず』と云ふ題を出さう　幽齋「山伏の法螺破れ珠数の緒切れて、吹くに吹かれず掴るに掴られず　秀吉「成程、面白いのウ幽齋、余も……

幽齋「ハヽッ、何と仰せられまする　秀吉「火吹竹コロ〳〵摺粉木取り違へ吹くに吹かれず掴るに掴られずとは何うぢや」　幽齋は腹を抱へて笑ひ出しました　秀吉「次は『圖燵裡のなかで船を走らす』ぢや　幽齋「詰う然し幽齋苦しも風せず　秀吉「成程、圖燵裡のなかで船を走らす　幽齋「さてそんな無法なことを仰せられますなら『何うも云はれぬ〳〵』ぢや　幽齋「大江山童子のうちの年弟くにそのおきなかにはの見ねて、鬼に使はれ居る奴だから鬼は外程、芒の穂と船の帆を掛けて、火の根と海の神を掛けたのであるが巧いな『何うも云はれぬ〳〵』　秀吉「成程、鬼に使はれ居る奴だから鬼は外男、何うも云はれぬわい、余も一首詠ひ杯に含んだら……とは何うぢやん、何にも云はれません」と　幽齋「芒粉を口一ぞする　幽齋「また一ツ海土が揮へた千里光、海の底にて酒宴ぞする、秀吉「ム、、旨いこと云ひ居るな」云ひつゝ秀吉公、幽齋も呆れました　秀吉「海の底にて酒宴ぞする、幽齋の際を狙へて胸元を力に任してお突きなすつた、思はず幽齋仰向に打倒れまし

て「此は御前何と遊ばす」すると秀吉公は「サア謡め狂歌を……」と頻りに御催足なすつた、幽齋は起き上りさま幽齋ドンと突きストメと倒けて起きんとす、こんな折から狂歌出やうか（秀吉イヤ、賊に何うも恐れ入つた」と是に於て秀吉公は非常に感じ道にお心をお委せ遊ばすことゝなりました、根が機敏なお方ゆゑ少しくお疑りなさいますると追々詠めるやうになりました、然るに秀吉公は山の小父さんが桃を盗まれたと云ふやうな顔をしてお在で遊ばしもするが桃を好かに柿をばお好みなすつたから、御庭前に柿の木をば植ゑ付けてございまして、秋季になりますると其の柿が色付いて参り、遂には熟柿となつて汁の滴るやうになりまして、それをば取つて召喫るのを大の楽しみとしてお在でございました、御酒の醒め際などには随分好いものでございまする、二口聲も倒に頂戴いたしまして柿のある時分は、平素は餘り好きませんが酔ひ醒めに一ツ二ツは好いものでございまする、それに木に

實つてあるのと云ふものは好もしいものでございますから、臣等一同の者も折々は盗みに参りまする、すると秀吉は「この柿一ツにても盗み取る時はその跡輕るからず」と云ふことをお記しになつた立札をお建てになりました、喰ふなと云はれると尚更喰ひたくなるもので、衆はその柿を盗まうとはならぬお叱りを受けますから、一ツ柿をば頂ひます」と云ひますると幽齋「よし〳〵取つか細川氏、と幽齋は坊主頭に手拭を被り、て遣る」柿の木に登つて盗み取り、他の者に遣らうと思ひまするが、自分も好きですからツイ一ツ喰べまする と美味いから、ムシャ〳〵樹の上にて柿を喰つて居りまする所へ秀吉公は寝んで居られましたが目が覚めたものと見えまして、廂子を開けて縁へお出ましになりました、然るに幽齋はこれには心付かず、ムシャ〳〵取つては喰ひ又ムシャ〳〵取つては喰ひ夢中になつて喰つて居りまする、秀吉公の姿を見るなり他の者は皆逃げ去つて了ひました、

吉公はこれは怪しからぬ、他の者なれば兎しはせぬが相手は幽齋卿、
める時にも行かず、此は甚いことを始め居つたと大變に眩暈をなさ
れました、醉に驚き幽齋氣が付いて見れば此は幵も如何に、樹下に
は秀吉公がお立ちになつて居りますから、忽ち樹から飛び下り、樹
の後方へ頭を突き込んで平伏いたしました、すると秀吉公最うこの
頃は餘程お厭道も御上達になつてお在でなさいますから、柿盜人と
云ふやうなことは御せられませんぞ、忽ち即吟なされました　秀吉　柿の
本の人丸とこそ見ねにけれ、此處は明石の浦か白浪」巧く遁りまし
たな　秀吉　幽齋、狂歌にて詫言をせよ」ヘッと云つて細川は手拭を取
つて秀吉公の御前で恥おを柿の本、人丸なら　幽齋　關白の御前で恥おを柿の本、人丸なら
で顏は赤人　秀吉　ム、、有難の幽齋、其方だけには許す　幽齋　忝う頂戴
……」と柿の木へ登りまして二十七個喫べましたから秀吉公も喫驚
なさいました、併し稻古はせねばならぬもので、この位ゐ詠めるや
うになりました、依てこの後幽齋と連歌のお伽しになりましたが、

秀吉　盃洗のゆふべや名殘袖の月」幽齋は「野邊の月夜や秋の風」秀
吉また「分け入る蔭の松蟲音に鳴いて」と後を付けられましたが、
これは秀吉幽齋有名の連歌でございまする、それは扨て措きまして
忽ち石田三成は四國へ參つて長曾我部に對し、郷乙丸を秀吉公に相
渡し、四國のうちにて阿波、讃岐、伊豫の三ケ國を豎臣の手に渡し
て降參すれば、土佐一國は長曾我部に遣はす、但し何處までも郷乙
丸を將軍に直し、その後見を致して秀吉公に抗敵するやうなれば、
此度は容赦にて戰はんと云ふの談判に及びました、この時四國の勇士
一同は大いに怒り、上方よりの使者石田三成と云べる者の首を切つ
て軍門に晒し、秀吉の軍勢を引き受け、一合戰花々敷く戰はんと申
しました、このとき長曾我部の一子彌三郎信親進み出で、取るに足
らざる石田如きの命を取ふは輕なきこと、寧ろこのまゝ逐ひ返すが
宜しからん、是に於て上方の軍勢何時たりとも來らば來れ、一戰の
下に逐返して呉れんとの挨拶にて石田を返すことになりました、三

成は立腹つて斯くと言上いたしますると、然らば長曾我部を一攻めに攻めて呉れんとあつて、それ〳〵軍勢を御催促、先陣には加藤清正、毛利三家、吉川、小早川に命令けられ、伊豫路へ渡すことになり、秀吉公は軍勢を引率なし、泉州堺の玉遊舎へお着になりました、この時には實に堺の乳守と申すその實津守の街なぞは非常な金銀が落ちたと云ふことで、斯様なことは申さずとも近き御親伐の際も京都大阪の間の花街なぞに落ちた金子は莫大なものでございまする、往昔もその如く堺に居るうちは何う斯うはなきとも、明が日にも彼の地へ乗り込まば生きて戻らぬは軍人の例、覚悟を定めて金子を惜し氣なく遣ひますから、堺の街には大變な金錢が落ちまして、茶屋女郎屋なぞで夜が明けて下女が庭の掃除をすると、何時も金子の落ちてないと云ふことはなかつた位ねでございました、然るに秀吉公この玉遊舎へお着になりまするや、玉遊舎の表門へ對けて立派な貼紙をした者がございまする、朝掃除の者が出でゝ表門を見ると、大い

なる紙に大筆に「秀吉が四こくの米を買ひ集めて、今日もごとかい、明日もごとかい」と書いてございまする、そこで驚いて引き剝り重役へ差出しまするとお側の者より秀吉公の御前へ持ち出でゝ殿下のお目に掛けましたが、秀吉「この位ねの手跡の者であれば容易ならざる者、この堺にも數はあるまい、よし〳〵」と仰せられ、翌て秀吉公のお茶のお相手などに出まする當所の町人、天王寺屋宗珍、近江屋常祐、この兩名を招かれまして、秀吉「如何に常祐、宗珍、當堺の街において町人にてこの位ねな手跡なら其方等は知らぬことはあるまい、何うぢや」兩人「御意にござりまする」と打驚きましたが、一目見れば分つて居りまする、これは當時目口にて刀の鞘師、曾呂利新左衛門の手跡に違ひない、入らぬことを致したもの、併しそれと言つて、若し呼び出されてお手討にでもなつては不憫と思ひますから、言ひ合はさねど兩人は「仰せにはござりまするが、斯様な所の者は一向心當りはござりません」秀吉「ハヽア然うか」と仰せられましたが、扨

ては當所の者が呼び出されて尓の手前にてもなれば不悶と思ひ、それで言はぬのであらう、イヤそれなれば無理に尋ぬるも何とやら、言いて貰りし奴は余に遣らふ了簡のあつてなせしに違ひない、一ツ誘き出して遣らうと、そこで百孫八幡へ御參詣の儀を仰せ出され、その翌日秀吉公は立派なる行列にてお出でになりました、町役人も目口の音呂利が貼紙をしたことは手跡で分つて居りますから、戸前を朝通りながら、町役「オイ音呂利さん　新左「ヘイ　町役「一生懸命に仕事かな　新左「ヘエ〳〵、仕事をせにやア喰へません　町役「イヤ最う仕事をしなけりや大喰へぬやうなお前なら宜いが、遊んで居て馬鹿なことをして呉れるから、この堺の街も心配でならぬ　新左「何故でございます　町役「お前へ玉蓮舎の門前へ貼紙をしたであらう　新左「ヘエ〳〵致しました　町役「そんな事をして呉れては實に困つて了ふ　新左「何の困ることがございますものか、目口の音呂利が書いて貼つたと云へば宜しいのです　町役「狂人だなお前は……何卒最う馬鹿な眞似はして下さるなや　新左「イエ、私は馬鹿な眞似も何にもしやアしません」そのまゝ町役は出て行きましたが、一向手出しは致さぬが、別に何事もございませんなんだから、先づ町役も安心いたしました、然るに秀吉公は「ヘテな、誘ひ出さうとしても何人であらう」と御思案なすつて又歸途にもこの路をば御通行になりました、すると果して音呂利の戸前までお歸りになりまする、と一の立札が建つてありまする、近所の人々は又音呂利があんなものを建てたとアイ〳〵云つて居りまする、騒下は熟々御覽になりますると「秀吉が通路掃除するものなり」と書いてございまする、これを見て秀吉公は、扨ては此奴に違ひないとお目が若さましたゆゑ「彼の者を召捕れよ」と仰せられまするとお、腰繩にて王蓮舎へお引きになりました、少忽ち新左衛門を引捕へ、時は物置の隅に番人を付けて繋き置かれましたが、翌てお食事終つて後、新左衛門を庭前に引き出させ　秀吉「ヤア町人、不屆千萬な奴、

石川五右衛門

汝町人の分際として予に對つて無禮の擧動、不都合極まる奴である、この場に於て手討に及ぶからは覺悟に及べ　新左「イヽ、致方がございません、然るべきやう願ひます　秀吉「下衆下郎に似合はしからず心臆丈夫な奴である、依つて自ら斬つて了ふ　新左「覺悟の上のことでございますれば、思召し通りに願ひまする　秀吉「オヽ……」　言ひながら直ぐにお起ちになつてお手討にならんと致しますから、臣等の者は、伴臣恐れながら御前、輕々數くも只今の御自分にて、多寡の知れたる町人をお手討とは思ひも寄らさることにございまする、私共に於て斬り捨てませう」　ともありますを　秀吉「否とよ然にあらず、面魂の丈夫なるに愛で、予が自ら斬つて了ふでわらう」　是にて忽ち秀吉公は切水の用意をさせ、緣より下りて一刀拔き放ち給へば、家來は此刀に水を掛けまする、一振り振つて殿下は新左衛門の鼻の前へ鎗を突き出され、既に斯うよと見ゐましたが、今まで樂しも身を惋へず泰然として居りましたる新左衛門、忽ち妙な大きな頭で細い眼の青眼れた

石川五右衛門

る變的古な顏に、口一杯に開いて豆のやうなる涙を瀾してヲヽと泣き出しました、秀吉公も思はず噴飯し給ひ　秀吉「心膽丈夫なやうなれど、扨てとなつては武士とは違ひ臭怯な擧動、命が惜しうて泣くやうなその胥呂利ではござりませぬ　秀吉「然らば何故泣くが惜うて泣くやうなの胥呂利ではござりませぬ　秀吉「然らば何故泣いたのであるか　新左「恐れながら草履取から今關白とまで立身なされし御前樣、天晴御器量優れし御方と思ひの外、何程か私は悲しう存じまする　秀吉「此は聞所なり、何故子は精神が小さいと申すか　新左「殿下は斯樣な方の手討になるかと思ひましたればこそ、定めて秀吉が通路掃除するものなりと奮いたゆゑ、それが氣に入らいで斬らうと仰しやるのでござりませう　秀吉「如何にも左樣ぢや　新左「それで殿下は精神が小さいと申しました　秀吉「又何故故である　新左「然ればでござりまする、子供の瞬ふ今樣にさへ何と申

しまする、君が代は千代に八千代にさゞれ石、巌となれや苔の蒸すまで、恐れ多くも一天萬乗の君様ですら、君が……と云ふではござりませんか、成上りの關白の殿下に秀吉がと付けたれば餘程敬うたる積りでござりまする、それが氣に入らいでこの新左衛門を斬らうと仰せられるやうな、そんな糊齊の小さい方に斬られて死ぬかと思ひますれば、甚だ悲しう存じまする」でござりますれば、有無を言はさず一刀の下に斬り捨てゝ了ふでござりませうが、稀代不思議の秀吉公、此奴なか〳〵見所のある奴と思召しましたか　秀吉イヤ、何うも其方の申す所有理である」と忽ち縄をお解き遊ばし　秀吉今より予が召抱へて取らするぞ　新左「すりやもの私を……　秀吉ムヽ、予が手許近く召使ひ取らせん、何程知行を遣はさば予に仕へることである」とのお尋ね、すると盲目利の申しまするには　新左「ハイ、私は町人のことでござりますれば、知行と云つては別段入りませんから、何卒鳥目で少々頂きたうござりまする　秀吉

「面白い奴、イヤ望みに任して遣はさん、何程遣はさう　新左「何ケ年と云つて長い間頂かいでも宜しうござりまする　秀吉ムヽ、新左「依て私の願ひまするは一日一文倍增しにて一ケ年の間頂きたうござりまする、恐れながらその儀はお謝絶り遊ばすがものと見ゐまして　侍臣「御前、恐れながら秀吉オヽ、易いことぢや、遣はすである」するとお側の衆は考へたお宜しうござりませう　秀吉ヘヽア、其は又何故である　侍臣「一文倍增しにて一ケ年と云ふ數になりまする、それは一寸算盤を持たねば口では言へぬ程になりまする、それはお謝絶り遊ばせ」言はれて秀吉公も初めて氣が附きました　秀吉左樣か、此奴なか〳〵手に合はぬ奴であるぢや、新左衛門、矢張り錢は可かぬから米に致し呉れよ　新左「左樣でござりますか、それでは袋に一杯だけ頂きたうござりまする」何うせ此奴の袋だから、妙な袋を拵へて來るであらうが何程のことやあらんと思召し　秀吉望みに任して遣はすである　新左「有難うござりまする、

石川五右衛門

兩三日のうちに袋を携へて頂きに出ませう」秀吉「よ、、取りに參れ」

すると新左衛門は立歸り、日ならずして仙花の紙を接ぎ合して一の

袋を拵へて持つて參りましたから、秀吉公その袋の寸尺を計らせ

ますると、米倉一杯に殘さる位ゐの大きな袋でございましたゆゑ、

これ亦秀吉公の方から願下げでございまして、實に手にも足にも合

はぬ奴だと驚かれました、そりやア其はすでございませう、新左衛

門、秀吉に仕へてよりは時々殿下を困らせましたが、或時殿下に對

ひ新左「御前明日新左衛門宅へお越し下されますれば、四百餘州の漢

土より渡來りましたる羊の頭を差上げませう」と申し出でますると

秀吉「ハ、ア妙なものぢやな、そりやア宜からう」と氣輕の秀吉公で

ございますから、翌日は朝早くより新左衛門の宅へお出でになり、

如何なる料理を出すやらんとお待ちになりましたが、已刻になつて

も茶も出さず午刻になつても菓子さへ差上げません、何うせあゝ云

ふ變つた奴だから、妙なことをして喫すに違ひないと、やツと空腹

石川五右衛門

しいのを我慢なさいましたが、終ひには最う到底辛抱はならぬやう

になつて參りました 秀吉「新左衛門、予は最う空腹にて眼が眩ひさう

になつて參つた、縱令湯漬にても苦しくないから一杯食せぬことに

は最う辛抱はならぬわい 新左「御有理でござりまする、それでは差上

げませう」と云ふので漸く正未刻に至つて澤庵で湯漬を出しました

それを秀吉公召喫つたとき新左衛門は「御前、如何でござりました

秀吉「ふ、、余は陣中にて樣々の食事もして見たが、空腹いときに不

味いものなしと申す諺の如く、イヤ、思はず過したことであるわい」

と仰せられ遂に申刻過までお遊びになりましたが、なか〳〵料理

を出さうとは致しませんから、秀吉「時に新左、羊肉の馳走は何う致し

た 新左「それは前刻差上げました 秀吉「あれは澤庵で湯漬ではないか、

新左「正未刻の時は未の上刻でござりまする 秀吉「ア、……扨々一杯掛け

居つたな」と秀吉公も弱つてお了ひなさいましたが 秀吉「イヤ、成程

未の上刻には違ひないが、四百餘州の漢土から渡來つたとは何う云

石川五右衛門

ふ仔細か 新左「然ればでござりまする、卿々十二支の干支を繰るも、暦を繰るも、我朝四十四代元正天皇より四十五代聖武天皇の御宇、初めて出來たるものにして、その元漢土より渡來つたものでござりまする」云はれて秀吉公も致方なく 秀吉「予も其方には敵はぬわい」とお笑ひになつて、澤庵で濁酒を喫つたなりでお歸りになりました實に秀吉公も曾呂利にはお困りになつたことは度々でございまする、扨て秀吉公は曾呂利をお召抱へになりましてお手許近くお使ひになりましたが、至つて御寵愛になりました、その後も玉遙舍に在つて日毎四國の戰況を開召して居られましたが、一日茶の湯の會を開かんと南州寺に於てお催しに相成りました、亭主は殿下秀吉公、お客は細川幽齋、曾呂利新左衛門、お手前は材木町の中邊に住ふ千與太郎、俳名利休、日本一の宗匠でござりまする、釜は蔵屋の釜を懸け、お茶碗は芝形付、お茶器は肩低、何れも名器を取寄せて茶の湯をお備しの際、珠玉の街に入込んで、殿下の眼を慾かさんと窺ひ居りま

石川五右衛門

したる盜賊の巨魁石川五右衛門、南州寺の茶の湯の席へ忍術を以て忍び込みましたが、是でございまする、芝居でするとと「駕籠負うた」が訝しいか、怖い男が目に着かねかい」と云ふ臺詞がございますがそんな馬鹿なことはございません、扨て五右衛門は四邊の樣子に注目いたしますると御亭主は關白秀吉公、宗匠は千利休、お客は細川曾呂利の兩名、一器量優れし凡人ならざる者ばかり集まつて居るのですから、寸毫も物に隙と云ふものがございません、このとき五右衛門ヂッとその樣子を窺ひますると、肩低の茶器だけにはお氣が付いて居りません、依てこれを隱して膳を拵き呉れんと、密とその茶器を取つて行かうと致しました、このとき早くも細川幽齋これを見咎め 幽齋「怪しのことよ、茶器が宙を飛ぶとは……」と言ひつゝ壓拇の小刀に手を掛けて逐はんとするを、秀吉公はお聲を掛けられ 秀吉「幽齋、捨て置け、正法に不思議なしとやら捨て置くが可いぞ」ともうまする、すると曾呂利はツカ〳〵と起つて參り 新左「染めねども已

がいろ〳〵自から、松は緑りに雪は白妙」と詠みますれば、忽ち五右衛門の姿は歴然とその處に現はれました　五右衛門口惜しや曾呂利の爲めに我が忍術を挫かれしか」と云ひつゝ茶器を投げ捨て、そのまゝ姿を隠しました、秀吉公は「扨ては彼れが今世に名高き盜賊の巨魁石川五右衛門と云へる者であるか」と仰せられて驚かれましたが、その日は遂にそのまゝお茶の會は濟みまして御ございまする、扨て五右衛門は南州寺に於て曾呂利の爲めに忍術を破られて思ひを果さずこの上は何卒いたして今一度秀吉の目を驚かし呉れんものと、殿下を付け狙ひましたが、愈〳〵これから五右衛門中國に於て、殿下の使者を欺きに掛ると云ふお話しに引き移りまする。

第十回

扨て四國の取ひは、加藤清正、小早川、吉川等、伊豫の國は道後の浦に渡り、長曾我部の臣下徳井刑部を討取り、その勢ひに乘じて松山へ龍り越し、高尾山久松の城主伊曾呂井兵庫、同苗内匠、是等の籠れるその城を抜き、追々追つて四國十八將の人々には、吉良播磨守、中内源兵衛、久武内藏之助、桑名太郎左衛門、同苗彌次兵衛、熊谷三郎右衛門、丹治直晃、此人は後藤正の臣と相成りて吉村吉左衛門と改名した人でございまする、就ては燒山に於て長曾我部彌三郎と清正と星の如くでございまする、金子傳兵衛等、何れも有名の豪傑の一騎當、後藤又兵衛基次の働きなぞゝ云ふ面白いお話しもございまするが、これを續いて丁ひますから、太閤記に流れて石川五右衛門は何處かへ消つて居りますする、續いて九州征伐でございまする、四國征伐はお預かりと致しますから、これもなか〳〵面白い講談、清正仙臺川の戰ひに、眞田幸村敵の城を乘取り、馬面浮腹卷の計略なぞゝ云ふ、眞田、後藤の働きのお話しもございまするが、これ亦一足飛びとして、扨て秀吉公は四國を鎭め九州を治め、凱れも日本四つの海を波靜かに鎭め給ひ、その上關白は辭職して秀次に讓り、

自ら位ゐを隠つて太閤とおなりなさいました、これからが眞實の太閤記でございまする、その初めは秀吉記、天正十四年からが關白記愈々九州征伐を給つて朝鮮へ掛つて始めて太閤記と云ふ名が出るのでございまする、所が秀吉公今はこの日本のうちを掌握して何思ふことはございません、依て只この上は只の三日にても三種の神器を御所からお預けを願ひたいと斯う思ひました、殊に當時の御帝には飽くまでも秀吉を御寵愛になりましたから、そこで秀吉公參殿の上天機を伺ひ奉り、寵を恃んでこの事を願はんものと、既に三種の神器を……とまでは白しましたが、これ程の人物ではございまするが舌釣上つて後の言葉は出でませんでございました、そこで秀吉深く畏ぢ恐れて引き退り、ア、勿体至極もなきことゝその罪を謝し、何がなこのお詫びを致さんと種々考へましたが、扨てこれと云ふ考案もございません、そこで聚樂の御殿へ細川、曾呂利等を召出し、段々御相談になりました、すると曾呂利の申しまするには 新左「然れば往古禁裡には八百八公卿大内裡と云ふものゝ設けありましたと承りますが、今殿下の御威勢を以て出來へ給はんは最と易きことゝ心得ますゆゑ、これを御營造あつて奉られては如何でございまする、

秀吉「ム、それは至極宜しからん、然らばその大内裡を出來へることに致さう」そこで先づお手許金を出して、京都に於て土地摑んでその地均しに取掛らせやうと致しましたが、その地均しだけでも秀吉公のお手許金では足りません、そこで秀吉公はそれはなか／＼非常な金の要ることであつて思ふに任せぬが、如何いたさば宜からうと曾呂利に御相談なされまするを 新左「それは何でもないこと、大内裡の七や十の御營造になりましても金は餘るほど取る處がございまする 秀吉「ム、ウ、左樣に金を出す處が何處にある 新左「其は餘の儀にあらず、人皇十四代仲哀天皇の妃神功皇后三韓を征伐いたされてより應神天皇の朝までは彼國より我が日本へ對けて貢獻を奉りました、然るにその後は毫しも我國へ貢獻を贈らず、尤も往古は新羅、高麗

百濟、この三ケ國を以て三韓と稱しましたが、今は合して朝鮮となり、大いにその頃とは異なる所もあり、彼國も進歩んで居るでもありませうが、なアに殿下、今日本の勢ひを以て、殊に殿下の御威勢にて彼の金を取寄せることに相成らば、何の造作や候はん」と申上げました、これが普通一樣の方にこんな事を申上げたなら、狂人かと思はれませうが、云ふ者が曾呂利で聽く人が秀吉公「よ、、面白からう」と膝を打つてその妙案をお稱めになり、直ぐにその場で細川幽齋に書面を認めさせ、使者を選んで朝鮮國へ遣はしました、所が彼國も往古とは違ひ、この頃には水軍將軍李舜臣、呉惟忠などと云へる者が居りますから、往古のやうな工合には行きません、左樣な金を今一時に返濟なぞよは思ひも寄らぬ、ならば日本の腕盡にて取れるなら取つて見よと云はんばかりの返事でございまする、是に於て秀吉公、汝れ猪牙才なる腰唐人、然らば一攻め攻めて呉れんとこれより愈々朝鮮征伐と云ふことに一決いたし、サア遽かに軍勢を

御催促、所有領主なども追々京師へ上り來り、夥つて戰爭に行かうと云ふことになり、これ亦清正、小西等が先陣途中にて小西、加藤の先陣爭ひなどゝ云ふこともありまするが、それは扨て措き、追々秀吉公もお乘り出しと云ふ着になりました、この勝元と申しますと、當所は風本と申しまして、すると秀吉公は渡海の首途に風本などゝは面白からぬ、以來はこの地を勝元と改めよとの仰せが下りました、鶴の一聲それより豐岐の勝元と改りましてございまする、それより肥前の名護屋へ到着なりました、その頃の名護屋と申すは今の島原のことでございまする、秀吉公當所に本陣を据ゑ、寺澤志摩守、龜原右馬之助、朝鮮御案内と云ふことになりましたが、殿下のお積りでは名護屋の灣港より朝鮮まで船橋を架けると云ふ位ゐのお勢ひ、實に洪大もないことでございまする